

五年の創建にして、熊野三山の第一山と稱せられ、其靈驗の赫著なる、歴代皇室の尊崇のすぐれたる、實に歴史に富み古蹟に富みたる神社なり。現今社殿を四社に分ち、舊石寶殿の八社を合せて十二社と爲す。大祭は四月十五日にして、賽者遠きより至る。

熊野川 熊野川の奇は蓋し天下に冠たりとは大八洲遊記の作者も言へり。然れども吾人の見る所を以てすれば、未だ間然する處なしと言ふにあらず。其の弊所弱所を擧れば、水の甚だ清からざるの一なり、兩岸の相開けたる其二なり。山の比較的深からざるその三なり。岩石の多からざる其四なり。されどこれを除きては、瀑の多き、屈曲の頻繁なる、筏舟の多き、頗る雅客の心を惹くものあり。先、本宮を出て、屏風島を過れば、深潭量るべからざる網代ヶ淵は竊然として其前に開け、五十丈ばかりの大巖の將に倒懸せんとして茲に重れる、殆ど過ぐる者をして膚に粟を生ぜしむ。佛岩、三重岩等を左右に見て宮井に至れば、北山の長流東より來り會し、風光愈よ美なり。小舟を過ぎて揚枝に至れば、一度開けし山再び迫りて、その兩岸の山の高さ、處々に小瀑のかゝれる、宛然支那大陸の山水を望むの思ひあり。川は或は屈曲を爲して、深山の中に入り、右に布引の瀧、銚子口の瀧、左に吹雪の瀧等を懸く。此間、山影は山影と相争ひ、溪流は

溪流と相戦ひ、水鳴り、石走りて、舟の震盪すること甚し。淺里、相賀等皆この水聲山色の中に散在せる山村なり。瀬原に至つて、山や、舒び、水漸く緩に、遂に新空の平地に出づ。

北山川 大八洲遊記の作者は、口を極めて熊野川を賞揚しながらも、猶熊野川のこの北山川に及ばざること遠きを言へり。蓋し、山深く流急に、瀨入町のごとき一大奇景を有したればなるべし。この川の勝を探らんと欲せば、熊野川の河舟を小舟村にて捨て、四瀧の渡を渡りて、川の右岸を三里ほど上流に溯らざるべし。玉置口にて舟を僦ふを必要とす(舟賃五六十錢)水子舟を引くと二三町、溪の入口に至りてこれを放つ。其風景の娟麗にして中に無限の寂寞を籠めたる、天下又この奇景ありやと驚かるゝばかりなり。大八洲遊記に、其景を叙して、其崖巖者如壁之削、圓者如釜



からず。この間、水は山に従つて幾轉回を爲し、竹筒村の時を越れば、忽然として、山の彼方なる木通呂に出づ。而して瀨入町の入口なる玉置口は、此地より僅かに一渡頭を隔てたるのみ。瀨入町の景を見んと欲せば、

之覆、横者如屏櫓之環、蹲者如虎豹、層者如樓閣、縷裂爲紋、大者如氷裂、細者如穀網、或附陲、或平行、可步可攀、有岩洞、皆窺似神仙所居、有屹立山中者、有爲蓬壺之容者、一崖未畢、一岨又至、應接不暇、盤亘橫列、如此者凡七八町、と言へり。まことに形容し得て眞を盡せりといふべし。崖の盡る所、蕭然たる人家三四軒、請へば即ち人をして泊せしむ。地を田戸と稱し、大和十津川に赴くの間道に當る。此溪の發見は、明治以後にありて、石井三重縣知事が縣下巡回の時、始めて此溪あるを知り、大阪の文章家藤澤南岳此地に遊びて、其奇を記せしより、遂に天下に名あるに至れるなり。(口繪寫眞参照)

新宮町 熊野川の山を出て海に注がんとする處にあり。紀州南部の一都邑にして、郡役所、裁判所、稅務署、等皆此地にあり。地勢は山を負ひ、海に添ひ、川に臨みて、百貨の集散甚だ盛なり。只、熊野川の河口泥沙深くして舟を繋ぐに足らざるが爲に、一里以西の三輪崎を以て、汽帆船の碇繋所と爲せるを不便とす。人口一萬四千餘を有し、市街の光景甚だ整頓せり。新宮城址は市街の西一丘阜の上にあつて、源平の頃、新宮十郎義盛の居城たり。維新前は水野氏これを領せり。城址の東、海岸に秦徐福の墓あり。

(口繪寫眞参照)

熊野速玉神社 熊野三山の一にして、景行天皇の御宇、此地に社殿を創立せり。昔は社殿宏麗にして殆ど人目を驚かすばかりなりしも、明治十六年、舞馬の災に逢ひ、今は纔かに形ばかりの社殿を營みたるに過ぎず。

三輪崎より宇久井を過ぎ、濱の宮の小社より右に入れば一里にして市野々村に達す。村は那智山の入口とも稱すべく、仰いて神社の髣髴を見得るのみならず、四邊に聞えわたれる瀑聲の高きをも聞くことを得べし。

那智山 人は那智山の深山の中にあるを思ふへけれど、行きて見れば、山淺く、里近く、これにては下駄穿にても行き得らると思ふばかりなり。麓の村家は稍阪路になれる處に層々相連り、旅館あり、茶亭あり、以て參詣者の便に供せり。村の盡頭より、古杉樹の列は左、山頭に靡き渡りて、其の石階の數殆ど二千に及べり。熊野夫須美神社は、その半腹の平地に鎮座し、社格は縣社なれども、古來那智山權現として、その靈顯の赫著なる、兒童も亦これを踏んず。樓門、廣門、大拜殿ありて、三方に諸神殿聯立す。傍に青岸渡寺あり。天台宗にして那智山と號し、西國第一番の札所なり。仁徳天皇御宇

裸形上人の開基にして、推古天皇の御宇、始めて伽藍を創建せり。本堂は十三間四面にして、天正十八年豊太閤の丹羽秀長をして建立せしめたるもの。これに賽して、左の小徑を七八町下れば、有名なる

那智瀑の下に出づ。日本第一の瀑として其名甚だ高けれど、日光の華嚴瀑などに比して、高さも、美しさも、雄大壯嚴なる點も皆劣りたるは惜むべし。殊に、山の淺きと、瀧の岩に傳りて落つるとは、この瀑をして雄大の趣を缺かしむ。されど海内有數の名瀑たるは勿論なり。

檜野浦の紀念碑 古座村の對岸、大島あり。その檜野浦は明治二十三年九月、土耳古の軍艦エルドロール號が沈没したる處にして、其附近に一基の紀念碑を建つ。碑の高さ一丈一尺、周圍に玉垣を造せり。碑の近傍に、溺死者の墓地あり。南北二十間、東西十一間、特派公使陸軍少將オスマンバンシャ以下五百八十一名の遺骸を葬れり。

新宮より南北牟婁郡の地に入れば 木の本町 は七里ヶ濱のまさに盡んとする所にあり。人口三千八百人餘を有し、郡役所、警察署等ありて、郡中尤も繁華の地なり。南の濱に花の窟と稱する巨岩あり。高

さ大凡百七十尺、幅凡そ三十間、屹として海岸に峭立し、岩頭の松根より一條の注連を松並木の梢に懸垂し、岩下に玉垣をめぐらして、以て火の神を祭れり。此邊、熊野浦に臨み、瀧の起伏せるさまは、山の蜿蜒たるさまと相待つて、一種他に見るべからざるの奇觀を呈せり。

木の本町より路は海山の險しき間に入りて、新鹿、二木島、賀田、二木里等の諸驛あり。それより猶行くこと五里餘

尾鷲町 は北牟婁郡にありて、東西十町、南北二十餘町、人口八千三百餘。鉦買家商の多きを以て、其名四隣に聞ゆ。新宮を距ること十四里二十町、三重縣津市を距ること三十里三十町。町の西五六町を隔て、中村山あり。耕地の中に孤立せる一小丘陵なれど、海山の眺望に富めると、躑躅の花多きを以て有名なり。其他尾鷲神社、庫の巖の竹林等あり。

(尾鷲以東、伊勢志摩兩國の海岸は、上卷三重近傍の章下に述べたれば参照すべし) 要するに、熊野地方に赴かんとする人は、大阪熱田間を往復する大阪商船會社の汽船に乗りて、東若くは西より、その志す處に赴くを便とす。其汽船は小なれど、海岸を縫

うて到る處の海灣に寄港するを以て、旅客の欲する地に自由に上陸するを得なければならぬ。されど風濤の高き時は、危険の恐おれは見合すべし。南紀の案内此に終りを告げれば、今は轉じて大阪市に移るべし。

(五) 大阪市内

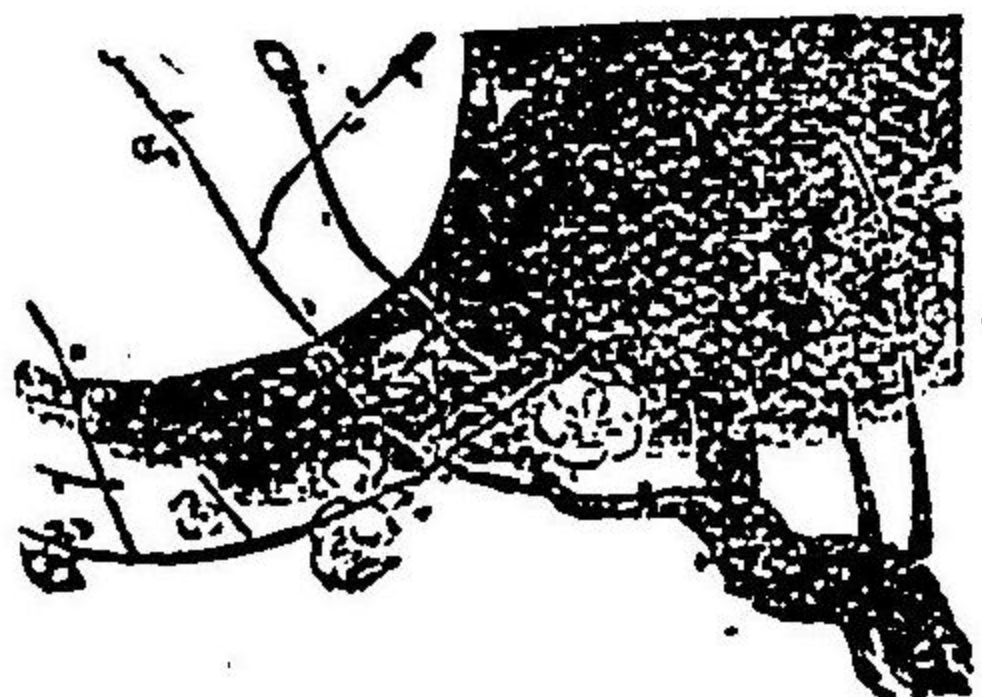
大阪の沿革

廣き平野の彼方に美しき生駒の連山を繞らし、濶き海灣を隔て、淡路島山に對し、良港を控え、碧流に臨み、本邦中樞の要區を占めたる大阪の沿革を記述せんには、遠く二千年餘の昔に溯らざるべからず。されば、その間に起りし種々の沿革を詳しく述ぶるは到底紙數の許さざる所なるをもて、爰にはその梗概を掲ぐるに止めん。皇祖神武天皇の東征し給ふや、此の邊り波荒くして御船の繋ぎ難かりければ、浪速と名づけ給ひしより、國の名をしも爾か呼ぶに至れり。その後、景行天皇の御宇より、大伴氏世々此地を領せしかば、大伴の御津の濱など稱し、當時館邸のありし大江岸は、今の石町邊なりと云ふ。應神天皇の二十二年大隅宮に遷都の事あり。次で仁德天皇の即位

元年、高津宮に遷らせ給ひ、四年、民の炊煙揚らざるを覽して、租税課役を免じ給ふと七年、聖の御世として青史に著るき所以。同じき十一年には堀江を宮北に堀り、十四年京都に大道を開き、又、宮の南門より河内丹比邑に至る道路を作らせ給ふ。欽明天皇元年、祝津宮に行幸ましまし、推古天皇の元年四月、聖德太子四天王寺を建立し給ひ、十年、隋の使臣を接待せし爲め三韓館を建て、二十一年、大和の京師への大路を通ず。六年、隋の使臣を接待せし爲め三韓館を建て、二十一年、大和の京師への大路を通ず。舒明天皇二年、三韓館を修築して鴻臚館と名づく。孝德天皇の文化元年、長柄豊崎に遷都あり、二年、京坊の制を定め給ふ。文武天皇白鳳六年、攝津職を置き、八年羅城の工成る。文武天皇大寶二年、職員令の制を定め、聖武天皇天平十六年、此地に遷都し給ひ、十七年、再び平城に遷幸し給ふ。孝謙天皇天平勝寶八年、難波宮に行幸あり、桓武天皇延暦十二年に至りて、攝津職を停め、國司の治下とし給ふ。後鳥羽天皇の御宇、武家の政權を掌握するに及びて、治法一變し、後醍醐天皇の建武中、楠正成河内守に兼ぬるに攝津和泉兩國の守を以てしたりしが、南北兩朝對立に際し、後光嚴天皇應安七年、細川頼之來つて此地を治め、後土御門天皇の頃、僧兼壽、本願寺別院を置き、此頃より漸くはその殷賑を加へ來りぬ。後奈良天皇天文元年、僧光教、本願寺別院を改めて石山に

築城し、正親町天皇天正十一年、豊臣秀吉、大に石山城を改築し、市街を擴め、堺、伏見の町人を多く移住せしめ、後陽成天皇慶長十七年、安井道頓、道頓堀川を開鑿し、十九年、徳川氏の軍來りて大阪城を攻め、後水尾天皇元和元年、再度の攻撃を以て、城遂に陥る。同年六月、松平下總守忠明を此に封じ、五年、内藤信正を以て城代とし、城を番城として幕府之を直轄し、市民を撫卹し、貨殖の道を講じ、京橋玉造の二口に定番を置き、東西兩町奉行所を設け、吏胥には與力、同心あり、その下更に幾多の分掌あり。又、北組、南組、天満組の三郷には、いづれも總年寄といふものありて市政に與り、總年寄の下に在りて町務を執るには町年寄あり。此時に當りて、全國の諸藩、物産の交易を掌らしめんが爲め、各、市中に倉屋敷を設けたりしかば、忽ちにして商業の殷盛を來たし、町民の權勢勃然として揚がりぬ。斯て明正天皇寛永中、香西哲雲、九條島と四貫島を埋立て、靈元天皇貞享中、河村瑞賢三年の歳月を費して、安治川を開鑿し、その他の諸川にも大土工を施せり。東山天皇寶永元年、大和川の流域を換へて新大和川を掘り、仁孝天皇天保二年、天保山を築く。同八年、大鹽平八郎の亂あり。爲めに市中の豪家多く焼失せり。徳川慶喜政權を奉還して、明治の大革新となるや、市政大に改まりて、大

阪府を設けられ、三郷の稱を廢して東西南北の四大組となり、總年寄亦廢せられ、大年寄の下に助役、中年寄、町年寄を置かれしが、明治五年、更に革めて總區長、副總區長と爲し、次いで戸長をその下に置かれぬ。その後幾多の變遷を経て、廿二年、特別市政の實施となり、三十一年、市制の執行となりて、全然自治制の實を表はし、之を總管するには市長あり。各區を總ふるには區長あり。斯くの如く行政の制度に大異動を來せしと同時に、未曾有の大工事は頻々として起りぬ。淀川の改修すべきかは何人も想像し能はざる所。而も近き將來に於て竣成すべき大築港が、如何に商工界の進歩を助け、實業界の發達を促し、物質的現實界の向上に如何ばかり多大の關係を有すべきかは、世人の注意を怠らざる所なるべし。



大阪の地理

大阪の地たる、三方に遠く山岳を繞らし、西方に港灣を控え、我邦中樞の地位を占めたり。市街の東端は猫間川の沿岸に及び、南は今宮の關西鐵道線路を限りとし、西は遠く海濱に至り、北は官設鐵道線路を越て西成郡に接す。全市を分つて東西南北の四區となし、東區は、北、大川及び土佐堀川より、西横堀川一帯を限りとし、南は順慶町内安堂寺橋通りを境として東、東成郡に接す。南區の北端は東區の南端と隣り、西、西横堀を限りて、東南一帯東成郡に連る。西區は、土佐堀川より傳法川を北の限界とし、西横堀より鍵の手なりに曲りて、木津川筋をその東端の境とし、西方は總て大坂灣の岸に及び。北區は、土佐堀川、淀川、寢屋川以北全體を占め、北方西成郡と錯雜して接す。各區の區劃は以上述べたる如くにして、その間を縱横に貫通せる河流の夥多しきと、到底記し盡くされざる程にて、これに架せる長橋短梁は實に二百四十に餘り、日本の水の都として、その名譽を中外に輝かせり。今、川流の重なるものを記さんに、洋々として畿内の平野を緩流し來れる淀川の一たび市中に入り込むや、櫻の宮、造幣局の邊りを

大曲りに曲りて天満橋下に、寢屋、猫間、餘江の三流を合し、天神橋を過ぎて北に堀川を、南に東横堀川を分かち、中之島東端より全く二分して、北なるは堂島川、南なるは土佐堀川となり、堂島川は大江橋上流にて更に曾根崎川(蜷川)小流を分ち、再び堂島大橋附近にて本流と合し、土佐堀川は肥後橋近くにて西横堀川を分ち、中之島西端に至るに及びて一たび堂島川と合ひ、更に分岐して西するものは安治川、南するは木津川となり、木津川亦更に尻無川の分流を出せり。其他東横堀川より分れたる長堀川、東横堀の下流なる道頓堀川を初め、西横堀川の分流たる江戸堀川、京町堀川、阿波堀川、立賣堀川等あり。更に溝渠を數へんには、百間堀、古川、逆川、六軒屋川、薩摩堀、入堀川、等あれど、西部の新埋立地には幾多運河を開鑿するの設計あれば、此の上、河流の如何ばかり増加するやも計られず。市内の河流斯くの如く數多きが故に、その河に依りて區劃せられたる小區域の處々、或は有名なる神社佛閣の附近など、古へより固有の名稱を附けられ、今尚その通り名となりたるもの多し。中に就きて、名高きものを擧ぐれば、東區の船場(東西兩横堀間)、上町(東横堀以東)、高津(高津神社附近)、玉造(城南)、南區の天王寺(天王寺附近)、今宮(天王寺の西方)、木津(今宮の西方)、西濱(木津の西方)、難

波(木津西濱の北)、道頓堀(道頓堀川南岸)、島の内(道頓堀長堀兩河間)、西區の土佐堀、江戸堀、京町堀、靱、阿波座、薩摩堀、立賣堀、(何れも同名の川に依りて限らる)、新町(新町橋以西)、南北堀江(長堀西横堀道頓堀の三流にて限らる)、江の子島(木津川百間堀に挟まれたる島地)、松島(木津、尻無二流に挟まる)、三軒屋(木津川西岸)、九條(尻無川西岸)、北區の安治川(安治川兩岸)、上下福島(堂島川以北)、野田(下福島の西北)、梅田(上福島の東)、曾根崎(梅田以東)、北野(曾根崎の東北)、天満(曾根崎以東)、網島(淀寝屋會流點附近)、中之島(堂島土佐堀兩流間の島地)、堂島(堂島會根崎兩流間)等にして、全市の區域は東西二里廿四町、南北二里十九町に及び、時々刻々に民家の附近村落に向ひて建て擴げらるゝ模様なれば、市の疆域は年一年とその膨脹し行くを見るべし。

大坂の交通

流石我邦中樞の要區を占めたるだけ、日々集散する數千の旅客、數萬の貨物を運搬する鐵道は合はせて八線の多きあり、左の如し。

- (一) 新橋神戸間の官設東海道線
  - (二) 神戸より官線に連絡して下關に至る山陽鐵道會社線
  - (三) 梅田以北本州縱斷の阪鶴鐵道會社線
  - (四) 淡町以東の關西鐵道會社線
  - (五) 難波以南の南海鐵道會社線
  - (六) 汐見橋以南の高野鐵道會社線
  - (七) 梅田湊町間の關西鐵道會社東線
  - (八) 梅田より築港附近に至る西成鐵道會社線
- 以上の各線はいづれも、直接間接に大坂市街と連絡し、就中(七)の線路は、市の北端梅田より城東を迂回して淡町に至り、孤線狀を爲して市街の三面を包繞せり。その他、加茂より分れて官線大阪驛(梅田)に至る關西鐵道の支線、天王寺より分岐して住吉に達する同會社の支線及び間接々續線には、柏原以南の河南線、王寺以南の南和線等あり。又、水路の交通を記せば次の三線あり。
- (一) 大阪灣の海路を取るもの

(一) 通ひ汽船に由りて、淀川筋を往還するもの  
 (二) 巡航船に由りて、市内の河流を往來するもの  
 (三) 右の内、一は、重みに日本郵船會社、關西同盟汽船、大阪商船會社、東洋汽船會社等の汽船に由りて、各地と連絡せられ、二は、伏見通ひの航路にして、古來有名なる三十石船の往來せし面影を存せ、今、八軒屋より通ひ汽船を出だせり。三は、明治三十六年の博覽會を機とし始めて開業したる大阪巡航合資會社の事業なり、その航路は大川、堂島川、土佐堀川、安治川、木津川、道頓堀川、東横堀川、西横堀川等に及び、各所に乗降場を設けて切符を發賣せり。

この外、花園町西詰より、築港に至る間の市營電氣鐵道あり。是れ實に大阪に於ける電氣鐵道の嚆矢にして、更に線路を延長して、梅田其他と連絡せしめん計畫あり。工成るの日は、巡航船と相待つて市内の交通上更に一生面を開くべし。

又、市内の各川を往復する日本船の總數は殆んど一萬隻に垂とし、絶えず貨物の運輸を掌れり。人力車亦市内到る處に駐車場を設けたれど、各停車場構内にて乗車切符を買はゞ、決して賃錢を食らるゝとなく、巡航船乗降場附近にて赤旗組の車に乗るも、値安

にして安心なるべし。

旅館

同じ旅館の内にも、中之島、土佐堀、今橋、北濱、大川町の邊りに在るは、多く紳士向きの高等旅館にして、中央船場の邊りには、各地仕入商人の定宿多し。堀江、鞆の近邊、各間屋筋の取引客多く、中之島土佐堀の西部よりかけて、川口高津邊には料理屋にて旅館を兼ねるもの多し。かくの如く、その場所々々によりて各特色を有する故、随つて旅館の種類を概すべし。次には市内著名の旅館を紹介せん。

銀水樓(中之島一丁目)、自由亭(同二丁目)、花屋、同東店西照庵(同三丁目)、吾妻屋、





伊豫屋(同四丁目)、大黒屋(宗是町)、加賀屋、錦波樓、丸三(北濱三丁目)、出雲屋、炭屋、龜谷、福岡屋(同三丁目)、愛々堂、南與(同四丁目)、紫雲樓(今橋四丁目)、泉米(同五丁目)、明石屋、水明館、木屋、池喜、備後屋、讚岐屋、いづ六、大黒屋、香月樓、岩川樓、北川樓、千秋樓、泉松樓、金剛館(大川町)、佐々木、永井樓、備中屋(土佐堀一丁目)、出雲文(江戸堀北通二丁目)等なるべく、仕入商人の定宿としては、花房(道修町一丁目)、若村屋(平野町二丁目)、井筒屋(瓦町四丁目)、泉(備後町一丁目)、因幡屋(安土町四丁目)、加賀屋(南本町三丁目)、河内屋(南久太郎町一丁目)等、回酒業を兼ねるものは、淡路屋、河内屋(中之島六丁目)、松本、葉屋、備前屋、小豆屋(七丁目)、河野、渡邊、菅、丸萬、佐藤、木屋、平野、中務、勢合館、桐屋(上佐堀通五丁目)等、ほんの一時泊りには、静觀樓、鐵城館、梅櫻樓、花菱、瓢の屋、茨木屋(梅田町)あり。その他和泉屋(京橋二丁目)、小林、大和屋、竹廣屋、檜波仁、今彦、山熊、北餅屋(同三丁目)等は心安し。料理屋兼業としては、好静館、西照館、春の屋、高津屋、松村屋(生玉)、松盛館(高津六番丁)、彦湯樓(小橋東の町)等、遊覽者宿としては、吉田、戎屋、藤屋(九郎右衛門町)、小橋吉、葛城屋、大野屋、淡彌、山本、大和屋(鰻谷)、藤屋、末

廣、八幡屋、まひこ樓、大黒屋、菱梅屋、平野屋、芋仙(宗右衛門町)、河與、大和屋、明石屋、角屋、玉亭、壽老館、ます屋、泉屋、平與、折平、今市、金喜、根來屋、岡の屋、玉屋(久左衛門町)等を推すべきか。

東部の遊覽地

旅宿は、市内尤も交通の便を極めたる、東區大川町あたりと定めて、先づ遊覽の方面を東に向け、豊太閤の遺烈を仰ぐに足るべき、古金城を首めとして、おもむるに案内の筆を進むべし。

大阪城 大阪見物の随一は、天下の名城と聞えなる大阪城これなるべし。この地もと石山と稱へられ、市内の尤も高燥なる地區を占めたり。今を去ると四百餘年前、後土御門院天皇明應五年(足利將軍義澄)の秋、本願寺第八世の法主兼壽(蓮如上人)この地を相して別院を建立し、三十餘年を歴て光教に至り、京都の日蓮宗に當らんがため、山科の本山より退きて此に居り、加賀の築城工を召し、堀を鑿ち壁を堅らし、以て本願寺の本山となせしより、勢力大に加はりしかど、光教寂して光佐の嗣ぐに及び、偶々織田信

長と好からず、天正二年以來屢々その攻撃を受け、同八年に至りて遂に紀州鷲の森に退去し、城を信長に譲る。その夜火を出だし、滿城の建物悉く烏有にせり。後、天正十一年豊臣秀吉の居を此地に定むるや、諸國の人夫を役して大に改築の工を起し、宇内無二の堅城とはなりぬ。彼の有名なる征韓の議を決したりしも、實に城内山里の茶室なりしなり。秀吉爰に留ると數年、文祿四年去て伏見に徙り、慶長三年薨じぬ。其子秀頼諸侯を隨へて大阪城に還りしが、同十九年家康に攻められ、一たび和を講じたる時、關東勢のために、總構、三の丸、二の丸、大手、京橋、玉造、三馬、出曲輪、及び南曲輪の堀、石垣など全く毀たれ、さしも莊麗を極めたりし金湯の名城も、只纔に本丸一曲輪を殘すの外、悲しや荒涼蕭殺の境状を面りするに至りし上、翌年又も關東の大軍に攻撃せられて、全く落城したりけるが、その際臺所より火を發し、見る／＼瑤館瓊樓は灰燼に歸しぬ。元和六年、徳川秀忠關西の諸侯に修築の工役を課して再築の事を計り、寛永三年、家光更に殿館の造營を起し、九年の長さ星霜を経て、漸くその舊觀に復したりしが、萬治三年、寛文五年、天明三年の三たび、雷火に罹りて、殿館、天主矢倉、大手門など焼失したりければ、十二代將軍家慶の時に至りて、大に修築の議を起し、同十四年

富豪鴻池善右衛門等百數十名に命じて、金百五十五萬五千五百兩を獻せしめ、十一年の後(安政五年)に至りて、殿館、樓櫓、大手門など、寛永の舊觀に復しぬ。慶應元年、征長の議起るや、將軍家茂軍を統べて江戸を發し、來りて城に入る。これを寛永以來の入城とす。同三年十月十五日將軍慶喜、政權を奉還し、二條城を退きて本城に入り、再び討薩の表を上らんとて、京師に上る途上、先驅計らずも薩長の兵に遇ひて衝突し、戰敗れて海路より江戸に逃れぬ。斬しも留守妻木多宮等、長藩の將と城受渡の談合中、臺所より火を發して、有らゆる建物復皆舞馬の暴るゝに委しぬ。傷ましや、明應五年、僧兼壽が此處に別院を創立してより、三百七十有五年の間、火に遇ふと實に四回の多きに及ばんとす。斯くて、明治五年に至り、大阪鎮臺は此處に設置せられ、今や第四師團は、その本營をこの由緒ある城内に置けり。まことや、今日廢殘の餘に存する所のものだけに周圍一里に餘り、東南遠く玉造の原野に接し、東北は猫間、寢屋の兩流を擁し、大手(西北)、青屋(東北)、京橋(西北)、玉造の四門あり。壘は高く濠は深く、方數十間の巨石は城壁の内に見らるべく、人をして覺えず崇高森嚴の感を惹起さしむるものあり。近時、西南役戰死者紀念碑を中之島公園より城北偕行社の構内に移し、又、水道貯水池を天主

台に設けて、日々幾十萬石の上水を市内百萬の民に供給せり。青屋口の門を出づれば、大阪砲兵工廠あり。京橋口の門には、即ち大阪借行社建てり。(口繪寫眞参照)

鶴野 大阪城の縦竈既に了れば、更に歩を東方に向くべし。行くと幾くならずして鶴野の邊りに出づれば、平野川の清流蒼龍の馳するが如く、廣き原野に緩流するを見るべし。此の邊り、往昔大阪陣の合戦ありし處にして、河畔の草原を漫歩するの際、轉た無限の感慨に撲たれざるものなからん。

森の宮 鶴野古戰場の落莫たる光景を後にして、一縷の野徑を南に迎ると數町、玉造の街端、城東の杉山と對する邊り、一古祠を認めん。これ即ち森の宮にして、人皇十三代推古天皇の六年四月、鶴二喉を難波の森に養はしめ給ひし歴史を存する處とす。昔時は稱して鶴の森と云へり。又、崇峻天皇の二年、聖德太子、初めて四天王寺を玉造の岸に建立し給ひきと傳ふるを以てすれば、或は當時海波の此の邊迄も打ち寄せたりけんと思はる。而も今尙、當時の名稱を存せるもの、此處彼處に散點せるをや。境内には本殿、幣殿、拜殿などありて、春秋の候、老幼相擁して杖を曳く者多く、宛も城東小公園の觀あり。

豊津稻荷大明神 森の宮の南方二三町にして、豊津稻荷大明神の祠あり。俗に玉造稻荷と稱す。創建は遠く崇神天皇の御宇に起り、倉稻魂命、稚日女命、軻遇突智命、月讀命、下照姫命の五座を鎮めまし、が、爾來三たび火に遇ひて三たび改築し、現時の社殿は、明治四年の造營に係れり。

眞田山 玉造の南、關西鐵道玉造驛を西に距ると二町、低き丘阜あり。呼んで眞田山と云ふ。地はもと大阪城の出丸なりしを、慶長元和の役、眞田幸村の陣地を占めてより、斯くは呼び來れるなり。又、加賀宰相の陣屋を此處に設けたりしに由り、一に宰相山とも呼び倣せり。丘上に、姫山神社、三柱神社の三字あり。一は人皇十八代反正天皇の御世に創建して仁徳天皇を祀り、一は武川伊賀守といふもの、陸奥國青麻三光宮の分靈を勧請したるものとし、世俗の多くは三柱神社を三光宮と稱へ、姫山神社に至りてはその名々々聞ゆるなし。あはれ、遇不遇は獨り人生の上のみに止まらざるなり。

圓珠庵 眞田山の西南、餌差町にあり。庵の後庭、門柵を構へたる墳墓は、近古國學の泰斗冲契阿闍梨が枯骨を埋めし處にして、庵も、將た契冲が讀書せし離座敷を存せるにて、今猶そのかみの面影を留めたり。志あるものは、寺僧に乞ひて、阿闍梨が手澤

を留めたる遺著のくさくさを展覧せよかし。

仁徳天皇皇居址

丹珠庵の西南、東高津御差町の裏手に、一豊碑の屹然として立て

るを見ん。仁徳天皇が御位に即かせ給ひし折、宮造りせさせ給ひし處にして、後年そが

荒廢の跡、殆んど見るに堪へて、良平も「いにしへの高津の宮のあとふりて、虫の音の

みぞ秋を忘れぬ」と詠せし程なれば、あたら聖帝が宮居の址の、此儘湮滅に歸せんは口

惜しとて、大阪朝日新聞社の發議により、仁徳天皇千五百年大祭を高津神社に於て舉行

せしを機とし、篤志の士相謀り、小松元帥宮の御題筆を得て、明治三十二年十一月三日

といふに、この豊碑を建設して、以て、長へに高津宮の遺址を表はせるなり。

味原池

高津宮址の碑より程遠からぬ處、廣袤二町歩に餘れる一泓の池水あり。味

原池とは即ち是れなり。傳へ云ふ、神代の頃ほひ、比賣古曾神、此處に天降りまし、命

が御影池とてその名を存しぬと。或は云ふ、大己貴命の御子、味相高彦根命、此あたり

に降臨ありしに因み、附近一帯を上古味原郷と呼べりしと。

産湯清水

味原の南に、滾々珠の如き眞清水の湧き出づるは産湯なり。大小橋命の

産湯に用ひさせられしと傳へ、山下の清水、寺島の清水、増井の清水、相坂の清水、難

波の清水と共に、大坂六清水の一に數へらる。

産湯稻荷

産湯清水の丘上に産湯稻荷の祠を安置す。祭神は豊受大神なり。丘側狐

穴甚だ多きを以て、俗に呼んで狐谷となす。一たび社頭に佇立して眸を放たんに、攝

河泉三州の山野濶然として其秀を集め來り、心神の爽快言ふべからざるものあらん。

桃山

産湯稻荷の丘續き一帯の桃林あり。桃山と唱へ、春風聆蕩の候、笛を此邊

りに曳くもの甚だ多し。篠崎小竹の詩に「遠く郭桃花十里春。賞花羅綺起紅塵。尋得林

深人少處。間眠欲擬避秦民。』

これにて大坂市街の東端、玉造方面の名區は略ぼ案内し盡くせりと信ず。朝に旅舎を

出て、大坂城より此處迄經廻らんに、暑もやがて夕暮に近かるべければ、此の日は

假りに定めし大川町の旅宿へ踵を廻し、翌る日、更に、船場部内の遊覽を手引せん。

御靈神社

昨の遊覽は道程も餘り近からざれど、今日は船場部内の事とて、然した

る程にもなく、悠々巡覽するを得べし。先づ、大川町より南して平野町に向はゞ、郷社

御靈神社に抵るべし。祀る所の神は三座にして、中央天照大神、左八幡宮、右鎌倉權五

郎景政の靈なり。毎歲七月十七日の夏祭りには、御輿渡御の式あり。その賑はしさ言語

に絶せり。境内、興行の定席多く、殊に文樂座の義太夫に至りては、夙に關西特有の名聲を擅にし、操芝居の根源として、今も攝津大掾、大隅太夫、越路太夫等の音曲、紋十郎、玉造等の傀儡は、その評判都鄙に喧々たり。六の縁日には、西は京町橋より東は上町に至る迄、露店街衢の兩傍に居並び、肩相摩し、踵相接し、器々又擾々、稱して夜の大坂の盛觀とする所なり。

津村別院 御靈神社の正門を出て、御靈筋に社前の五二會館の大勸工場を瞥見して南に進み、備後町通りを鍵の手なりに曲れば、雄大、山の如き伽藍の、巍然として雲漢に聳ゆるを見ん。これを津村別院とし、通俗北御堂と稱し、京都本派本願寺の抱所なり。本願寺第十二世准如上人の、堂宇を石山より移し來りし頃は、境内廣からざりしを、爾後、漸次土地を購求し、また享保九年初夏、大阪大火の災に遇ひて、堂宇の烏有に歸したる後、更に境地を買ひ添ひ、遂に今日の觀を致せり。石階登ると幾十級にして表門あり。表門を入れれば莊嚴無比の大本堂、いと厳しく、本尊には安阿彌作の阿彌陀佛を安置し、左右脇壇には三國高僧の像を排列せり。本堂より左手の方長廊の橋を越ゆれば、更に一大殿堂あり。疊百餘帖を敷き、對面所と呼ぶ。昔時韓人來朝の際、止宿の用に供せ

し處。その外、二祖堂、轉輪藏、鐘堂、鼓樓、茶所など境内に散在し、又近く、征清役の紀念尖塔を設立しぬ。斯ばかり雄偉なる大建物なるが上に、巨石もて疊める堅牢限りなき屏牆之を圍み、石垣の西に面せる處に不開門あり。大阪七不思議の一に數へらる。寶物の内最も名あるものは、兆殿司筆釋迦羅漢像二幅、雪舟筆十六羅漢像等にして、その他一々數へ難し。

難波御堂 北御堂を出て、珠數、佛具、人形、玩弄物等を鬻ぐ肆店の櫛比せる御堂筋を南に進めば、三町許りにして難波御堂に到り着くべし。俗に南御堂と稱する所にして、京都大谷派本願寺の別院なり。本願寺十一世の門主光佐(顯如上人)織田信長に攻められて、石山の木坊を逃れ出て、一旦天満川崎に出て、更に京都に入りて本派本願寺を建て、文祿四年、その子光壽、別に佛閣を道修町に興し、慶長の初め更に現時の地に移りしが、同七年教如上人の旨によりて、京都に堂宇を營むや、本院を彼の地に遷して、此處をその抱所となせるなり。境内の廣さ北御堂と匹敵し、強堅なる牆壁の正面、四足門と云へる表門を入れれば、大本堂あり。本尊には阿彌陀佛、脇壇には親鸞上人の像を置く。又、壯大なる對面所、鼓樓など、建物の多き、北御堂に譲らず。殊に西方一帶の土

堰を飾れる美しき草花は、一入艶に麗しき趣を添へ、背後に穿たれたる寶門の構造は、言ふべからざる閑寂の致を備へたり。その上に芭蕉の翁の絶吟と聞えたる「旅に病て夢は枯野をかけめぐる」の句碑を留めたり。蓋し芭蕉が終焉は、此門前の花屋裏なる小庵に於てせしなり。

座摩神社 南御堂の背後なる座摩神社は、生井神、榮井神、津長井神、阿須波神、波比岐神の五柱を鎮めまし、延喜式内の社にして、そのかみ、神武天皇大和高見の山中に祭らせ給ひしとあるなどよりして、皇室との縁由いと深かり。社殿は近頃改築し、境内に他の數社を祀り、殊に、酒肆、寄席などを取り拂ひたる爲め、いとど神々しくて、稜威のいや尊さを覺ゆめり。毎歲七月廿二日に祭禮を行ふ。

難波神社 座摩神社より少しく迂廻して東に進み、博勞町に至らば、難波神社に達す可し。本宮は仁徳天皇にして、素盞雄尊、倉稻魂命を合せ祀り、別に稻荷の攝社あり。博勞稻荷の名を高さ。例祭は七月廿一日とす。

油懸地藏 難波神社より南へ二筋目を東に進まば、安堂寺町一丁目に油懸地藏とてあり。こは大阪にて最も名ある石地藏にして、日本紀の所謂安曇寺の石佛ならんかと云へり。祈願者の像を拜するに當りて、これに油を注ぎ懸けしより、斯くは名づけられたり。

朝日神社 船場を離れて上町に入り、安堂寺町を東北に進みて、神崎町に、市内三神明の一なる朝日神社を拜す。天照大神を奉祀せり。承平中、將門、純友、東西に反旗を翻すに當り、朱雀天皇の勅して祀らせ給ひし處。往時は、社域八町の廣さに及びきと。後年、豊臣秀吉城を浪華に定むるや、多く神社を遷座したりけるが、獨り此れのみは、曩に勅願ありしとて、依然舊地に存せしめ、崇敬いと深かりしとぞ。俗に逆櫓の社と稱ひなすは、壽永の昔、義經、景時、逆櫓の論を起し、折、各、祈願を籠めしに起因すと云ふ。

大阪博物館 朝日神明より天神橋筋(松屋町)を北に進み、本町橋筋を西に曲れば、東横堀河畔、嬢娜たる垂柳の流に臨みて連れる邊り、府立大阪博物館を見ん。地は元と幕府の西町奉行所の址なりしを、維新以後、一時大阪府廳となり、府廳の江の子島に移轉して後、明治八年に至りて始めて開場しぬ。爾來、年々地域を擴げて館を増し、今や五千數百坪を占むるに至れり。正門を入れれば莊麗なる美術館あり。張天井には名ある畫

畫を飾れる美しき草花は、一入艶に麗しき趣を添へ、背後に穿たれたる寶門の構造は、言ふべからざる閑寂の致を備へたり。その上に芭蕉の翁の絶吟と聞えたる「旅に病て夢は枯野をかけめぐる」の句碑を留めたり。蓋し芭蕉が終焉は、此門前の花屋裏なる小庵に於てせしなり。

工が丹青を凝らしたる古模様畫の描寫を見る可く、陳列品には、市内富豪の珍藏せる什器を初め、幾多の美術品等を展列し、時ありては、書畫、工藝品の展覽會を催ほすを常とす。美術館の東北方に大廣間あり。能舞臺あり。庭前には鬱蒼たる林叢、閑寂なる池水あり。瀟洒なる小亭のいと面白く建てられたるあり。更に、六室の賣店を廻りて、庭園に出づれば、怪石奇獸の放飼せられたるを見るべく、美しき花卉盆栽、珍らしき太古の獨木舟などを按排せり。

神農社 博物場の門を出て、東横堀川を更に船場に入りて北に進めば、道修町一丁目、少彦名命を祀り。俗に神農社と呼ぶ。毎歲十一月廿三、四の兩日、祭禮を行ひ、般賑を極め、附近に櫛比せる藥種商、慶を飾りて様々の造り物を爲し、當日參詣の諸人には、社頭にて張り子の虎を授く。之を屋内に吊るし置かば、能く惡病を攘ふと言ひ傳ふ。

高麗橋 神農社より辻二つ北に行けば、高麗橋通にして、街の東端に高麗橋あり。今の鐵橋は、明治三年の創設に係り、市内鐵橋の嚆矢とす。東詰に府の元標ありて、管内の里程を記るし、西詰には櫓屋敷と稱ふる城樓の形見を存し、昔時、大阪城廓の名

残を留めたり。橋より西の大通りは、市内目貫の場所にして、豪商軒を並べ、三井銀行、三井物産會社等の支店、百三十銀行、三十四銀行等最も名あり。

北濱附近 此處迄來らば、大川町の旅宿も程近し。げにや此の附近は、市内實業界中樞の地區と稱ふべく、今橋通には、鴻池善右衛門氏の邸宅を始め、鴻池銀行、日本生命保險會社、住友本店、大阪新報社、緒方婦人科病院、愛珠幼稚園等の建築物、いづれも注視するに足り、内北濱には、北濱銀行の大建築を始として、株式仲買、辯護士、名醫等の居宅多く、北濱、大川町の邊りには、高等旅館、仲買店など鱗次し、殊に、株式取引所近くには、無数の投機客常に群集す。更に歩を北濱の東端に向くれば、一笏地の大川に臨みて斗出するを見ん。築地(或は鯉島とも)とは即ち此處にして、竹式樓を始め數多の酒樓、旅館など立ち並び、眺望は面白く、逸樂には適し、當に終日巡覽の疲を慰むるに足らん。薄暮歸路を陸に取るも可、巡航船に由りて澱江の暮色を賞するも亦可。

南部の遊覽地

二つ井戸

大阪の南部は、到る處見物に値すべきもの多し。大阪遊覽の客にして、

南方に足を向けざらんには、大阪の繁昌を知らざるものと云ふべし。されば、これより遊覧の順路を辿りて、順次に之が案内を試むべし。大川町の旅宿を出て、狹隘なる道路に人力車を驅るの煩を避け、淀屋橋下より巡航船に搭して、東横堀川を下り、上大和橋に船を捨て、少しく南へ歩を移せば、名高き岩おこし屋(津の清)の店前に二つ井戸の跡を見るべし。こは櫻町天皇の元文中、徳川政府が鑄錢場を設けし節、用水として掘りたるものとし、現今存するは、近年の掘鑿に係り、もとは、今の郵便支局の東南方にありしなり。

高津神社 二つ井戸より少く東北に進めば、高津町一番町に名だゝる高津宮あり。仁徳、仲哀、照神、履仲の四帝と、神功皇后、及び葦原皇后との六柱を鎮座す。勸請創建の年月未だ詳かならざれど、貞觀以來屢史上に顯はれ、天正十一年に至りて豊臣秀吉、今の地に遷せり。下つて承應二年、社殿を造營し、寛保以後幾たびか修築を加へぬ。境内に梅の橋、頌徳碑あり。近來官幣社階格出願の舉あり。望烟亭は仁徳天皇千五百年大祭(明治三十二年)の紀念として建立したるもの、舞臺はその右手に在りて、眺望絶佳の觀を占め、大坂市街を透して、遂に六甲山の蜿蜒たるに對し、茅渚の蒼波を望む

を得べし。本社の北隅に高倉稻荷あり。賽者帯に絶えず。

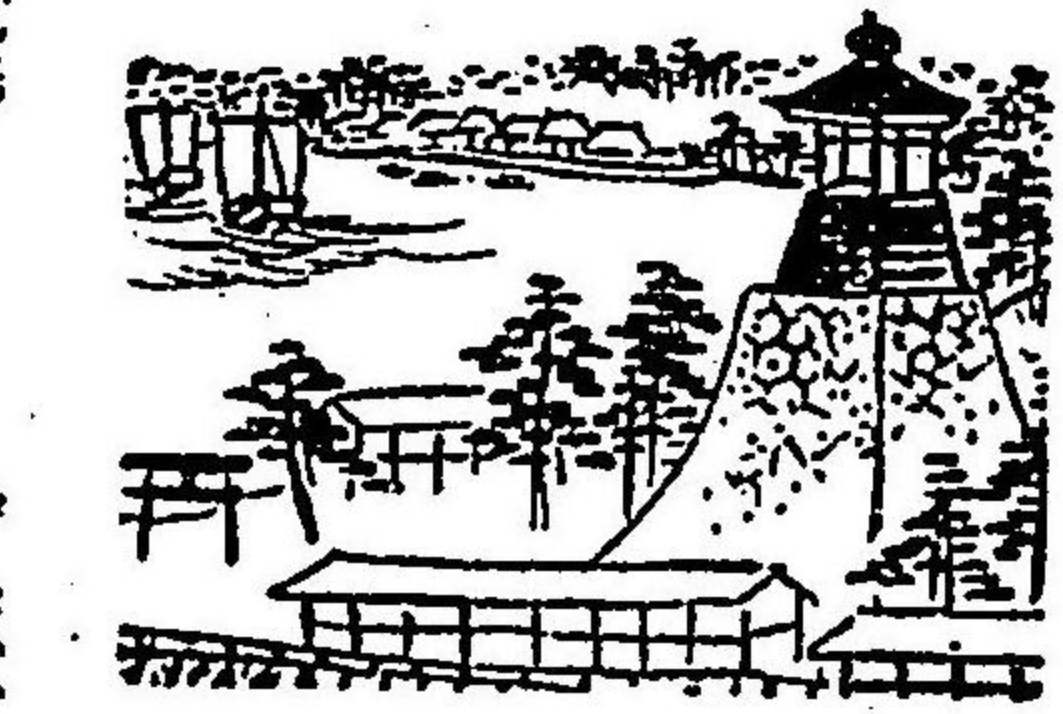
菟菊庵と吉助牡丹

坂の下なる植木屋吉助は、牡丹の栽培もて世に聞えたり。

梅屋敷 高津の東に新梅屋敷

あり。南に元梅屋敷あり。前なるは、築山泉水の間に梅樹を列植し、後なるは、坦々の地に老梅を養ひて、魁春の風致を占めたり。

生國魂神社(官幣大社) 元梅



年月逸として知るべからず。天正の頃、豊太閤、正親町天皇の勅を奉じて、現地に遷し参らし、と傳ふ。社殿は丘阜の上に東面し、神域は七千數百坪を有し、森殿、古雅の趣、蓋し市内神社の冠たらん。正面に一大華表を建て、檜皮葺八

つ棟造りの社殿神々しく、百尺の崖頭に架せる舞臺殿めしく、北御門、乾門、南御門、拜殿の壯大なる建築は、何れも賽者の心を惹くに足る。六月廿八日御稜の祭を行ひ、七月九日の夏祭に次ぎ、九月九日に例祭を擧げ、夏祭の渡御は市内屈指の觀とす。近年境内に櫻樹を植ふ、夜櫻の觀客多く、門前の蓮池は、夏の晨漫歩の士を歡ばせり。



●●●●●●●●●●  
北向八幡宮 生國魂神社の蓮池を西北の二方に繞らせるは即ち北向八幡宮なり。慶長年中の創建にして、譽田別尊を祀る。社名の起りは、大阪城の鎮護神として北向せるに出たり。

夕陽岡 北向八幡宮より生玉寺町を南し、垂絲櫻に名ある隆泉寺、齡延寺を経て、尚南行すると敷町にして、夕陽岡に至る。地は高燥にして、一帯の桃林崖に亘り、花季の風景言ふべからざるものあり。大江の梅とは是れなり。丘上崛起したる處に、從二位藤原家隆卿の古墳寂然として立ち、舊榎松の枯幹、墓畔に存せり。客若し丘上に佇立して、西方遠く淡路島山に没せんとする落日の日影うすさを望み、頓て夕開の帷幔に掩はれんとする頃に逢はゞ、感懷將た如何にぞや。家隆卿「契あればなにはの里にうつりさて、波の入日を拜みつるかな」の歌、徐るに當時の境を想起せむ。墓石の東方一老屋あり。卿が僑居の跡にして、夕陽庵と題せられたり。此の地に又、陸奥宗光伯、伯の父伊達千廣卿の墓碑あり。

大江神社 夕陽岡の梅林を南に辿らば、大江神社の境内に入る。豐受大神を祀り、末社には、天照大神、猿田彦大神、日吉稻荷、手力雄命を奉祀す。境内老松蔚然として

繁茂し、幽邃の趣轉た深し。

勝鬘院 大江神社の東に在り。聖德太子曾て此處に勝鬘經を講じ給ひ、本尊には愛染明王を祀る。院の後方、茂林鬱々の間に古色藹然たる多寶塔あり。大聖金剛像を安置す。

遊行寺 夕陽岡の西、勝鬘坂に在り。時宗麻澤寺一逼上人の寓せし處なり。丈三尺六寸の薬師佛を本尊とす。境内に芭蕉茶屋、芭蕉碑等あり。

新清水寺 遊行寺より南すること幾くならずして、新清水寺に達するを得べし。往昔有栖山寺と號し、延海阿闍梨の創建する所。寛永十七年に至りて、京都清水寺なる聖德太子作千手觀音を移し來りて本尊とせしより、新清水寺とは稱するに至れるなり。堂宇極めて古く、本堂の前に舞臺あり。西方濶然として開け、尤も眺望に適す。南方紅葉坂の羊腸を下り、巖石逼仄の間に進み入れば、音羽の瀧とて、三條の小瀧瀉ぎ下れり。夏日浴客多し。舞臺の下に、開基延海阿闍梨の塔あり。險しき石階の側に、夫の浪華狂歌の開祖油煙齋貞柳の碑あり。(貞柳の墓は、下寺町光傳寺に存す)  
安井天満宮 清水寺の丘續きを南すれば、振り面白き老松の連る邊り、安井天満宮

の社殿を得べし。祭神は菅原道真公にして、古くは安居天神と云ひけり。公が左遷の折立寄りし處と傳へ、今尚芝原祭と唱ふる祭禮の存するは、蓋し之が爲めなるべく、社頭に安井の清泉あり。

一心寺

安井天満宮より東南、逢坂下之町に在り。圓光大師廿五箇所舊跡の一にして、文治元年、慈鎮和尚が方四間の草庵を造りて、法然上人を請じたるに創まり、後白河法皇の輦を駐めさせ給ひしに著はれぬ。爾來、頽廢日久しく、慶長の初め僧存岸の來て本寺を再興するに會し、毘首痾摩天作三尺の阿彌陀佛を本尊とし、善光寺の如來を摸したる一光三尊の金像佛を方丈に安置す。寺は初め壽命山觀稱院一心寺と號したりしが徳川家康、中興存岸の堅固なる勸修を讃して、阪松山高岳院一心寺と改稱せり。境内には有名なる堂宇多く、人骨を以て固めたる阿彌陀佛を安んぜる納骨堂、彌陀、釋迦、廿五菩薩を安置したる菩薩堂、其他、三千佛堂、彌勒堂、御影堂など極めて多し。又、本多出羽守忠朝及び家臣九名の屍を埋めし古墳あり。大阪城中より移せし遠州八窓の茶室と稱する數寄屋あり。七代目市川團十郎の墓あり。來山の句碑あり。境内の眺望觀賞に値し、第五回博覽會の建物は、近くその崖下に連なりしなり。(俳師小西來山の草庵十萬

堂は、今も寺西なる今宮村に存す。

茶臼山

一心寺の南にあり。槎枒たる老松の冠を頂き、鬱密なる矮樹の袴を穿ち、蕭然として孤立す。仁徳天皇の御陵として築かれしなりと傳ふれど、その以前より既に荒陵の名あり。徳川家康の大坂城を攻むるに當り、此處に本陣を構へたりき。西南に濠池を繞らし、山影を蘸せり。池の南畔に邦福寺と云へる寺あり。俗に雲水と稱し、精進料理を脩むるを以て名高く、この邊一帶、今は住友吉左衛門氏の私有地に歸し、その別墅には、毎年春夏の交、大園遊會の催しあり。

博覽會跡

茶臼山の西方一帶、廣大なる十萬餘坪の地域は、第五回内國勸業博覽會の設けられし跡にして、その開會中は内外人士の群集して無比の殷賑を極めたり。現に市の公園として保存せられんとす。

天王寺附近

逢坂清水西の辻を合邦の辻と云ふ。石像閻羅王を安置せる閻魔堂あり。昔此處に天王寺の學校ありければ、學校の辻と云ひ來りしを、後かくは轉訛したるなりとぞ。合邦辻に近く、天王寺々町に鳳林寺あり。曹洞宗の寺院にして、最乗山と稱す。天正中北條氏房が息女の建立せし所にして、釋迦如來を本尊とす。客殿に、聖德太子作

正観音の像あり。又、弘法大師の真經、兆殿司筆十六羅漢像を藏す。鳳林寺の南、小丘の上に月江寺あり。光明山林照院と號し、淨土宗の比丘尼寺とす。草創は永祿十年に起り、本尊に慈心僧都作の阿彌陀佛を安ず。寺の東方なる空濠は、所謂天王寺の城墟にして、天正中佐久間信盛の據りし所、俗呼んで蟲谷となすは、初秋の候、蟲聲の愛す可きものあるに由る。月江寺の東に吉祥寺あり。淺野内匠頭が深く歸依せし處、山門に掲ぐる萬松山の扁額も候が筆に係り、机面に書さしをその儘用いしもの。本堂には四十七義士の木像を置く。月江寺を出て、天王寺南門外に至らば、



泥土を之に塗りしより、土塔山の名起れり。その後、寶塔灰燼に歸せり。境内には淨瑠璃の眞祖竹本義太夫の墓あり。四天王寺 いざや筆を進めて、日本佛法最初の靈地とて名高き四天王寺の案内をも

のせん。寺は荒陵山と號し、天臺宗の古刹にして、今を距ると一千三百有餘年、用明天皇の即位二年、聖德太子が、玉造の岸に草創し玉ひしに始まり、推古天皇の元年、今の地に移しぬ。爾後、天正、元和の二回兵燹に罹りて焼失し、寛文四年、徳川家綱、命じて再築の工を起し、爰に全く曩日の美觀を復して、七堂伽藍悉く具はれり。境内の廣さ東西八町、南北六町に餘り、東なるを本門とす。門の入口なる大華表を過ぎて行くこと一町、東門を潜れば樓門あり。門を入れば、莊麗なる五層塔、轟然として九漢に聳ゆ。高さ百三十三尺。若し一たびその最高層に登臨しなば、慄然として身の天外に飛躍せしにあらざるかを疑はしめん。塔の北に金堂あり。桁行十間、梁間八間、内に如意輪觀音の像を安置し、彌勒、四天王、婆羅門等の像を脇壇に置き、別に佛舍利數顆を藏む。その北なる大殿堂は、昔時聖德太子の經文を講じ玉ひし處にして、これを講堂と稱へ、堂北の古梵鐘を無常院の鐘と云ふ。近時、聖德太子千三百年御遠忌紀念として、世界無比の巨鐘を鑄造せり。頌徳會とは是れなり。講堂と六時堂との間なる池上には、長さ六間幅四間餘の石舞臺を架し、昔時聖靈會に伶人が舞樂を演ぜし名残を止め、近時また再興して、毎年四月十五日に之を行へり。池の北なる六時堂は、傳教大師の草創と傳へ、比

叡山根本中堂を摸せしもの。東南、猫門を入れば、太子十六歳の尊像を安置したる太子堂あり。その他、納骨堂、引聲堂、一奇院、短聲堂、西大門、輪藏、五智光院、萬燈院、二王門、南大門、和光堂、虎の門、用明天皇殿、三味堂、經書堂、龜井水、無常院、影向院、關伽井、卷物橋、相輪堂、寶庫、十二箇院(東光院、吉祥院等)、食堂、樂屋、鼓樓、上の池(丸池)、大黒堂、藥師堂、北大門、中の門等殆んど枚舉に遑あらねば、遊覽者は寺僧に就きて、詳しく、縁起、建物、寶物など檢べらるべし。春秋二季の彼岸會、孟蘭盆會の千日詣てには、さしにも廣き境内も、立錫の地なき雑沓を極む。近年、聖德太子が、宗教上、文學上、工藝上に留め玉ひし功績を表彰せん爲め、頌德會といふを起し、そが事業として、巨鐘の別、本坊、待賓館を新築するに至れり。境内の西北、九町に餘る地域には、數百株の櫻樹と、幾十叢の胡枝花とを植ゑ、春秋花季の風趣いと深し。

**紅葉寺** 天王寺の五層塔の林間に隱見するを顧みつゝ、東北に進むこと二三町にして紅葉寺に達す可し。正しくは壽法寺と稱し、境内に楓樹を栽培すると多し。晩秋の候、蜀錦の美、毘沙門池の面に映らふけはひ、亦城南の一鉅觀たるを失はず。

**清壽院** 紅葉寺の南に在り。白駒山と號す。明和の頃、支那の僧大成和尚之を中興

し、關帝の像を本堂に置く、俗に南京寺と呼ぶ。

**關帝廟** 清壽院に近く法王山龜林寺あり。即ち關帝廟にして、延寶五年、心越禪師の開基に係り、禪師がより齋らし歸りし關羽の像を本尊とす。庭内胡枝花多くして遊樂に適す。

**國分寺** 關帝廟より東南に進むと數町、國分町にあり。聖武天皇の御宇に建立したる國分寺の一なり。本堂は桃山城の一殿を移し來りしもの、世に血天井と稱し、天井板に斑々たる血痕を存せり。

**舍利寺** 國分寺より東して、坦々たる野道を迎ると十町許、舍利寺に達すべし。聖德太子の開基にして、太子が嘔兒の口中より舍利三顆を出だして嘔を治せしに起因すと云ふ。太子堂には太子が四十二歳の尊像を安置せり。木庵和尚之を中興し、御影松、和泉式部腰懸松等あり。又、卅三所觀音摸造の石佛を置き、堂下に寶道あり、戒壇巡りと云ふ。

**大坂南方の東半部**は、これにて略その手引を終りぬ。これより直ちに桃山停車場を指し、汽車にて梅田に出て、旅宿に復るを便とすべし。

四つ橋 大川町より巡航船に乗じて、西横堀川を下らば、東よりする長堀川の流れと相交叉せる處、四箇の橋梁を見るべし。四つ橋とは是れなり。その形に由りて井字橋とも呼べり。長堀川に架せるを炭屋橋、吉野屋橋とし、西横堀川なるを上繫橋、下繫橋とす。納涼に、觀月に、雨つながら宜しく、孤舟短棹、河畔の柳下を過ぐる亦一興たるべし。來山の句碑あり、『すとしさに四つ橋を四つ渡りけり。』

瑞龍寺 更に流を下りて、新戎橋畔に船を捨て、幸町より南して稻荷社に至り、名高き赤手拭稻荷へ參詣の後、歩を東に向け、難波元町に至らば、慈惠山瑞龍寺に達すべし。寺は黄檗派に屬し、本堂には、藥師佛及十二神將を安置し、天王堂には彌勒佛、四天王、韋駄天を置く。草創は數百年の昔にあり。もと藥師寺と號し。寛文の頃、鐵眼和尚來りて之を再興してより、人呼んで鐵眼寺といふ。寺域二千四百坪に及び、禪堂、祠堂、禪悅堂等建ち並び、圓額の類には、高僧の筆蹟多し。

難波八坂神社 瑞龍寺の南五町ばかりに在り。元は佛寺にして七堂伽藍を具へたりしに、兵火荒廢の後、素盞鳴命を奉祀して神社となせり。本殿、拜殿、杖殿、神樂殿、繪馬所等の他、末社には八王寺社、靈符神、天満宮、歡喜天、采女宮等あり。夏祭に難

波の綱引とてあり。

願泉寺 八坂神社の南方、木津にあり。もと無量壽院と號し、推古天皇十一年、僧永澄の建立したるもの。永澄は小野妹子の八男にして、聖德太子に従ひ守屋を誅し、後太子が四天王寺を建立するに當り、跡の奇瑞に感じて剃髮し、本寺を創建したりと云ふ。後、眞宗本派本願寺の末寺となり、今の寺名に改むるに至れり。境内にある茶室、石燈籠等は、第一世宗龍和尚の伊達政宗に茶道を傳へし名残を留めたり。

今宮神社 願泉寺を出て、東南に向ひ、來山が十萬堂の蹟を弔らひ、北すると二三町にして、今宮神社に抵るべし。聖德太子の草創にして、中央に天照大神、左に蛭子命、大己貴命、右に素盞男命、月讀命の五座を祀る。世に今宮の戎と稱へ、毎歳一月十日の十日戎には賽人群集し、その雑沓筆紙に盡し難く、社頭には吉兆とて、はせ袋にとり鉢、錢、小判に金箱、立烏帽子、入樹、財槌、束熨斗など結び着けたる小笹を賣るに、嚏と雪崩の如く詰め掛け、押すなくの聲音いと聞し。

廣田神社 今宮神社の北方にあり。天照大神を祀り、祇園、稻荷の攝社なり。古へこの邊りを廣田の森と呼べり。

大乘坊 廣田神社を東し、貧民窟もて名ある名護町のむさくるしき裏店を過りて北に進めば、大乘坊あり。弘法大師の建立にして、春日佛師作毘沙門天を安置す。日本四毘沙門の一到に數へらる。今の堂宇は明治廿七年の再築に係り、域内に、寶藏、陀栴柁天堂、鎮守堂、護摩堂、大師堂等あり。

千日前 大乘坊より北すれば、市内の繁華を聚めたる千日前に入るべし。往昔千日寺と稱する精舎ありて、維新の頃に至る迄、刑餘の枯骨を埋めたりしかば、更深けて悲風慘雨蕭條として亂塔を訪づれ、荒涼凄愴の氣人をして思はず股慄せしむる程なりしに、明治の初年、地を拓きて見世物小屋の建ち連なりしより、昔日の面影忽ち變り、日夜行人絡繹として引きも切らず、女義太夫の三絃(播重席獨り名聲を擅にす)俄師の太鼓(鶴屋團十郎一座の大阪俄尤も著はる)鐘を撃つあり、銅鑼を鳴すあり、その紛亂喧雜、耳は聾い眼は眩せん計りなり。誤りて新金比羅前邊に一たび足を踏入るれば、破落戸、掏兒、悪少年、若くは白首(淫賣婦)の類、出沒して良民を惱ますを常とす。忘れても立寄りなせど。

道頓堀 エ日前の俗塵中に、法善寺、自安寺、琴平社などを見廻り、町續きに道頓堀に出づるを得べし。慶長の昔、安井道頓の開鑿せし道頓堀川を前に控へ、街の南側には有名なる五座(浪花座、中座、角座、朝日座、辨天座)の劇場藪をならべ、北側には昔時いろは茶屋の名残を留めたる芝居茶屋を始め、飲食店、旅館など軒を連ね、浪華遊樂の別天地たるべし。

三津寺 道頓堀の西端、戎橋を渡りて、辻二つ北すれば、三津寺町に三津寺あり。眞言宗の寺院にして大福院と號し、聖徳太子作五尺八寸の十一面觀音を本尊となせり。寺門の内、右に鐘樓、地藏堂あり。左に樟の大樹あり。毎月廿一日大師廻りの打ち留として、諸人群集す。

三津八満宮 三津寺の北二町、佐野屋橋八幡筋の角にあり。應神天皇を祀り、往昔の味原郷にあり。境内には、本殿、幣殿、拜殿の外、數座の末社あり。心齋橋 佐野屋橋筋より二つ目の東の筋は、所謂心齋橋通にして、各種の商家、綺羅を競ひ、美觀を争ひ、日用品より裝飾具に至る迄、欲するもの一として得られざるはなし。心齋橋は即ち此筋の中程に架したる橋梁にして、順慶町以南戎橋迄を尤も般賑の通とす。今の穹窿狀の橋は、明治六年の新設に係る。

是より南郊には阿部野、天下茶屋等を経て住吉公園に遊ぶ順路なるも、既に堺、和歌山附近の下に説きたれば、此方面の案内を此所に止め、斯くて一日の遊覽すてに了らば、大川町の旅宿迄は、人力車を雇はんも、はた巡航船に乗らんも、旅客が欲する儘なるべし。

西部の遊覽地

鞆と陶器神社(附ぎこば) 西横堀川の畔り、京町堀と難波堀との間を總稱して鞆と云ふ。鰯魚、乾魚等を鬻げる商店櫛比し、毎年七月三十一日の住吉祭には、乾魚の類を以て造り物をしつらへ、見物人充溢す。鞆南通一丁目には陶器神社あり。もと地藏尊を祀り。毎年七月廿四日の祭禮に附近(西横堀西岸)の陶器商舖に瀬戸物の造り物を拵へ、鞆の住吉祭と共に、大坂名物の隨一に數へらる。京町堀西端の雜喉場にては、毎朝魚市を行ひ、買入喧囂の狀を極む。

廣教寺 雜喉場の南、薩摩堀北の町に在り。祝松山と號し、今眞宗に屬す。徳川三代將軍の頃、石山城南より今の地に移されき。

江の子島 廣教寺の西、四方に川を控へたり。明治七年建設せる大阪府廳を首とし、市役所、警察部、府會議事堂等の建築物多し。

川口元居留地 江の子島の西端、木津川橋を渡れば、疎々たる老松の連る邊、數十の洋厦一市街を形造るを見ん。元居留地とは是れにして、條約改正以前、外國人の居留を許せし處、商館、會堂、病院、學校など多し。



川口波止場 居留地より一二町西の方、大阪商船會社前の川畔一帶を云ふ。大小の船舶を繫泊し初秋、風雨大に至り、海波震動するや、和尚乃ち舊安治川橋上に立ち、一偈を書して水定に入りぬとぞ。安治川の水燈會は實に此時より始まりと云ふ。

竹林寺 九島院に近く、梅本町にあり。寛永年中教譽上人の開基に係り、怒心山寶樹院と稱し淨土宗に屬す。本尊は惠心僧都作阿彌陀佛の像にして、境内に香西哲雲遺愛

の香の梅と云ふがあり。

茨住吉神社 竹林寺の西南、九條町にあり。祭神は住吉の神にして、寛永元年香西哲雲九條島開發の際勸請せし處。境内に本殿、幣殿、拜殿、神樂所、繪馬所、及び九座の末社あり。例祭は七月卅日と十月十五日とに行はれ、又、毎月三六の日には吳服、古着、骨董等の市を開く。

衢壞島 九條町附近の名稱にして、寛永中、香西哲雲がその獨得の水理を應用して埋立てし處。後、河村瑞賢、爰に一條の河流を疏通せりき。

松島の廓 九條の東、木津、尻無の二川に依りて挟まれたる花柳界たり（後章を見よ）。三層四層の高樓を並べ、満街の燈火花の如き頃、下層の游客、袂を連ねて素見歩くもの多し。八千代座は此廓内に在り。市内西部の一大劇場とす。又廓の西端なる花園橋より築港間を往復する市營の電氣鐵道車あり。

土佐稻荷 松島の東方、玉造橋南詰に鎮座の稻荷社にして、元と土佐藩の倉庫敷たりしを、明和七年伏見稻荷の分靈を勸請したるもの、三千坪の社域には本殿、幣殿、拜殿、繪馬舎、神庫、社務所、神樂殿、及び若宮、石宮、武根社、磐居社等の末社あり。

近時境内に櫻樹を植ゑ列ね、夜ざくらの雪洞に遊春の客多し。

和光寺 土佐稻荷の東三町にあり。蓮池山智善院と稱し、本尊は淨蓮上人作一尺五寸の金銅阿彌陀佛なり。本堂の北なる一泓池を阿彌陀池と云ひ、俗に欽明天皇の御宇、物部守屋が佛像を投棄せし迹なりと傳へ、推古天皇の御宇、本田善光が其像を此處より拾ひ上げしと稱ふ。觀音堂、普門堂、愛染堂、藥師堂、地藏堂、閻魔堂等皆域内に在り。毎年涅槃會、灌佛會には、善男善女群集し、門前に連ぬる植木市、殊に盛んなり。

尻無川 阿彌陀池より腫を廻して西すれば、尻無川に達すべし。更に流を下ると二十町餘り、鯨釣りに名ある甚兵衛の小舎近く、水を夾んで無數の榎樹の堤上に連るを見ん。秋風一たび動くの候、人をして坐るに橋本晩翠が挾み水黄櫨帶ニ夕陽。斑々染出昨宵霜。近觀執若遠觀好。身在南塘一看北塘の一絶を想起せしむ。

大阪築港 大阪築港の大工事、既に明治四五年の頃よりその計畫ありしかど、西村捨三氏の大府知事に任ぜらるゝに及び、實行の議漸くに進み、氏は築港事務所長に推されて、明治三十年十月十七日、遂に盛大なる起工式を擧ぐるに至れり。設計の梗概左の如し。



まづ港全脈を内港(幅員二百五十間乃至三百間、百三十五町七分)と外港(幅員五百間乃至八百二十五間、三百五十七町七分)とに分ち、外港は南北の突堤によりて圍まる、ものにして、北突堤の基點は安治川口の南岸天保山燈臺より西南西六百五十間の處にあり。長さ千四百九十二間を有し、殆んど一直線をなして、終端に近く少し西南に曲り、水深以下二十八尺の所に至りて終る。南突堤は尻無川燈臺を距ること九百三十間、即ち天保山燈臺の東南千五百五十間の處に基點を有し、四百二十間の間は北西微西に向ひ、それより一直線に西微南に向ふこと千八百五十五間、水深以下二十八尺の所に少しく彎曲し、北突堤絶端との間、百間(水底にて)を存し、西微南に面して港口を形れり。内港は木津川口の北岸舊砲臺跡附近より、南突堤の基點迄に築かれたる九百十間の防波堤によりて包まる、疋くの如くにして形成せられたる全港の直徑は、實に千七百四十間の長さを有せり。尙、水面中百四十九萬坪の新埋立地を設けて市街を形成し、且つ安治川、尻無川間の沿岸には、幅八十間の船渠二箇所、天保山前埋立地端には長さ二百五十間幅九十尺の鐵棧橋一梁を設く。その他、安治川口は百二十間乃至二百間、尻無川口は七十間乃至八十間の幅員を以ていづれも港内に注入せり。又、船舶の航路は外港の南に偏し

て幅百間の海底を浚渫し、繫船は此の北方に集め、貨物の揚卸は前記二箇の船渠及び鐵棧橋を用ひ、外港は風波の際碇泊の用に充つ。(口繪寫眞参照)  
工事今は半ば成功せり。築港事務所にては、特に公衆の便を圖りて、毎日案内船を出すべければ、遊覽者は思ふが儘に、帝國無雙の大規模たる大阪築港内外の景況を看取するを得ん。

安治川 「海勢北に廻りて灣又灣、東南望み豁かなり紀泉の間、西風吹き送る千帆の影、一々來り朝す天保山」河村瑞賢の遺跡たる名高き天保山は、安治川河口に在れど今は築港大突堤に圍まれて、新埋立地に引直されんとす。此邊り一の洲と云ふ處あり、昔時は今日の如く陸地續ならざりければ、行家卿も「風あらしみなとの沖の一の洲に、ひかふ小船ははや入りにけり」とぞ詠まれたりける。又、名高き滸標は此沖にありて、今は大阪市の徽章にも其形を用ひたり。

詫びぬれば今はた同じ難波なるみをつくしてもあはんとぞ思ふ (元良親王)  
八州軒 六軒屋川の西方、西春日出町にあり。享保の昔、佐野の豪家飯野氏の創めし別業にして、伏見桃山殿より移し來りたる古建築多し。古畫珍品を藏し、加ふるに、

眺望の廣き、能く近畿八箇國を一眸の下に收むるを得。

北部の遊覽地

玉江橋附近 大川町より西して宗是町を北に向ひ、大阪府立醫學校病院の後に出づれば、蜻松の址あり。一に鶴の松とも呼び、竹鼻纜山をして『龍姿蟠屈幾千秋。日夜蒼髯鑑碧流。假蓋苑如海和尚。不妨今日繫漁舟。』と吟せしめし市内屈指の名稱なりしに、數年前俄に凋衰し、幹柯悉く伐採せられて、今は昔日の面影だも止めずなりぬ。その西なる一橋を玉江橋と稱し、十數年前迄は、橋上より天王寺の五層塔を認め得たりしに、近來大厦高樓の建ち連りしと、橋の低くなりし爲、最早此奇觀に接する能はず。玉江橋北詰の角なる堂島高等女學校敷地内は、故福澤諭吉先生の誕生地あり。正門内に存する井水は、先生の産湯に用ゐられしものと云ふ。

野田藤 玉江橋より福島を経て、西野田玉川町に至らば、有名なる玉川の藤花を見ん。往昔、足利義詮、豊臣秀吉の來觀せし遺址にして、藤の棚近く、春日神社、藤の庵などあり。野田のかげ藤とて名高し。早野思齋の詩に『新樹烟濃風物清。野亭晝靜聽』

蛙鳴。池中寫出龍蛇影。紫白花披藤一棚。』

證如上人舊蹟 野田藤の西、野田村にあり。本願寺十代の法主證如上人、日蓮宗徒の爲に山科の御堂を焼却せられ、逃れて此處に來りしを、敵の追窮する所となり、將に命を殞さんとするに際し、偶々門徒の爲めに助けられし處にして、今尙極樂寺内に、上人自筆の謝狀を存せりといふ。

妙德寺 極樂寺の片ほとりなる野田停車場より、西成鐵道の汽軍に乗りて福島驛に下車しなば、やがて妙德寺に至るを得べし。黄檗宗に屬し、行基の開基に係り、元祿十一年鐵梅一たび之れを再建し、翌年、その師僧南源を支那より招請して中興開山と爲しぬ。北郊に於ける一古刹とす。本尊を釋迦如來とし、別に五百羅漢像を置き、寺名を俗に五百羅漢と呼ぶ。

逆橋松 義經、景時が逆橋の論を闘はせし所と傳ふ、松は今枯れて『驚濤猶起長松杪』の景趣あらざれど、根幹は、福島橋詰町なる杉本氏之を藏せりとぞ。

福島天神 三社あり。上ノ天神(上福島)と云ひ、中ノ天神(中福島)と云ひ、下ノ天神(下福島)と云ふ。菅原道真公左遷の折、此處より出船ありし舊蹟と稱ふ。

了德院 福島天神の西北、鷺洲村大字浦江にあり。浦江の聖天と號し、歡喜天を祀る。京都護國寺(東寺)に屬し、元文中僧宥意の再建に係ると云ふ。境内の池は杜若に名高し。その傍なる妙壽寺の境内には、國學者萩原廣道の墓あり。

王仁墓 了德院の東北大字大仁にあり。應神天皇の朝、百濟より來りて皇子稚郎子に漢學を傳へ奉りし博士王仁の古墳と云へれど、北河内菅原村に王仁墓を存すれば、何れを正しとも定め兼ねたり。

梅田 大仁の東南一帯の地、昔時は沼澤の地なりしを、二三十年以前之を埋立て、火葬場となせしに、後、大停車場の建設ありてより、俄に繁榮を來たし、集る人、散る人、日々萬を以て數ふを得べく、數十の腕車は相並んで客を待ち、幾箇の茶亭は軒を連ねて人を呼ぶ。その雑踏の狀筆紙に盡し難し。梅田と云ふは即ち埋田の轉化なりとぞ。

凌雲閣 梅田の北、茶屋町にあり。九層の樓閣矗立すると二十二間。樓上の眺望爽快なれど、何故にや近來頽廢して振はず、俗に呼んで九階となす。

網敷天神 凌雲閣より一路東南に進めば、北野東の丁に北野天神あり。網敷天神と呼び、嵯峨天皇と、菅原道真公とを祭る。公左遷の際、此地一株の榎樹、花美しきを見

て、樹下に船綱を敷きて賞せられたる故蹟と傳ふ。

太融寺 網敷天神より歩を西南に向け、稻荷山(瓢箪山)附近なる萩に名高き圓頓寺を一覽して、尙行くと一町許り、屈指の古刹太融寺に抵る。弘仁年中、弘法大師此地に行脚し來り、偶々一靈樹を發見して手づから佛像を刻み、一寺を草創して太融寺と云へり。今の本尊は、嵯峨天皇の寄附し給ひし千手觀音にして、地藏毘沙門の二像(大師作)を脇壇に置く。境内堂宇頗る多く、規模亦甚だ廣大なりしかと、近時大にその面影を失ふに至りぬ。寺中に淀君の墓、藤棚あり。又藤浪亭といふ割烹店あり、小酌を取るに便なり。

太融寺附近 太融寺の邊り梵刹の覽るべきもの甚だ多し。眞言宗御室派に屬せる不動堂は、弘法大師作丈二尺の不動尊を安置して歸依者多く、その南方なる眼神八幡は眼病に靈驗著しとして參詣人絶えず。去りて寒山寺に入れば、有名なる梵鐘を吊し、その東なる法住寺には、日限地藏を祀り、參詣人引きも切らず。

露天神 寒山寺に近く、少彦名命、菅原道真公を祀る。公左遷の際、太融寺に詣でんとて此處を過ぎりしに、草露いと深かりければ「露とちる涙に袖は朽ちにけり、都

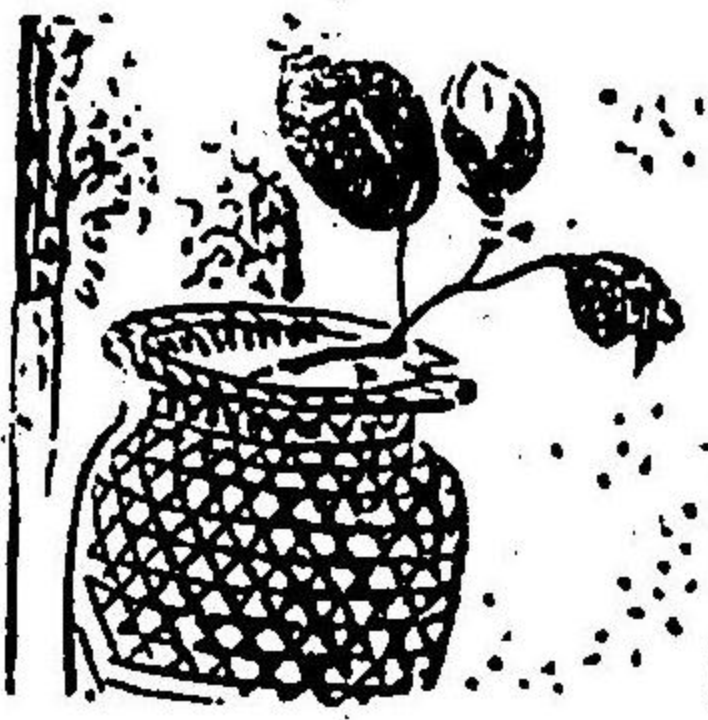
の事をおもひいづれば。』と咏ぜし古蹟にして、俗に初天神と云ふは、昔し遊女が初が心中の物語より起りしなり。

夕日天神 露天神の東、俗に夕日ノ神明と稱する一祠あり、弘仁十二年源融の創建に係り、天照大神、豊受太神を奉祀す。市内三神明の一に數へられ、文治中、義經、景時逆櫓の論ありし時、各、黄金を寄附して祈願を籠めし處。昔時は莊大なる社殿なりしかど、今廢れて纔に古への面影を存せり。

宗因の塚、平八郎の墓 難波談林の祖として、一時世を風靡したる俳人西山宗因の墓は、天満西寺町西福寺内に存し、天保の頃、貧民の救恤を企て、兵を起し、富豪を襲ひ、幕兵に破られて憤死したる大鹽平八郎父子の墓は、天満寺町橋東詰成正寺内にあり。

天満宮 菅原道真公の靈を祀る府社天満神社は、天満大工町にあり。往古此地大將軍の森と稱する大森林翁鬱として繁茂したりけるを、天曆の頃、偶靈光の林中に明滅するありて、人皆恐懼せし折しも、一夜菅神の靈里人に告げて曰く、難波の梅を慕ひて此地に影向すと。乃ち奏して社殿を營みしといふ。爾後、火災に遇ふと二回、明治三十四年大に修築の工を起し、今や莊麗なる一大社殿となれり。境内には地主神、大將軍の祠、

靈符神、蛭子祠、紅梅殿、老松祠、白太夫、神明、八幡、稻荷、住吉、松尾等の末社あり、美しき築山には鶴龜を放てり。鈴木茶溪が『謫居常慕九重天。日拜御衣思慘然。一樓餘薰長不滅。延爲香火萬堆烟。』の詩も思ひ出でられつべし。社後一帯の地芝居寄席多く、恰も東京淺草奥山の繁昌と相似たり。一月廿五日の初天神、七月廿五日の夏祭など、いづれも男女老幼群集し、殊に、夏祭の盛況に至りては、市内之比ぶ可きものなく、銚流しの神事と稱へて、神輿を船に乗せ、大川を下りて、



北河内町一丁目にあり。天満郷中最古の梵刹にして、阿彌陀如來を本尊とし、今、眞宗興正派に屬せり。幕府の頃、天満郷中の人は、如何なる宗徒と雖ども、各米錢若干を納むる習はせあり。今尙當時宮参りの風習を存し、俗に産寺と稱す。

鶴満寺 天満別院より天満橋筋に出て、一路淀川堤に沿ひて北すると數十町。南長

柄村鶴満寺に達すべし。雲松山慈祥院と號し、天台宗に屬す。慈覺大師の創建ならんとの説あり。本堂の傍、古梵鐘を懸け、垂絲櫻の名所なり。鬼貫の碑に「ちもしろさ急には見えぬすゞみ哉」

國分寺 鶴満寺より程遠からず。神龜四年僧行基の開基眞言律宗に屬す。一國一寺の國分寺なりと云へど、生駒國分町にも同名の寺あれば、何れとも定め難し。

長柄附近 「雉も鳴かずば撃たれはすまい、父は長柄の人柱」の俗語ある長柄橋の址は、此の邊りなるべし。南長柄の西方には、鶯塚今も残り。その他、本庄なる長柄

豐碓宮(孝徳天皇皇居)の址(實は天王寺の東にあり)及び、武甕槌命を祭れる鹿島神祠など、名所多く、日羅の塚址も此處よりは遠からず。

源光寺 源光寺は、清淨瑠璃山三昧院と號し、淨土宗にして、天平中僧行基の草創に係り、有名なる天筆阿彌陀如來を本尊とす。行基爰に三昧火坑を始めしぞ、實に火葬場の嚆矢なりとぞ。

崇禪寺 北中島村に在り。曹洞宗にして、天平中僧行基之を草創せり。境内に遠城治左衛門兄弟の墳あり。有名なる崇禪寺馬場復讐の形見にして、事の梗概は人の能く知る

所、今更に説くを要ひず。寺内に二士が用ひし刀劍、鎧帷子などを藏せり。寺前數町に亘れる松林は所謂馬場にして、緩歩の間、往時を追想する念、轉た禁じ難かるべし。

神津村附近 三津屋に名區を得るもの二、長樂寺と云ひ、三津屋城址と云ふ。寺は眞言宗にして、弘法大師の留錫せし處、城址は小楠公の遺跡なり、今、光惠寺と云へる一寒寺を存す。

造幣局 神津村より來路を辿り、直ちに造幣局に抵るべし。地は澱江の右岸に位し最も形勝に富めり。我邦最舊の洋式金工場にして、明治四年の創設に係る。内に、精製したる貨幣地金を溶解する處、地金を引伸ばして切斷する處、文字及紋章を打込む處など、各課分擔してこの職に當り、秩序整然一絲亂れず、實に我邦無雙の貨幣鑄造所たり。

遊覽者にして、内部の觀覽を欲するあらば、同局は、毎火曜日局員の紹介ある者、及び前日迄に直接願ひ出づるものに對し、觀覽許可の切符を與ふべければ、その心して手續するを要す。庭内に櫻樹多く、毎年花季三日を限りて、特に公衆の通覽を許せり。

泉布觀 元と造幣局に屬し、應接所の用に充てられたりしが、明治五年、今上天皇陛下御西巡の際、此處を行在所に定め給ひ、泉布觀の稱を賜はりぬ。後、屢行幸啓の事

あり。廿四年に至りて宮内省の所管に移り、近時美術協會より同觀拜借の儀を申出て、爾來、美術展覽會など催せり。

淀川橋

泉布觀前より對岸櫻ノ宮の長堤に架したる古式の長橋あり、淀川橋と云ふ。明治卅五年の創設に成り、橋上の望閣頗る面白く、櫻花滿塘に咲き亂れたる靡月夜、深翠流に臨みたる夏の夕暮、明輝を揚げたる秋月の宵、朔風骨に沁む冬枯の曉、一としてその風趣に富まざるはなく、見るとして詩的ならざるはなけん。

櫻ノ宮

淀川橋を東に渡れば、天照大神を祀れる櫻ノ宮あり。宮の附近、澱江の長流に臨める一帯の長堤には櫻樹を列植し、花期遊人の來り集ふもの多く、市内櫻花の最勝地として他に其の比ひなし。纜山の詩に「兩岸輕風花又花。嬌烟擁樹浩無涯。一川蕩々泛香去。遍澆浪華十萬家。」但し先年造幣局建設の際多く櫻樹を伐り、又、十八年の洪水にいたく其風情を害はれしかど、老櫻樹の残れるもの尙甚だ多く、且、東郊の菜花黄金の如き頃は、一入の眺を擅まゝにせり。

母恩寺

櫻ノ宮より淀川堤を溯り、洪大なる水道水源地を瞥見して、洋上江町に至らば、町の西北隅に母恩寺を得べし。淨土宗の比丘尼寺にして、仁安三年、後白河天

皇御母待賢門院御菩提のために建立せさせ給ひし所、天正年中兵火に罹りて舊觀を失ひ、今は大に頽廢せり。境内の蓮池はその名高く、夏秋の候節を曳く者多し。

大長寺

再び元と來し路に引き返し、櫻ノ宮を過ぎ、網島に向ふ途上、大長寺を見る可し。淨土宗にて京都黒谷に屬す。境内には名高き鯉塚、及び近松の戯曲に名高き小春治兵衛の比翼塚あり。

八軒屋

天滿、天神二橋の間、伏見通ひの船溜り場あり、之を八軒屋と稱す。篠崎武江の「八軒屋畔客乗船、三大橋頭薄暮天、多少行人蓬底夢、一齊輾破水輪邊」と唱ひし夜船、今は汽船と其の觀を更へぬ。

天滿橋

天神、難波の兩橋と併せて、大阪の三大橋と云ふ。昔時は普通の木橋なりしが、明治十八年に改築して今の大鐵橋と爲り、且つ舊位地より徹しく下流に架す、長さ百八十八間、其の少しく下流に架する

天神橋

は、市内最大最長の鐵橋にて、長さ百三十一間、天滿橋と同じ、明治十年の洪水以後、時の大阪府知事建野郷三氏の英斷を以て、十五萬圓の巨費を投じて成る。構造の雄偉に外觀の莊麗なる、海内無双の大橋と稱せらる。

難波橋 天神橋の下流、中之島の東端、山崎鼻を以て二分せられたる鐵橋にて、總長さ百十五間、偉大の状は、天満、天神の二橋に亞ぐ。昔時は連なりて一橋なりしに、維新後、中之島を東方に延長するに當り、その中腹を截断せられたり。橋上眺望に富み別けて皎月の古城の東に懸れる夏の夕など、擾々たる俗塵の外、忽ち別乾坤に出るの感あり。篠崎小竹の『江風一掃暑氣清、喜見波心大月生、稍向二橋欄、懸玉鏡。山河影裡幾人行』の景乃ち是なり。近年山崎鼻より起りて長さ七十五間の大納涼臺を河上に設け飲食店、碁、將棋會所などを置きしより、夏夜納涼の客數千人の多きに上るといふ。

豊國神社 山崎鼻より一直線に西し、木村長門守重成の紀念碑を右に見て、大阪ホテルの前を通れば、直ちに豊太閤を祀れる豊國神社に達すべし。別格官幣社にて、明治十二年の創建なり。本社の南に白玉稻荷の末社あり。境内櫻樹多く、胡枝花また少なからず、四季を通じて賽者多し。

中之島公園 中之島東端より、淀屋、大江の二橋に至るまで、其の間を公園とす。地域廣がらざるも、芝草の綠茸々たる間に、青松枝を雜へ、櫻の埒、藤の棚を點綴し、土佐堀川、堂島川の二流之を挟み、四時散策の客多し。近年大阪公會堂、大阪圖書館等

建築せられ、また豊太閤の銅像も建てられ、益々遊賞の客を増しぬ。

大江橋と淀屋橋 二橋ともに公園の西端に在り。一は堂島川に、一は土佐堀川に架す、大江橋の附近は、楠正成が六波羅勢を破りし古戰場、淀屋橋の邊りは、豪商淀屋辰五郎の住ひし跡なり。

以上にて大阪市内の遊覽は略ぼ盡せり。今より更に市内の料理店、飲食店等に誘はんとす。

割烹店

古來の俚諺に、京の着倒れ大阪の食倒れとて、大阪人には美味を食るを以て名あり。其の大阪の料理鹽梅、抑も如何。細かに案内せんには一朝一夕にて盡すべくもあらねば今はその内最も名あるものゝみを紹介せんに、北區にては、中之島の大坂ホテル、銀水樓、森吉樓、靜觀樓(會根崎)鮎宇樓(網島)。東區にては堺卵樓(平野町)産湯樓(桃山)備一亭(備後町)。南區にては明月樓(難波新地)西照館(生玉)。西區にては岸松館等を第一流と爲すべく、見晴席としては吞春樓(眞田山)朝妻、鶴の茶屋、東茶屋(以上北野)等

あり。風流なるは鷗庵(難波)婦夫池(今宮)等、鰻、川魚は伊勢萬(道頓堀)富南貴(備後町)二熊(道頓堀)播半(心齋橋北詰)紫藤、網彦(大川町)東吳(道頓堀芝居裏)伯太山(江ノ子島)菱富(會根崎裏町)等、即席料理は灘萬(北濱二)南吉(難波新地)緑、入船(法善寺内)東(千日前)鎚田(江戸堀)魚治(御靈筋)日柄喜(相合橋北)等あり。雞肉は大豊(大黒橋北詰)現長(松島)島六(道頓堀)泉清(安土町)鳥菊(道修町)と新町橋西詰との二軒)等あり。牛肉は改進黨(淡路町)北村(新町橋東詰)新門亭(新町橋西詰)江戸安(淀屋橋南詰)源氏(道頓堀)等あり。精進料理には、茶臼山の雲水、高津の湯豆腐、太融寺の藤浪亭、阿彌陀池の「すみくだ」等、最も名高く、天麩羅は御靈筋の梅月、太左衛門橋の魚喜等、鰻鍋は、美濃庄(御靈裏)金花(道頓堀)等を最とす。粟積汁は、堀江橋南詰の越伊獨り粥を稱へ、薄切焼は、道頓堀の京興、丸萬を推すべく、西洋料理は、前に記したる大阪ホテル、古川俱樂部より、浪花亭、三好亭、自由亭、天五樓等に至るまで、いづれも賞味せられ、支那料理は、川口の豊樂園に及ぶもの無く、ピヤホールは中之島、梅田、道頓堀附近に多く、鮓は、紅卯(今橋)吉野(淡路町)を初として、西横堀の小鯛鮓鮓、京町堀の奴鮓等最も聞え、一膳飯屋は、和國(座摩の前)多々壽(大和橋南詰)一の谷(大黒橋)絹

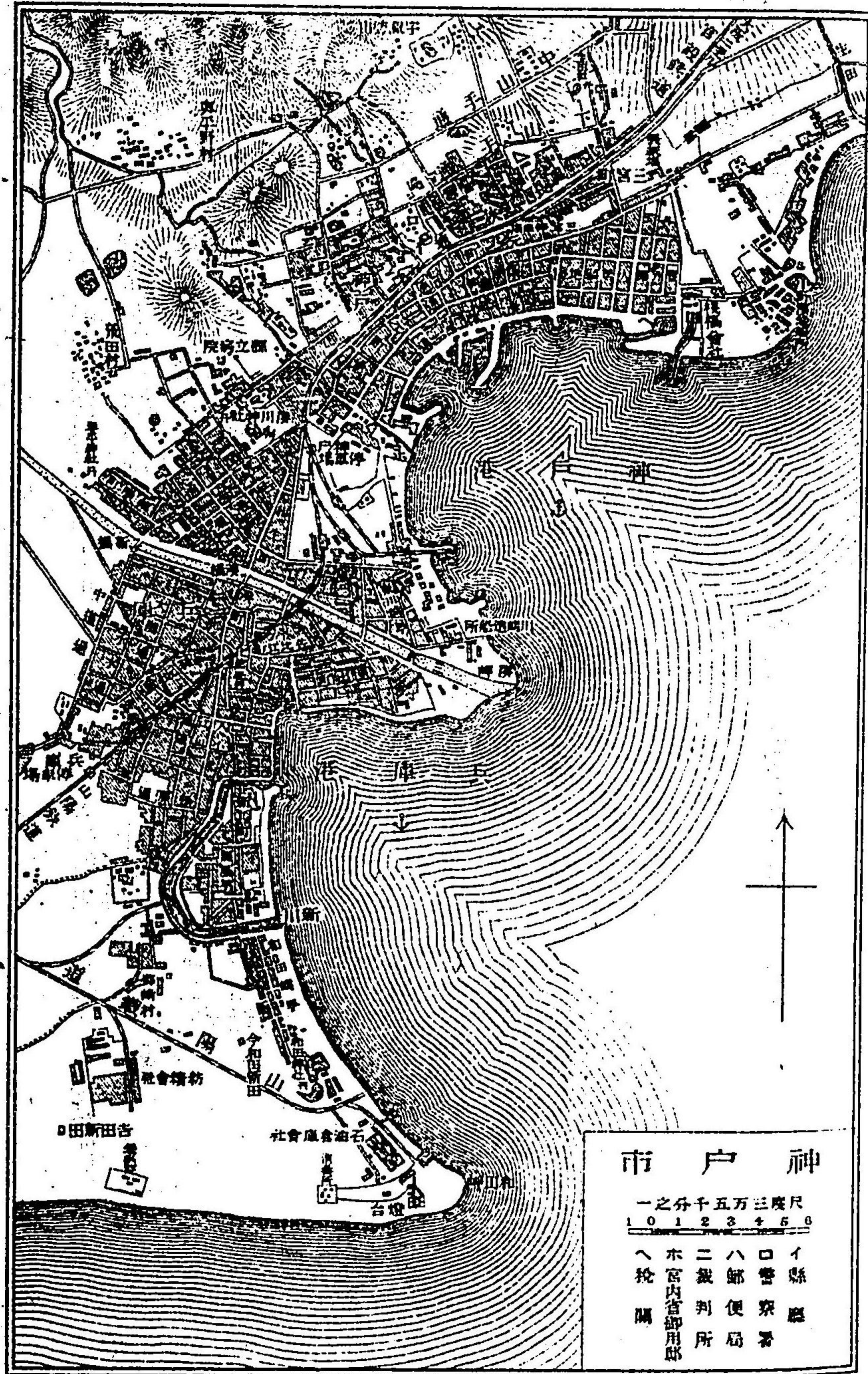
川(天満)等、多く稱へられ、佃屋は、戎橋畔の丸萬、道頓堀、京町橋の井筒等にして生蕎麥は、道頓堀の福住に比す可きものなし。以上の外、飲食店に名ある者極めて多けれど、一々記すの要なかるべし。

遊樂の榮

花柳界 大阪に遊廓多し。「飲、咲、儉、殘、磨、含、羞、露、半、唇、一、眉、猶、巨、耐、雙、險、定、傷、人」といふが如き佳人少ならず。或は酒席に聘し、或は寢醒の眺めに侍べらしめんとせば、到る所招きに應ずる者夥多し。高等遊廓としては、近松の戯曲に名高き會根崎新地(北ノ新地)の表通りと裏通り、西は出入橋より東は蛸橋あたりまで「その涙が蛸川に流れ」と云ひけん蛸川に沿ひて、樓々相連なり、西區には、新町橋より西口の邊りまで音に聞へし九軒、越後町、乃至は塚ノ側と稱する狹斜を總べて、新町廓と云ひ、阿彌陀池附近なるを堀江廓といふ。南區には其の數最も多く、戎橋以北、島之内(宗右衛門町)以南の九郎右衛門町、難波新地(溝の側)相生町、阪町等最も顯はれ、下りては松島遊廓その名高けれども、此邊りは職人肌の遊興を買ふ所として、喧嘩を好む破落戸などの打ち







第五版

代亭(淡路町)金澤席(千日前)瓢亭(新町)永樂館(北新地)林家席(天満天神)等最も著はる。

大阪土産

既に名所も見盡し、料理も味ひ盡し、佳妓を聘し、芝居を觀、寄席にも遊べる上は、次は郷里への土産物を調へざる可らず。知らず大阪土産に何物か適當なる。先づ呉服太物を求めんには、心齋橋筋の大丸、小大丸、高島屋(飯田)十合、みの屋、御靈の前の會根屋、東屋、粟屋、島安等の各店には、新柄の流行品多く、心齋橋筋の千切屋、襟徳、御靈の前の襟平、襟宇は、襟類専門として聞え、袋物は、心齋橋筋にて思ふさま見廻るを得べく、書籍は心齋橋筋の九善を首とし、吉岡、松村、梅原、盛文館、鹿田、嵩山堂、駿々堂等を推すべし。また文房具は、内北濱の團扇堂、吉井の兩舗は、扇子の仕込み多く、心齋橋筋の古梅園には名墨、筆、硯など悉く具はり、荒木に舶來雜貨の好もしさが多し。化粧品は、高麗橋藤井のるり齋、心齋橋仁壽堂の大和錦、泉勘の白粉等最も好かるべく、菓子類は高麗橋鶴屋の干菓子、風月堂支店の洋菓、淡路町通り駿河屋の羊羹、

土佐堀高岡の干菓子、松屋町の福島屋、二ツ井戸の津清、阿彌陀池大黒の粟もちし、相生橋湖月堂の蒸菓子、三日月堂の牡丹餅などを掩すべく、時計は心齋橋筋の石原、堀米、北出に良品多く、帽子商も、心齋橋筋より平野町御霊附近に多し。尙ほ大阪博物館の賣店、御霊筋の五二會館、心齋橋筋の勘工場等に至らば、御好み次第の珍らしき品をひと纏めとして購ひ得べく、代價も正札附の看板を掲げ居れり。

諸官衙と學校

市内遊覽の間に、既に諸官廳の建物を一瞥したるべけれど、今尙ほ其の中の重なるものを掲ぐれば、大阪府廳、府會議事堂、大阪市役所は、何れも西區江ノ子島にあり。第四師團司令部は舊城内に、大坂砲兵工廠は城北に、大阪府監獄は北區堀川に、造幣局は同區川崎に、大阪控訴院と大阪地方裁判所とは北區絹笠町に、大阪税關は同區富島町に、大阪海軍局は同區中之島五丁目に、大阪稅務監督局は同區中之島四丁目にあり。大阪大林區署と小林區署とは東區内久寶寺町二丁目に、中央電信局は北區中之島二丁目に大阪電話交換局は東區平野町二丁目にあり。

今また學校の著名なるものを舉れば中之島の高等工業學校、堂島の高等商業學校、高等女學校、(別に東區清水谷にも高等女學校あり)天王寺の師範學校、同女子師範學校、天王寺中學校、北野の北野中學校、市岡の市岡中學校等を數ふべし。

諸銀行と諸會社

古來日本商業の中心地、今は帝國商工業の首府として推さるゝ所、銀行、會社、取引所等の數多き、一々枚舉に遑あらねど、其の中に、最も世に知られたるものゝみを舉れば、東區高麗橋三丁目の三十四銀行、百三十銀行、同區淡路町二丁目の浪速銀行、同區北濱三丁目の北濱銀行、同區今橋二丁目の鴻池銀行、同四丁目の住友銀行、西區北堀江五丁目の五十八銀行等の外、東京の大銀行は皆な支店を此地に置き、乃ち日本銀行支店(北區中之島)第一銀行支店(東區高麗橋通三丁目)第三銀行支店(同區本町四丁目)帝國商業銀行支店(同區今橋三丁目)三菱銀行支店(北區中之島五丁目)三井銀行支店(東區高麗橋通三丁目)等あり。工業會社には、大阪紡績會社(西區三軒屋上の町)日本紡績會社(北區下福島一丁目)大阪セメント會社(西區木屋町)大阪電燈會社(北區中之島五丁目)大

阪アルカリ會社(西區湊屋町)金巾製織會社(西區四貫島町)日本綿花會社(北區中之島二丁目)内外綿會社(北區源藏町)などあり。帝國海運の大部分を占有する大阪商船會社は西區富島町に、同日本郵船會社支店は、北區曾根崎に、大阪株式取引所は、東區北濱二丁目に、大阪三品取引所は同區北久太郎町三丁目に、また古來米相場の本場として知られたる堂島米穀取引所は、北區堂島濱通一丁目にあり。其他保險會社には、日本生命保險會社は東區北濱三丁目に、大阪生命保險會社は同區北濱五丁目に、大阪火災保險會社は、同區備後町四丁目に、日本海上保險會社は、西區江戸堀南通二丁目に、日本火災保險會社は、同區京町堀上通一丁目にあり。其他東京の各保險會社も多く支店を此地に置く。また新聞社には、大阪朝日、大阪毎日、大阪毎日の兩新聞と、大阪新報とありて、何れも發行部数の多き、全國中比類稀なりと稱せらる。

實に大阪は全國第一の商工業地なれば、其の商工業各機關に就て細かに説けば、それのみにて優に一書を爲すべけれど、今は主として遊覽を案内する目的なれば、此市の事は、此の位にして筆を止め、以下更に大阪より西北方に出發せんとす。

(六) 攝津の北西部

攝津の北西部は、西成、豊能、河邊、有馬、武庫の五郡を包括し、大阪市以西は皆この中に含まる。此間重なる道路を舉れば、大阪市より尼ヶ崎、西の宮を経て神戸市に達するものと、伊丹、池田を過ぎて、丹波の篠山に通ずるものと、西宮及び御影より三田を経て、丹波の篠山に至るものとあり。而して京都より西に走る山崎街道は、高槻より伊丹を過ぎて西の宮に連絡し、別に大阪市より伊丹池田地方に達する線路數條あり。要するに、國內の道路恰も織るがごとく、その混亂紛糾せる蛛の網も管ならず。官設東海道鐵道は大阪を経て神戸に達し、阪鶴鐵道は尼ヶ崎より起り、神崎、伊丹、池田、三田を経て、篠山より福知山に達す。而して山陽鐵道は、神戸に於て官設鐵道と接続して起り、西の方、姫路、岡山、廣島を経て、馬關に達するなり。今、此等大阪以西の地方を案内するに當りて、大阪以東との連絡を明かにせんが爲め、山崎街道より始めて、以て大阪附近に及び、それより次第に西北に移り行かんす。

池田伊丹附近

山崎街道の分岐點芥川村より二里にして、郡山町あり。人口千餘を有する一邑にして、茨木停車場に十二町餘を隔てたり。これより街道は全く鐵道線路と離れ、妙見山脈の翠微は、漸く旅客の衣を壓せんとす。一里にして粟生村あり。

勝尾寺 是此附近有名なる真言宗の巨刹にして、十一面觀世音を本尊と爲す。西國巡禮二十三番の札所なり。寺域三千餘坪、老樹鬱葱として晝尚暗く、寺門より本堂に至る數町の間は、皆阪路にして處々に石階あり。殊に、此寺に忘るべからざるは、境内の東宇東谷に北朝の天子光明院の陵あり。

箕面山 旅客は此地を過ぐるに當りて、右に雄偉絶特なる一山の聳るを認むべし。これ即ち、攝津北部に有名なる箕面山なり。大阪よりすれば、其の道程六里、池田まで汽車の便ありて、それより箕面山麓まで車賃二十五錢なり。東よりするものは、茨木驛より下車して、山崎街道を收落まで下り、それより山路に就くをよしとす。山中に一寺あり。瀧安寺と稱し、白雉年間役小角の草創せしところ、世々天台の修驗道を修め、京

都の聖護院に屬せり。本堂には辨財天、本地堂には如意輪觀音を安んじ、行者堂には小角自刻の自像を安ぜり。また辨財天の像も小角の作にかゝり、江州竹生島、相州江ノ島、越州嚴島の辨財天と共に日本四辨財天の目あり。されどこの山の奇は、所謂箕面の瀧の附近に存し、其地に達するには、寺より猶十七八町程北行せざるべからず。瀑は絶大なる石壁の一角缺けたる處より落ち、高さ十一丈、幅三間餘、その勢の猛烈なる、萬弩齊しく發するの概あり。蓋し、近畿第一の瀑布と稱すべきなり。ことに満山楓樹多く、一たび霜に染れば、山は只是れ錦をかけたるが如く、其掩映の美、また多く他に求むべからず。溪また甚だ凡ならず、岩石の錯落布置、頗ぶる趣を得たり。瀑畔に三針の松あり、山奥に奥の瀧あり。其他唐人戻り岩、白龍岩、坐禪岩、等皆山中の名勝なり。一山を隔て、泰野村に石澄の瀧あり。歸路一訪するも亦興味なしとせず。

池田町 山崎街道を北に入ること半里、伊丹町より來れる丹波街道の一市街にして、丹波境の群山峻嶺は漸くその翠微を曇み來る。阪鶴鐵道はその西北十二町の處に停車場を置きて、直ちに右曲して、有馬郡の山中に向つて走れり。東西九町、南北八町、市坊十六、戸數千五百、人口約七千を有し、他に郡役所、警察署、區裁判所等あり。北

方山間に於ける交通の要地に衝り、物貨集散の頻繁なる、郡中第一の都會なり。北部山中諸村の炭、木部近傍の薪等皆この地を経て輸送するを以て、皆池田産として世人に知らる。殊に、此地は伊丹町と共に關西屈指の醸造地にして、昔は伊丹池田の酒と言へば天下無類と稱せられたり。現今は灘地方の爲に醸酒の權を奪はれたる觀あり。町内、吳織神社、漢織神社、唐船淵等あり、皆支那より吳織漢織を輸送し來りし時の古蹟なり。五月山は町の北方に聳ゆる一小山にして、日本記に佐伯山と記せるは即ち此山なり。登路八町にして一祠あり、佐伯部の祖神を祀る。山上の眺望頗る佳に、茅停の海の白帆は歴々として眼中に落つ。また池田の愛宕碑といふは毎年陰曆七月二十四日、村民此山に上り、數多の燈火を點するの奇觀を言ふなり。この山腹に池田光政の艸創せし大廣寺と稱する巨刹あり。

有岡城址 池田町の東北にあり。池田信輝の據る所にして信長記、太閤記などに數しば攻伐のありし城なり。又此附近に古城址多し。

豊能郡の北部、山嶽重疊、南に妙見、余野の高嶺あり、北に劔尾山、摺脛嶺の峻峰あり。其間良田少く、土民纒かに寒天を作りて以て生計を營む。蓋し大坂府管内人烟の

最も稀小なる地なり。此方面に於ける名勝古蹟の稍顯著なるものを記せば、

久安寺 細尾村大字伏尾にある眞言宗古義派の巨刹なり。往古は門前の僧坊殆ど千

戸に及び、今も寺尾千軒の名を存せり。寺の附近、東の瀧、連理瀧、等あり。秋の紅葉の候は風光甚だ美なり。

高代寺 吉川村の山上にあり。多田滿仲の祈願にして、天徳二年の創設にかゝる。

舊時は殿堂谷を填め山に凭りて、女人の高野と稱せられしものなれど、今は二三の僧房を見るのみ。

妙見山 郡内北部の高山にして、登路二十五町、山嶺に妙見堂あり。八九十年前より靈顯赫著なりと傳へられ、京都大阪の市人は勿論、遠く海山を越えて來り賽するもの多し。ことに厄難病苦に罹る者は、此地に參籠すること數日、日々堂下の瀧に浴し、口に法華題目を誦し、恰も狂せるが如し。

其他、久佐々神社(西郷村中宿野)月峯社(大里村)山邊社(枳根莊村大字寺邊)枳根神社(同村今西)清山寺(同村神山)六所權現社(全所)等あり。他は枚舉に暇あらず。

池田町より踵を旋せば

伊丹町 は二里を隔て、河邊郡に屬せり。戸數一千三百人口六千五百、神戸を距ること七里二十一町、大阪を距ること四里餘、阪鶴鐵道はその停車場を町の東端に置けり。古來池田と共に清酒の産地として名高く、白雪、烏鯛等の銘酒は、上戸の垂涎を禁ずる能はざるところなり。旅館に、八木房、今井、丹和、菊屋、久代等あり。野宮祇園祠は町内宇天王町にありて、往古豊櫻崎宮と稱せしもの、後世猪名野の中央にあるが故に野の宮と改稱せしといふ。近隣諸村の總鎮守なり。寺町に、墨染寺あり。境内に荒木村重の塔、俳師鬼貫の墓、女郎塚等あり。女郎塚は荒木村重落城の時、城中の女子等織田勢の爲めに焼殺せられたるを憐み、後村民の建立せし處といふ。此の伊丹町附近は往昔の猪名野にして、根笹、熊笹生ひ茂りたる廣野なりしとして

ありま山猪名の笹原風吹けばいてそよ人を忘れやはする  
有馬山みねの松風音さえて猪名の笹原うつら鳴くなり

大貳二位 順徳院

昆陽寺 稻野村大字寺本にあり。天平五年僧行基、所謂猪名の笹原を開拓して草創せしものにして、眞言宗古義派に屬せり。寺の北五町余を隔て、昆陽池あり。僧行基の開

鑿にして周圍大凡三十三町、俗に大池と稱す。歷代の古歌この池を咏するもの多し。また、同村大鹿に荒府の池あり。周圍十九町、蓴菜の極めて佳なるものを出す。

神崎驛 官線鐵道の一驛にして、また、阪鶴鐵道の起點なり。此の地は往古より西海の要港に當り、商家殷昌、妓樓軒を比べたりしといふ。いま猶ほ傾城塚なるものを存す。

阪鶴鐵道は神崎驛より更に一小支線を起して、以て大阪灣の要港なる尼ヶ崎驛に達せり。

尼ヶ崎町 は河邊郡の南方、海岸に位し、中國街道の衝に當り、大阪市を出て、西方第一次の繁華なる都會なり。舊櫻井氏の城市にして、市坊を有すること四十四、東西十七町南北五町餘、戸數四千餘、人口一萬七千を有し、郡中第一の都會、街衢版賑にして、高厦大閣相連り、一見商業の盛なるを知るべし。殊に、溝渠四通し、舟楫の便に富める、宛然小大阪の觀を爲す。尼ヶ崎城址は初め大覺寺城と稱し、大永年間細川尹賢の據りしところ、元龜年間荒木村重の右に歸せり。荒木氏滅亡の後、池田信輝これを領し、徳川氏に及んで櫻井氏の城邑と爲れり。維新後、全く城壘を破却し了りたれば、今は只



空濠殘渠によりて以て當年を偲ぶべきのみ。寺町には有名なる巨剎相連り、廣徳寺、栖賢寺、本興寺、法圓寺、海岸寺、大覺寺、等皆壯大なる建築なり。ことに廣徳寺、栖賢寺は豊臣秀吉が山崎合戦の勝利を祝するが爲め、諸將を集めて宴を開きたるを以て名高し。貴布禰神社は西町に、大物神社は大物村にあり。共に町内著名の神社なり。旅館には、一藤、平岡、京利、料理店には立花亭、金久等あり。海濱には海水浴場ありて夏日は遊客群集す。

これより中國街道を西に進めば、琴浦の風光明媚なる間を過ぎて、古の和歌に名高き鳴尾の里の人烟を左方に眺めつゝ、直ちに西の宮町の粉壁に接す。

西の宮近傍

西宮町 西宮と言へば人は忽ちその天下屈指の清酒醸造地なることを想起すべし。灘五郷の中、最も醸造の多額を占め、其酒亦全國に冠たる所、従つて、富豪多く、市街整頓し、人烟甚だ豊かに、武庫郡中第一の都會、人口一萬三千を有せり。縣社大國主西神社は、俗に西宮の蛭子と稱し、字市庭町に鎮座し、天照大神、素盞鳴尊、蛭見尊の三

座を祭る。社地廣闊にして、樹木甚猶暗く、攝社末社のその境内に散在するもの甚だ多し。祭禮は陰曆正月十日を以て執行し、世に十日蛭子と稱す。賽客の來りて福と社頭祈るもの、陸續として踵を絶たず。鐵道またこれが爲めに臨時汽車を發するに至る。其他、有名なる巨剎としては、海清寺、六湛寺、聖乘院、積翠寺、西蓮寺等あり。大字越水にある古城址は永正年間細川三好兩軍の互に交戦したるの地、足利尊氏が弟直義と戦ひて敗績したるも亦此地なりといふ。



廣田神社 京都市より山崎街道を経て西宮町に達する街道筋に、\* 栽植し、その風光おのづから名所圖繪中のものたり。\* あり。官幣大社にして、國中有名な古社なり。日本記にも見えたる勝地にして、神功皇后攝政元年の創建なり。社は岡阜の上にありて石礎數十級遙かにこれに通し、社下大凡七八町の間、兩傍に松樹を

寶塚温泉 は西宮停車場を去ること二里半、真元村字伊子志にあり。阪鶴鐵道の寶塚驛なり。故に同鐵道によりて往くを便とす。停車場より二町、武庫川に架したる一本橋脚の形面白き橋を渡れば、對岸の高所に浴舎旅亭層々相連り、建築の宏大にして、浴

槽の清潔なる、流石は大阪附近の温泉と點頭かる、ばかりなり。此温泉は攝津名所圖繪に鹽尾湯又川面湯と記せしものにして、往時は其名未だ多く世に知られず、浴樓を築きて以て客を延くに至りしは實に明治廿年以後の事に屬す。炭酸泉にして、多量のコロルナトリウムを含み、皮膚の薄弱なる人に特効あり。温泉宿の重なるものは分銅屋、寶樂家、炭酸ホテル、泉山、丸山、手島山等。一日の宿泊料は一圓内外、晝飯は五十錢。また、其地の上方に擧ぐる樺葉嶽は、樺葉多く、土人歳末に及べば、其葉を採て市に出すを以て名あり。散歩がてら登臨すべし。

打出の濱

西の宮町一帯の海岸、沙明かに波碧なる處を稱し、今も國道に打出村の名を存せり。往昔應仁天皇の庶兄鹿阪、忍熊の二皇子の兵を擧げて叛せし地として有名なり。

甲山

西宮町の北に聳えて、其形兜に似たり。これ其の名を得たる所以。山中の一寺は神呪寺と稱し、文武天皇の御宇役小角の草創せし處。古義真言にして、弘法大師作の如意輪觀音を本尊とす。山、幽邃にして、最も避暑に適し、自から一區の別天地を爲せり。飛泉數條、九想瀧、大井瀧、乾瀧、鳴瀧等の目あり。其他山中訪ふべき奇勝多し。

山の高さ三百七米、上原村より登るを便とす。

國道打出村の上方三町ばかりに阿保親王の墳をたづね、往昔の芦屋の里を経て、魚崎より住吉に至れば、有名なる

住吉神社

は住吉停車場の西隣にあり。郷社にして、底筒男命、表筒男命を祭り、神功皇后攝政中の草創にかゝれり。これを以て、後、神功皇后の靈をもこゝに合祀せり。社殿壯麗ならずと雖も、自から神さびて、賽客をして轉た神代の昔を思はしむ。社背の竹は神功皇后の長門豊浦より此地に上陸せし時、携へし釣竿を地上に挿みしに忽ち枝葉を生じ、今に至るまで枯死せずと言ひ傳ふ。又、北、御影山に往古住吉の神の影向したまひしと稱する地あり。

岡本梅林

住吉停車場を下りて、六甲山越の街道を少しく右に入りたる處にあり。前に田圃を控へ、後に山を負ひ、山上山下皆梅なり。花時は遊客腐集し、處々の掛茶屋に絃歌の聲を沸かす。

酒造家の軒をつらねたる御影町を過ぎ、一里餘にして、右方、摩耶山の高く聳えたるを見る。

摩耶山 六甲山脈中の一峻嶺、老樹森々として山を蔽ひ、大阪灣は一望眼底に落つるの趣あり。上野村より絶頂まで登路十八町、絶頂に近かんとする頃より石燈籠とて相連り、上に天上寺の一寺あり。眞言宗にして大化年間法道上人の開基にかゝり、本堂には十一面觀世音を安んず。夏時は外人の來りて晏を山中に避くるもの多く、寺は其の客殿を貸し、賽者をして宿泊せしむ。此寺の精進料理は殊に有名なり。山の半腹に古城址あり、正慶二年赤松圓心が南朝の爲めに六波羅勢を破りしところ、松風の聲、猶當年鼙鼓の響を聞くの思ひあらしむ。

これより田間を行くこと十數町、神戸市の人家は陸續として其前に顯れ來る。然れども今は神戸を説く前に、先づ有馬地方を案内すべし。

有馬温泉附近

有馬郡は攝津の北部に僻在し、山影は山影と相重り、只纒かに丹波に通ずる一路を開きたるのみなれど、有名なる有馬温泉あるを以て、世人猶此地方を説くもの多し。

有馬温泉 武庫山の西北、湯山町にありて、神戸市を距る五里廿七町、大阪市を距

る十三里半、これに赴くには、住吉停車場より瀛車を下り、六甲山を越えて、直ちにそれに至るを好しとなす。その道程大凡三里なり。また、阪鶴鐵道に依れば、三田驛より三里、車馬を通ぜり、町を湯山と稱し、四方大凡三町許にして、市坊の數十六、人口一千七百餘を有す。人家山崖に據りて層々櫺比し、百貨具備せざるはなし。温泉は遠く神代より涌出し、歴代の名将名士來り浴せしもの甚だ多し。現今の浴場は明治二十四年の改築にして、構造は日本の古宮殿風に擬し、各浴舎の共同して使用するなり。温泉の温度は攝氏の三十九度内外にして、鹽類泉に屬し、これを嘗むるに鹹味あり。常に鹽化鐵の遊離するありて、水色溷濁し、且つ赤褐色の沈澱を生ず。故に手拭、浴衣等、忽ち其色に染むるのみならず、又入浴度數の多きに從ひ、手足の爪までこれに染むことあり。効能は腫物、皮膚病、打傷、中風、リウマチス、子宮病、貧血症等に著るし。旅館の高樓を構へたるものは、皆な所謂温泉宿にして、兵衛、御所坊、池の坊、中の坊、二階坊、奥の坊、下大坊、ねき屋、浦の屋、つぼ屋、等あり。其他、外人の宿泊をのみ業とせる清水、杉木、増田等あり。大湯女、小湯女等の制ありて、有馬節なる一種鄙猥なる俗歌を唄うを以て名あり。

附近の名勝 （上） を舉れば温泉寺は愛宕山の半腹にあり。新義真言宗にして、一度坂敗に歸せしを天正年間豊太閤の北政所重ねて建立したるものなりと。山上に愛宕祠あり、山城葛野郡の愛宕神社と同體にして、社前の眺望頗る快豁なり。境内に報恩寺、合併寺、清涼院、極樂寺等あり。清涼院には平清盛塔、豊太閤願温泉の舊蹟等あり。また温泉神社は、昔は湯山三所権現と稱せしが、維新後神佛混合禁止の令と共に之を分離し今は郷社となれり。社殿莊麗にして、熊野權現、三輪明神、香下明神の三座を合祀す。城山は川を隔て湯山の西に峙つ。山中に古城趾あり、天文年間三好宗三の據りし所なり。山麓に一寺あり、善福寺といふ。次に鼓の瀧は、南の澤にあり。町を南に距る八町餘、高さ三丈濶さ一丈八尺に過ぎざる小瀑なるも、境の甚だ幽邃なるを以て、自から一勝區を成せり。殊に、紅葉の候は、此邊悉く綿繡を敷く。山の赤き、水の碧き、石の白き人をして歸るを忘れしむ。又、瀑前に有明櫻と稱する大樹ありて、花時は甚だ壯觀なり。飛鳥井雅重曾て有馬六景を選みて題咏せるあり。其の目を、鼓瀧松風、有明櫻春望、落葉山夕照、温泉寺晚鐘、功地山秋月、有馬富士雪と爲す。功地山は湯山の東南にあり、孝徳天皇行幸の時、其山より木材を伐採して行宮を營みたるにより、勅して功地山と名

つけしとぞ。また有馬富士は、湯山の北四里に聳立する高山にして、まことの名を角山といふ。薬師堂の上方より望めば、其形富士に似たるを以て其名あり。また安藤亭十二景なるものあり。概して地、山水に富み、風俗また甚だ悪しからず、物價も他の温泉に比してさして貴しにもあらず。蓋し、近畿地方、自から一の別天地を爲せる温泉なり。此地の産物には、有馬筆、竹細工、藤細工、墨、湯染手拭、有馬焼等あり。就中竹細工は最も精巧にして、近來外國に輸出するもの多し。湯山より、船阪に出て、生瀬に至れば、其途中屏風巖の奇石あり。小多々川の水、所々に急瀬を作り、四十八瀬の稱あり。生瀬温泉 阪鶴鐵道生瀬驛にあり。近年の開設にかゝり、多少の名聲あり。殊にこれより三田町に至る間は、山深く、溪急に、楓葉の美、近隣に絶せり。また、道場村宇生野に、羚羊谷（かもしかたに）あり。奇岩甚だ多し。

三田町 是有馬郡中第一の都會にして、人口四千餘を有せり。播丹街道の要路に衝れるを以て、市街般盛に、商業活潑なり。町内に三田神社あり。車瀬橋の螢火も亦此地の名物なり。

それより丹波の國境まで里數大凡三四里、藍本驛より一哩餘にして丹波の古市驛に達

す。北部は山深く、溪幽に、飛泉所々に懸り、未だ世に知られざる山水の奇勝多しといふ。

神戸市

神戸港の沿革 桑田變じて海となるて、三十餘年前までは鷗棲鷺宿の寒郷、三十餘年後の今日に至りては、内外交通の要衝、萬貨山積の一大貿易港となりたる神戸の如き、その長足の進歩は、蓋し海内稀に見るところなるべし。神功皇后、孝徳天皇の御宇より降りて、平相國が福原の遷都、經ヶ島の築島は言はず、豊太閤が大阪城を築きたる後に於てこそ、神戸の母たる兵庫港の繁昌は開けをめぐれ。天明年間に及びては、商業地としての兵庫は、その基礎すでに固く、諸國彌漕の船舶、津頭に往來し、街衢の體面を備へ來り、東は湊川より、西は柳原に至り、民戸稠密にして早く一都市を形成せり。然れども今の神戸市の本體たる要區は、なほ神戸村、二ツ茶屋村、走水村の名の下に、蕭條たる西國街道に沿ひて、現時繁華の中心たる湊川神社のあたりさへ、只僅かに坂本村の畔道に建てられたる楠公墓畔の茅屋三五點々たるものありしのみ。神戸と

いふ名稱は、上古生田神社の神戸の民を置かれしが村名に残り來りしなり。茲に神戸開港の沿革を述べんとするには、先づ筆を安政年間、幕府の臣勝義邦(海舟伯)が、神戸村の地を卜して造營せんとを建議したる、神戸海軍所の事に起さざるを得ず。建議は將軍徳川家茂公の嘉納する所となり、勝は攝州神戸村海軍所取建御用兼攝海防御掛を命ぜられぬ。これ獨り神戸市開發の第一頁たるに止まらず、實に大日本帝國海軍の濫觴たりしなり。既にして英佛米蘭四國の軍艦は兵庫港に投錨して開港を要請せり。鎖國の長夢は驚かされぬ。幕府は狼狽せり。京師は騷擾せり。時勢の變は慶應三年十二月に至りて、兵庫開港の式を行ふに及ばしめ、貿易機關として開港商社といふを設け、大阪の豪商を擧げて其取扱を命じ、神戸村生田川以西の海濱を選定して、外國人居留地となし、明治元年正月兵庫事務局を假設し、新政の施行その緒に就けり。兵庫鎮臺、兵庫裁判所(後兵庫縣と改稱)等の設置これに次ぎ、神戸東西兩運上所(後税關となる)の開設は、今の伊藤博文侯の名を以て、各國領事に通牒せられ、兵庫事務局の外務掛これに移りて、内外貿易の稅務を主管せり。この冬福原の新遊廓(今の東川崎町邊)を許し(四年新福原に移る)、明治二年夏湊川神社造營の議起り、五年五月に至りて成る。是よ

り先、三年閏十月を以て大阪間の電信線通じ、これと相前後して市街地の新設、生田川の附替、海岸の築造等、工事漸く成り、神戸市中の面目全く一變し、同時に和田岬の燈臺亦成り、布引遊園を拓き、七年に至り阪神間の鐵道全く其工を竣へ、兵庫神戸を連絡せる大市街は、相生橋驛地の定まると共に、その區劃は成りぬ。

降りて明治十六年には、大阪商船會社神戸支店は創設せられ、廿年に至りて電燈會社起り、神戸市の發達に多大の關係ある山陽鐵道會社は廿一年に創立せられたり。廿二年四月には、古き兵庫、新しき神戸、葦合村、小野村、中尾村、及び脇濱村等を連結して神戸市の名稱を冠せしめ、廿五年九月、終に兵庫港を神戸港に編入したり。廿七年水道敷設の工を起し、三百五十萬圓の巨額を投じて既に竣工するに至りぬ。廿九年更に林田、須磨村の一部、野田、駒ヶ林、長田、東西尻池、石井、奥平野等の諸村を編入せしかば、神戸市の地域大に擴められ、今や人口三十萬に垂んとするに至りぬ。沿草の梗概は以上の如くにして、發達の速度比ぶ可きものなく、最近十年間の進歩は殊に目覺ましきものあり。日清戰役後に勃興したる各種の事業は、駭々として向上し、竟にその停止する所を知らざらんとす。今日面りこの盛況を見る人、誰か荒涼たる砂濱に曝せし昔時漁網

の影を追想し能ふものぞ。

市内の遊覽地 三の宮停車場を出て、北すると四五町、生田神社あり、神功皇后攝政元年の創建にして、稚日女尊を祀る。壽永年中梶原景季が箭に梅枝を挿みて奮戦せし生田森は今尙社後に存し、形見の枯梅は境内に在り。梶原の井、敦盛萩等を觀巡りて神社を後にし、東北に進めば、布引山麓、葦合部に布引鑛泉を得べし。明治十八年の發見に係り、浴場は今、幕の湯、合幕、並湯の三槽に區別せり。此附近、常盤舎、宮貴樓、菊水等の料理店立ち並び、又、紳士の別墅多し。鑛泉の前を過ぎ似たるを以て名づけて布引雌瀑といふ。(口繪寫真參照) 瀑前の長廊を過ぎて、坂路登ると三町、雄瀑あり。百尺の絶崖より滂然擲下し、壯觀を極む。再び來路を辿り、北野町より西南に向へば、山本道の北端、諏訪山に至る可し。山嶺は神戸第一の遊園地とし



て遊履常に多く、眺望遠く数十里の外に及ぶ。山中には有名なる諏訪山鏡泉あり。旅館あり。割烹店あり。西方の森林中には諏訪明神の祠あり。諏訪山より南して相生町、多門通に渉る珍らしき陸橋、相生橋を一覽し、更に西して多門通三丁目に至らば、別格官幣社湊川神社あり。祭神は必ずしも云ふを待たず。人皆、楠正成公の英霊なることを知らん。有名なる「嗚呼忠臣楠子之墓」の碑石は表門を入りたる右手の所にあり。境内、劇場、寄席など多く立ち並び、志士をして聊か慤慤せしめずんばあらざりしが、漸次取拂はれたり。湊川神社を出で、北に行くと四町、楠寺あり。廣嚴寺と號し、元亨元年の創建に係る。建武中楠氏一族七十三人の自盡せし處、一株の古梅、老枝斜なる邊り、一碑建てり。廣嚴寺の南方なる福原は、神戸隨一の遊廓にして、青樓軒を並べ、中々賑かなり。福原町の南端は即ち湊川にして、正成公戰歿の地とて名高く、新し橋附近の堤上には、茶亭など設けて、遊樂の場所とせり。此川平日水涸れて砂礫美しく、霖雨久しきにあらざれば、決して汎濫の憂ひなし。今改修成りて新たに遊園地は設けられんとす。湊川を渡りて兵庫島上町に至らば來迎寺あり。淨土宗にして、本堂の前に松王人柱の標石建てり。昔し平清盛此地を埋立て、島となさんとせしに、工竟に成らず。偶々侍殿松王と

いふもの身を海底に沈め、自ら人柱となりて工事を竣らしめし紀念なりと云ふ。寺は一に築島寺と稱し、地を築島又は經ヶ島と呼ぶ。築島寺の西南、逆瀬川町に眞光寺と云ふ市内屈指の巨刹あり。大化元年の創建に係り、阿彌陀、觀音、勢至の三尊を安んず。寺門の前なる蓮池畔の金銅釋迦像は、眞光寺の如來と稱へて頗る著名なり。寺内に平清盛の塔あり。高さ二十六尺の十三層石塔婆にして、その前なる街衢を隔てたる處には、經政の琵琶塚あり。眞光寺前を東南に進み、和田崎町の南端に至れば、縣社和田神社あり。天御中主神を祀り、毎年五月、盛なる例祭を行ふ。社前、潮入の小江に架せる一橋を渡れば、懸て和田岬に達す可し。此地砂濱長く海中に斗出し、風景極めて明媚なるを以て四時遊人の來るもの多く、又、和樂園といふを設けて、遊園地を作り、夏日避暑納涼の客甚だ多し。岬頭には、舊砲臺、及び不動赤色の燈臺あり。水族館あり。和樂園の西には本間孫四郎還矢の遺跡あり。更に  
近郊の遊覽 を案内せんに、和田岬より眞一文字に西北を指せば、長田村に長田神社あり。神切皇后攝政元年の創建にして、事代主尊を祀る。俗に運の神と稱へ、毎月一日持機客の參詣多し。長田神社より北行して、十八町の坂路を登れば、鹿取山の巔に

達するを得べし。此處よりの眺望頗る佳にして、晴れ渡りたる日は、能く、紀泉の峰巒を認むるを得。山中楓樹多く、晩秋の眺め亦一入の趣あり。山を下り野道を辿り、東して奥平野村に至れば、湊川の源流近く、湊山、鑛泉あり。鑛泉の附近、瀟洒たる旅店、茶亭など建ち、溪山の趣見るに足るものあり。最早之れにて、神戸市内及び近郊の重なる名所を案内し盡くせり。

陸海の交通

既往三十年間に驚くべき發達を致したる神戸港が陸上の交通は略ぼ大阪と等しく、西、山陽鐵道に由りて山陽一帯の有らゆる都會を經由し、下關、門司を経て九州鐵道に通じ、東、官設鐵道に由りて、三府と連結し、更に日本鐵道に由りて、青森に連絡せらる。その他、神崎より分岐して、攝丹を縦斷せる阪鶴鐵道、大阪より分れて奈良を經、名古屋に至る關西鐵道、泉州の野を過ぎりて和歌山に達する南海線、大和、紀伊を通ずる紀和線など、一として連絡せざるはなし。また坂神電氣鐵道は、官設鐵道と並行して、大阪神戸間に通じ、斷へず往復すべき工事は、略ぼ成れり。海上の交通に至りては、幾多の航路、左の表示するところを見るべし。

東北航路

横濱を經て荻の濱、函館、小樽に至る。

北海岸航路。尾道、下關、境、敦賀、七尾、伏木、直江津、新潟、酒田、土崎、能代、函館、小樽等の間の往復。

四國航路。一は高知、宿毛間を往復し、他は、多度津、今治、三津濱、長濱、宇和島間を往復す。別に高松通ひの一航路あり。

九州航路。別府、佐加關、佐伯、細島、油津、鹿兒島間を往復す。臺灣航路。宇品、門司、長崎、基隆、澎湖島、安平、打狗間を往復す。

尙、郵船會社の海外航路を擧ぐれば左の如し。歐洲航路。門司、香港、新嘉坡、坡南、古倫母、蘇士、ボートセツト、馬耳塞、倫敦、アントウエルプを往復す。

米國航路。門司、上海、香港、ヴィクトリア、シヤートル間を往復す。南清航路。下の關、長崎、上海間を往復す。

濠洲航路。門司、長崎、香港、マニラ、木曜島、タウンスヴィル、ブリスベン、シドニーの間を往復す。

印度航路。門司、香港、新嘉坡、古倫母、孟買の間を往復す。



此外今後尚ほ南北兩米を境するパナマ運河開鑿の隣に至らば、更に米洲東海岸の大航路開けて、益貿易の盛況を呈すべきや明かなり。(口繪寫真参照)

旅館 神戸市中の旅館合はせて百五六十戸、その中最も著名なるは、海岸通の西村、後藤、中居、蓬萊舎、常盤舎、安場屋、諏訪山の西常盤、中常盤、東常盤、湊町の常盤花壇、大開通の音羽花壇等にて、宿泊料は普通七八十錢より一圓五六十錢位迄なり。飲食店及割烹店 市内殆ど到る處に在り。中には休憩處にして料理屋を兼ねるものあり。西洋料理には元居留地京町のオリエンタル、ホテル。榮町一丁目グレート、イースタン、ホテル。北長狭通のパーリー、ホテル、改良亭、東川崎町の自由亭、三宮町二丁目の紅養館等最も名高く、支那料理には榮町一丁目の品芳樓、杏香樓、裕記樓、等名高かし。

貸席 は兵庫新川(二十軒)、福原(殆ど百軒)方面に多く、遊廓は此の二箇所に在り。目下神戸の藝妓の檢番と稱するものは、兵庫柳原に本檢、旭檢、福原に福檢、新檢、南檢、神戸に元檢、中檢、東檢、山檢の九箇所にして、藝妓八百人餘あり。娼妓は福原に六百三十三人、新川に二百人餘あり。芝居は大黒座(湊川神社前)、相生座(相生町)、

三ノ宮歌舞伎(三ノ宮神社境内)明治座(兵庫算所町)等最も顯はる。

諸會社銀行の重なるものは、日本商業銀行(銀治屋町) 日本貿易銀行(榮町通) 兵庫縣農工銀行(海岸通) 六十五銀行(戸場町) 神戸貿易銀行(榮町通) 湊西銀行(神明町) 神戸棧橋會社(加納町) 兵庫運河會社(東尻池村) 山陽鐵道會社(濱崎町) 日本貿易會社(榮町通) 兵庫倉庫會社(鍛冶屋町) 川崎造船所(東川崎町) 森本合名會社(元町通一丁目) 神戸米穀株式會社、外に四品取引所(水木通)等あり。

諸官衙公署 には兵庫縣廳(下山手通四丁目) 神戸地方裁判所(橋通二丁目) 大林區署(中山手通七丁目) 郵便局(榮町六丁目) 電話交換局(東川崎町一丁目) 市役所(同上) 稅務署(海岸通) 港務局(同上) 鐵道局(東川崎二丁目) 等を首とし、商業會議所、商業學校、中學校等あり。また新聞紙は、神戸又新日報と神戸新聞との二あり。物産 の特に紹介すべきものは、燐寸なるも、名物としては、牛肉、瓦煎餅、菊水饅頭等、携へ去て土産と爲すに適す。



# 山陽道

## 山陽道遊覽概説

神戸を西に去て長門の下ノ關に至るまで、山陽全道は、陸には山陽鐵道通じ、海は瀬戸内海汽船の往來、日夜織るが如く、全國中交通の最も便利なる所、況や陸上には須磨、明石、舞子等の勝地より、嚴島、錦帯橋、檀ノ浦等の名所多く、海は世界に有名なる多島海の美觀を備え、遊覽者をして前後應接に暇なからしめ、加ふるに沿岸の國道には、姫路、岡山、尾ノ道、廣島、下ノ關等の大都會を首として、大小の市街は連珠の如くに連なり、人口多く、物産豊かに、氣候また甚だ人に適し、旅客の往來最も頻繁なる所と爲す。而して此に案内するは攝津の極西の一部と、播磨、備前、備中、備後、安藝、周防、長門の八國を縦貫する山陽鐵道沿道と、播磨より但馬に通ずる播但鐵道、及備前より美作に通ずる中國鐵道の沿道に加ふるに、大坂より神戸、尾ノ道、三田尻等の各港を経て、下ノ關までの海路の遊覽と爲す。今は先づ陸上の山陽鐵道沿線より始め、傍ら播

但中國兩鐵道の沿線をも説くべきなり。山陽道の下に畿内の一部なる攝津の極西地方をも説くは、旅程の便を圖るが爲なり。

## (一) 山陽鐵道沿道附近

### 舞子近傍

●須磨 神戸驛より汽車に乗れば四哩餘にして達する須磨は、是れ壽永の昔、源平兩軍の古戰場、安徳帝の行在所たりし内裏路は、停車場の西三三四丁に在り、一ノ谷は、二ノ谷、三ノ谷と連なり、内裏跡の東に隣りす。(口繪寫眞参照)判官義經が一ノ谷の背後を襲ひし鐵拐山は、攝播兩國に境して、鵜越は其の北に續き、熊谷直實が平の敦盛を討ちたる海濱は晩潮徐ろに去來して、御座船指して漕ぎ出でたりし畫眉淫齒の若武者を、今も目のあたり想起せしめ、其の敦盛塔は、停車場の西十四丁、三ノ谷より西一丁なる國道の右側に在り。五輪の石塔、高さ一丈一尺、東より來る遊覽者は、先づ中納言行平が謫居中に、村長の二女に感戀を通じたりと云ふ松風村雨の二女の墓を訪ひ、更に須磨寺に衰して敦盛が携へたりといふ、青葉の笛などの寶物を一覽し、然る後一ノ谷、

教盛塔などを眺め、海月館、松の家、教盛樓などの旅館兼刺烹店に就きて小憩し、千古  
 變らざる山光水色を眺めながら、何時とは無く攝播二國の境を越れば、教盛塔よりは僅  
 に五町にして鹽屋驛に達し、既に播摩國明石郡垂水村に屬す。ビーチハウスホテル、春  
 廼家、望梅樓など、旅館と料理店を兼ね、遊覧客の來り投ずるを待つ。更に西一里餘に  
 して垂水驛あり。官幣中社海神社  
 は、底津綿津見神、中津綿津見神、  
 表津綿津見神の三神社を祭り、播  
 摩の一ノ宮と云ふ。此邊一帶の風  
 光、幽艶明眉飽くを知らず、道路  
 平坦にして山に沿ひ、海に瀕し、  
 最も散歩に適す。更に半里許を西  
 濱に連なり、砂白く、松青く、海内屈指の勝區なり。停車場は、公園の中に置かれ、松  
 林の北、丘陵の上、高く有栖川宮殿下の御別邸を仰ぎ望む。陛下御西巡の日には、數しば  
 躍を駐め給ひし所なり。春の晨に松露を拾ひ、秋の夕に明月を賞するは更なり、納涼、



舞子公園 北に丘陵を負ひ、  
 南は淡路島と對し、老松鬱然林を  
 爲して、松は盡く姿態を異にし、  
 舞ふもの、踊るもの、仙客の臥する  
 が如きもの、壯夫の奔るに似たる  
 もの、樹々其の趣を具へて長く海

避暑、四時の遊客絶へず。旅館には、龜屋、萬龜樓、海老屋、松菊樓等あり。宿料は並  
 等一圓、上等一圓五十錢、晝食五十錢許にて、舞子焼陶器、松露糖の菓子を名産とす。  
 (口繪寫眞參照)此所よりまた西に向ひ、山を北にして海岸に沿ひ、呼べば應へんとする  
 淡路島を眺めつゝ、一幅畫圖の如き中を行くこと一里にして明石に達す。  
 明石 舊時松平兵部大夫十萬石の城下にて、舊城の樓櫓は依然として存し、松林蒼  
 翠の内に聳ゆ。城内は公園と爲り、柿本人丸を祀る人丸神社は、其の東方八丁許の丘上  
 にあり、近く海を隔て、淡路島と對す。明石の市街は、戸數三千五百、人口二萬五千、  
 郡役所、區裁判所、警察署等あり、旅館は概ね料理屋を兼業とし、山口、惠美須屋、千  
 秋樓、衝齋館、錦明館、長春樓、近安等あり。宿料は上等七十五錢、中等六十錢、下  
 等五十錢許とす。明石には帆布、陶器、明石玉、等を産し、殊に明石鯛を以て著はる。  
 また章魚の子を鹽漬としたる海藤花、鯛煎餅、人丸山櫻花漬などは、皆な遊客の家づと  
 と爲すに適す。(口繪寫眞參照)明石の西は、大久保驛を経て土山驛または加古川驛まで、  
 著名の勝區なき故、約十哩の間は汽車に乗るを便とす。而して土山に下車すれば  
 播摩名所 巡りとして、別府手枕松、尾上の松、高砂の相生松、石の寶殿、曾根の松

等の勝區は一里許の間に散在す。手枕松は、別府村に在り。土山驛より西南に一里十丁、數百年を経たる老松なり。高砂松は、加古川の南方一里、高砂神社の境内にて、雌雄の老松相擁く、所謂相生の松なり。尾上の松も、また相生の老松にて、加古川の南三十丁加古川町、播磨第一の大河なる加古川は、源を丹波に發し、數多の支流を合せ、加古川町の西に至り、分流して海に注ぐ。市街は戸數六百、人口三千餘、郡役所、警察署、稅務署等の諸官衙あり。旅館には増田屋、汁屋などありて、附近の地方に産する米は、攝津の灘に送りて醸造米の原料に供せらる。

姫路近傍

石の寶殿 加古川驛の西隣、寶殿停車場より西南二十四丁、米田村字鹽市の山腹にある一大石室にて、高さ二丈三尺四方、高さ二丈六尺。自ら社殿の形を爲す。また播州名所の一なり。之より西、阿彌陀、御着の二驛を過れば、早くも姫路城の白壁、高く翠微の間に聳ゆるを認むべし。

秀吉之に主たり。山崎合戦の後、池田輝政に賜はり、徳川氏に至りて酒井氏を封す。五層の城樓は今尚ほ停車場の北に聳へて、其色白く、岡山城の黒さと相對して、鷲城鳥城の稱あり。方今第十師團司令部、及第八旅團、第十及第三十九聯隊の司令部は皆な姫路城内にあり。中國街道の國道は、市の中央を東西に貫通し、北は但馬街道、西北は作州津山を経て米子街道、西北は因幡街道ありて、山陽鐵道は東より西に通じ、同鐵道會社の播但線は、此の地より分岐し、北は但馬の生野を経て新井驛まで、南は飾磨町まで通じ、交通の便は四通八達す。戸數約一萬、人口約三萬三千、裁判所、警察署、監獄署、市役所、飾磨郡役所、小林區署、稅務署等の諸官衙と、播但鐵道會社、電燈會社、米穀取引所、姫路銀行、三八銀行、萬里銀行、播磨紡績會社等を首とし、會社、銀行、學校、病院等數多く、古來明珍火箸、革細工、晒木綿、鍍物、菓子、玉椿、賣藥の龍虎丹などを名物とし、旅館には、西魚町の井上樓、福中町の金吾、紺屋、中二階町の櫻壽院、驛前の菊水樓、城見樓、光源寺前の宇多川、直養町の入江樓、小林など名あり。宿泊料は一圓以下四十錢まで五等に分つ。(日繪寫眞參照)

書寫山圓教寺 姫路の北一里三十二丁飾磨郡會左村書寫山上にある大伽藍にて、西

國二十七番の礼所、康保三年、性空上人の開基にて、天台宗に屬し、四方に古杉老樹茂り、天吼岩、甲岩、如意瀧等の名所あり。奥ノ院には、武藏坊辨慶幼時の學問所と呼ぶ所あり。花山天皇の勅願所にて、三たび行幸し給ひ、後白河法皇、後醍醐天皇も臨幸し給ひし所、境内六萬一千餘坪、登攀の阪路六方に開け、山上には、如意輪寺、定願寺、等の末寺あり。本堂は東西九間、南北七間、本尊は生木六臂の如意輪觀音にして、更に講堂、食堂、常行堂等を過ぎて奥ノ院に到れば、開祖性空上人を本尊とし、眞言堂、乙護堂、若護法、不動堂、和泉式部石塔、法華堂、根本藥師堂、文珠堂等連なり、中國屈指の靈場にて、賽人常に輻輳し、山麓には大黒屋、井筒屋等の旅亭あり。

**飾磨津** 姫路の南方五十町許、海に濱する市街にて、山陽鐵道の播但線は、此所より起り、姫路を経て但馬に至るなり。戸數千五百、人口八千、海岸の船舶繫留所は、水深くして出入に便なるが爲に、但馬地方より鐵道によりて輸送し來る木材、薪炭等は、多く此地より京阪地方に積出すなり。大阪商船會社の汽船は、日々に一回づ、上下ともに寄港す。此地には濱の天神、白河法皇御幸の故蹟と稱する御幸橋あり。海上には家島の群島散在し、春夏の候は、採貝、水浴の客多し。

**播但鐵道線** 姫路より南は飾磨の海岸に通じ、また姫路市の東方を繞りて、北方に但馬街道を市川の流域に沿ふて走り、播但の國境を越へ、生野の鑛山を経て、新井驛まで達す。沿道には著名なる都會なほ、生野のみは南但の一都會にて、戸數二千五百、人口一萬八千餘、山陰山陽連絡の咽喉にて、有名なる生野鑛山には、銅と銀とを産し、旅館には、柴橋、濱屋、塗師屋等あり。新井は、鐵道の終端驛にて、是より北方、和田山、八鹿を経て、但馬第一の都會豊岡町に至り、更に城崎温泉を経て、日本海岸の津居山港まで、一路平坦、人力車を以て即日達すべし。尙ほ委しくは山陰道の章に案内すべし。

**龍野町** 姫路の西北約四里、舊時脇阪淡路守五萬千八百石の城下にて、揖保川は其の東を流れ、戸數一千五百、人口七千餘、古來播州米及醬油の産地として名あり。山陽鐵道の龍野驛より北方一里半を隔つ。揖保郡役所、警察署、區裁判所等のある所、揖保の香魚もまた名産として稱せらる。

**室津** 龍野停車場より南方三里許の一市港なり。東北西の三面は山を負ひ、金崎の岬は西南に突出して、自ら港灣をなし、船舶の碇泊甚だ安全なるより、昔時は、四國、

中國、九州の諸侯、江戸に参勤交代するには、概ね船を此所に繋ぎしも、汽船の繫泊には港域の小なるが爲に、近時は大に衰へて、人口は三分の一に減じたりと聞くも、西播磨の一名所にて、往昔我國にて、最も古くより遊女ありし所といふ。

**赤穂** 元祿の昔、大石良雄以下四十七人の義士を出して、兒童走卒も其の名を知らざるなき赤穂は、播磨の西南端、赤穂郡の海岸にある一市街、淺野氏滅亡の後、維新の後まで、森越中守二萬石の城下にて、四方の城壘は今尚ほ存す。山陽鐵道の那波驛よりは南方約三里、町の華岳寺は淺野氏累氏の菩提所にて、今も四十七士の遺物を藏す。大石良雄の屋敷跡は、舊城内にあり。今は僅に園池を存し、池邊に良雄遺愛の櫻樹あり。地は食鹽の産額多し。那波驛の西隣、有年驛の北方二里に

**白旗故城址** あり。南北朝の頃赤松氏の居城にて、後に足利氏の爲に亡されたる所、本丸、二ノ丸、三ノ丸の故蹟は、今尚ほ荊棘の間に存す。有年驛の西隣なる上郡驛は、方今鳥取街道の要衝に當る。

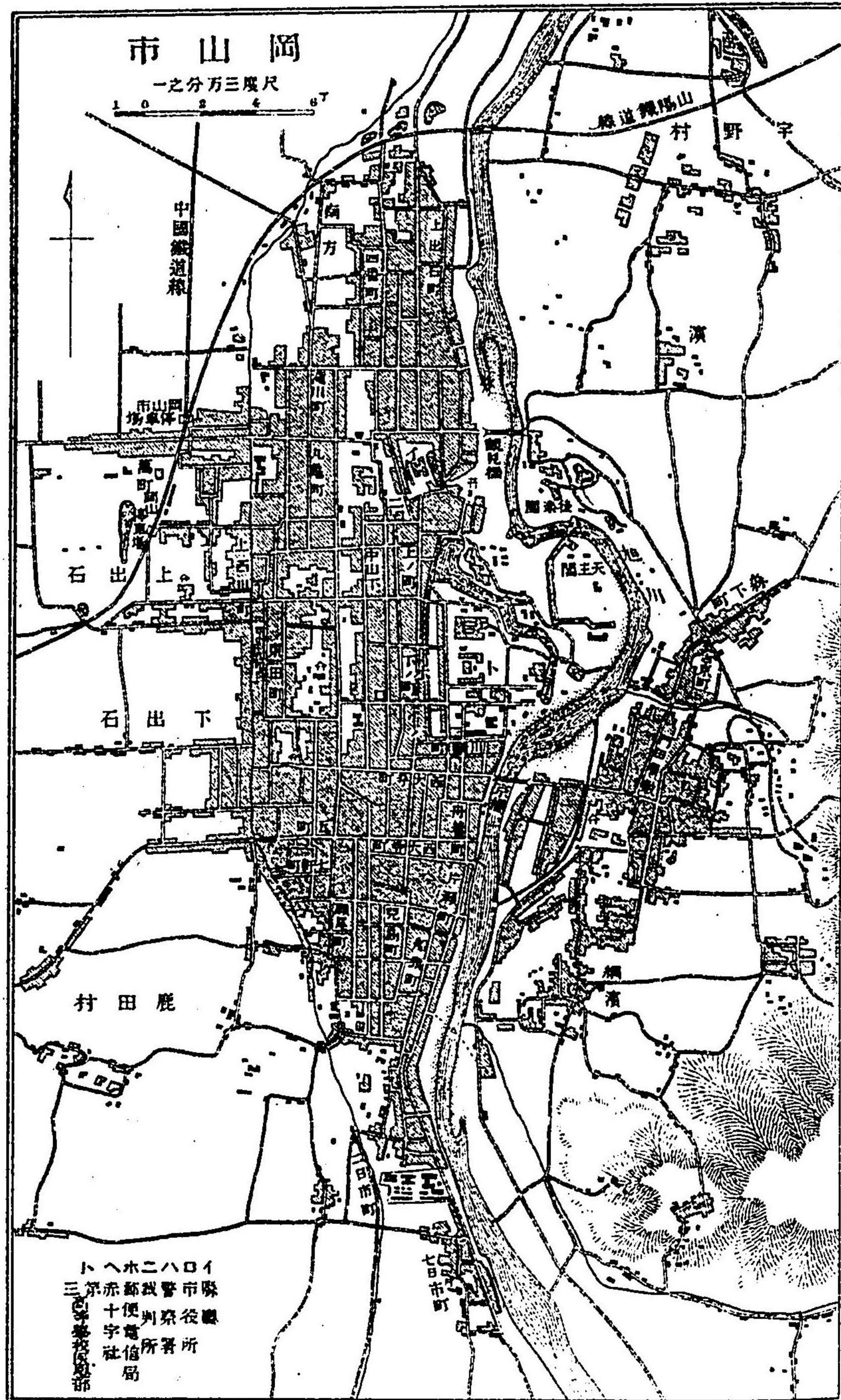
**鳥取街道** 播磨の北隣なる因幡一國は、東南西の三面に山を繞らし、北方は海に面し、四方の交通ともに不便なる中に、鳥取市よりは、南方美作の勝田郡を経て、播磨の

佐用郡に出て、山陽鐵道の上郡驛に出るもの、其の距離二十六里、京阪地方若くは東京の往來に最も便利なる爲に、多くは此の線による。上郡鳥取間、人力車賃二圓五十錢、一日にして達するには三圓二十錢許を普通とす。今上郡よりの經路を説けば、縣道は北方に千種川に沿ひ、白旗山を東に眺めて久崎、佐用、平福の諸村を経て、美作國勝田郡小原村に至れば、備前の東部より因幡に通ずる縣道と合す。是より北方作因兩國の境なる駒返りの峻阪を越へて因幡に入り、千代川の流れに沿ひ、智頭、用ヶ瀬、河原の諸村を経て、鳥取市まで、山陰山陽の二道を南北に、横斷するものなり。沿道の旅館は、上郡の鳥取屋、長治、大門屋、木又、佐用には紙屋、津山屋、平福には竹田屋、玉田屋、小原には竹田屋、高田屋、智頭には榊田屋などあり。宿料は何れも五十錢以下二十五錢許とす。

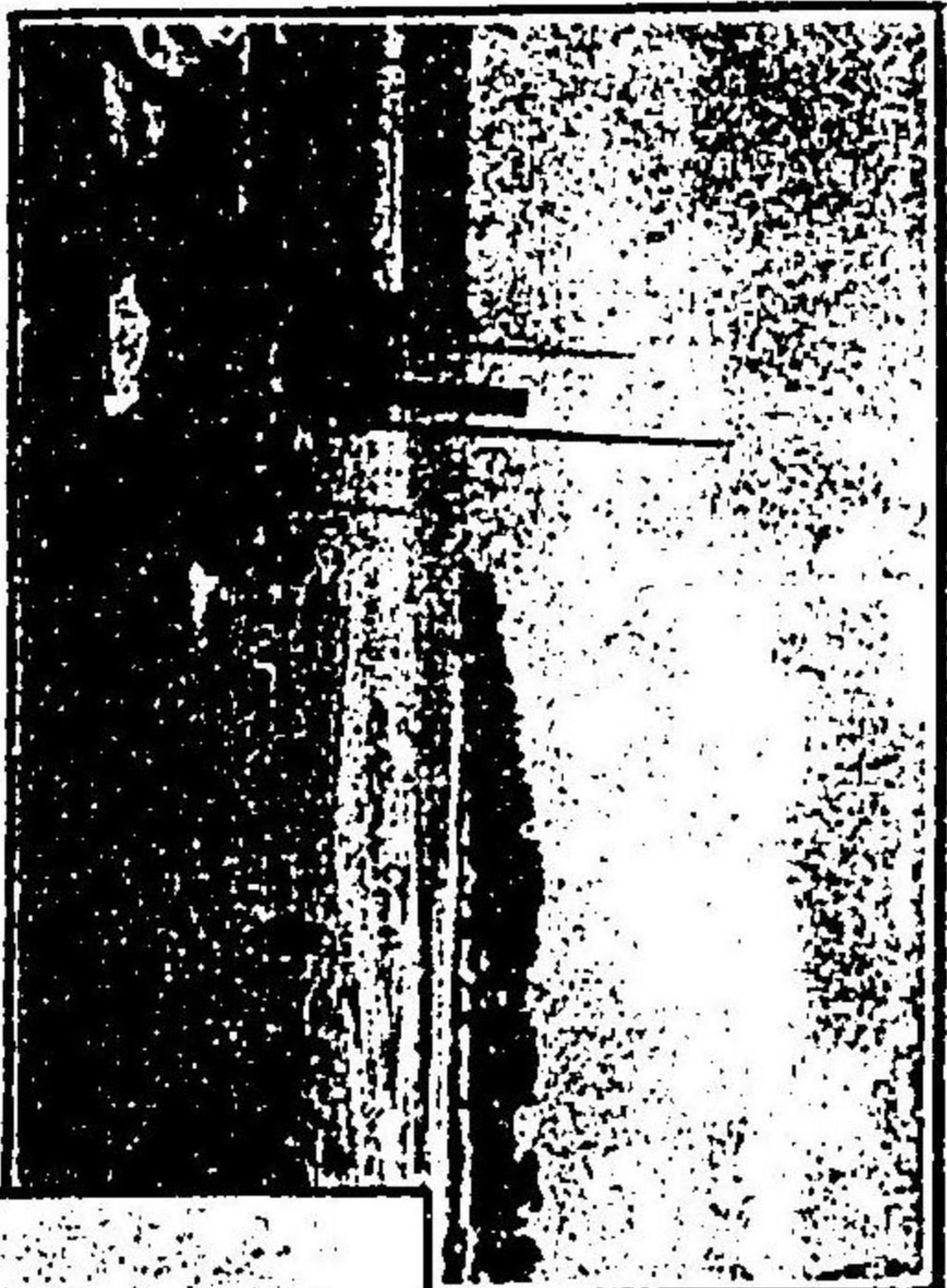
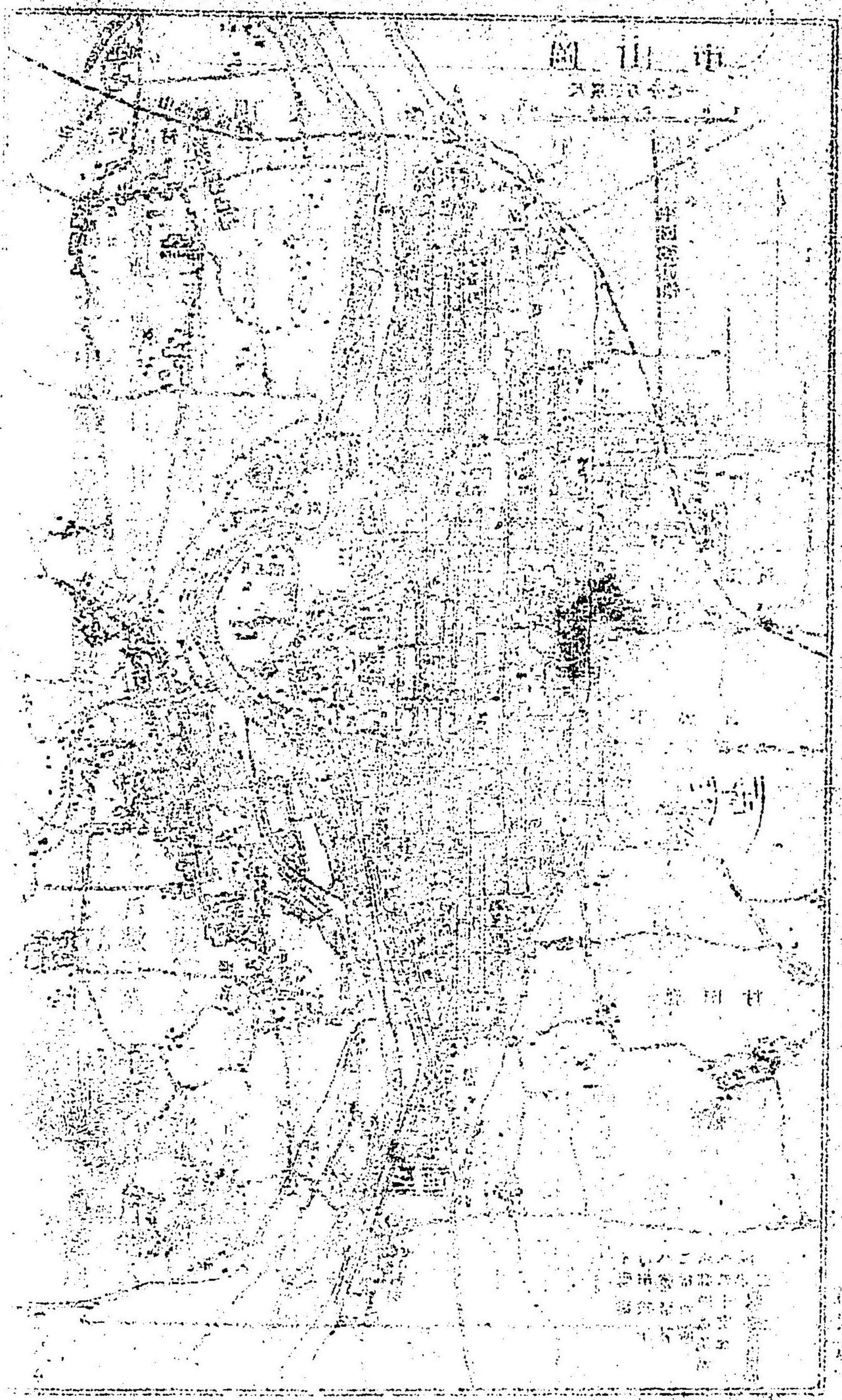
**船阪山** 播磨備前の國境にて、元弘の昔、後醍醐天皇の隠岐へ流され給ふとき、兒島高德が、車駕を奪ひ奉らんと企て、成らざりし所、今は有名なる三石隧道を穿ち、長六十鎖、山陽鐵道全線中第一の大隧道にまで、其の工費に二十四萬圓を費やしたりといふ。

岡山近傍

岡山市 三石隧道を出て、備前に入り、瀛車は三石、吉永、和氣、萬富、瀬戸、長岡、等の諸驛を過ぎて、三備第一の都會岡山市に達す。是れ舊時池田備前守三十二萬石の居城ありし所、姫路城の白さを以て鷲城と呼ぶるゝに對し、黒くして鳥城と呼ぶるゝ岡山城は、市の東北隅旭川の西岸に在り。天主閣は今尙半天に聳へて。舊藩時代の遺跡を留め、上ノ町、中ノ町、下ノ町、巢町、西大寺町、橋本市役所、御野郡役所、税務署、大林區署、監獄署、商業會議所等あり。また電燈會社、備前紡績會社、農工銀行、廿二銀行、精米會社、等あり。戸數二萬一千五百、人口約八萬餘、廣島に次て中國第二の都會、山陽鐵道は、市の東西に貫通し、中國鐵道も、此地



イロハニハ三  
市警署 市役所  
赤十字社 郵便局  
三井物産 銀行



(雲出) 湖遺央傍近市江松

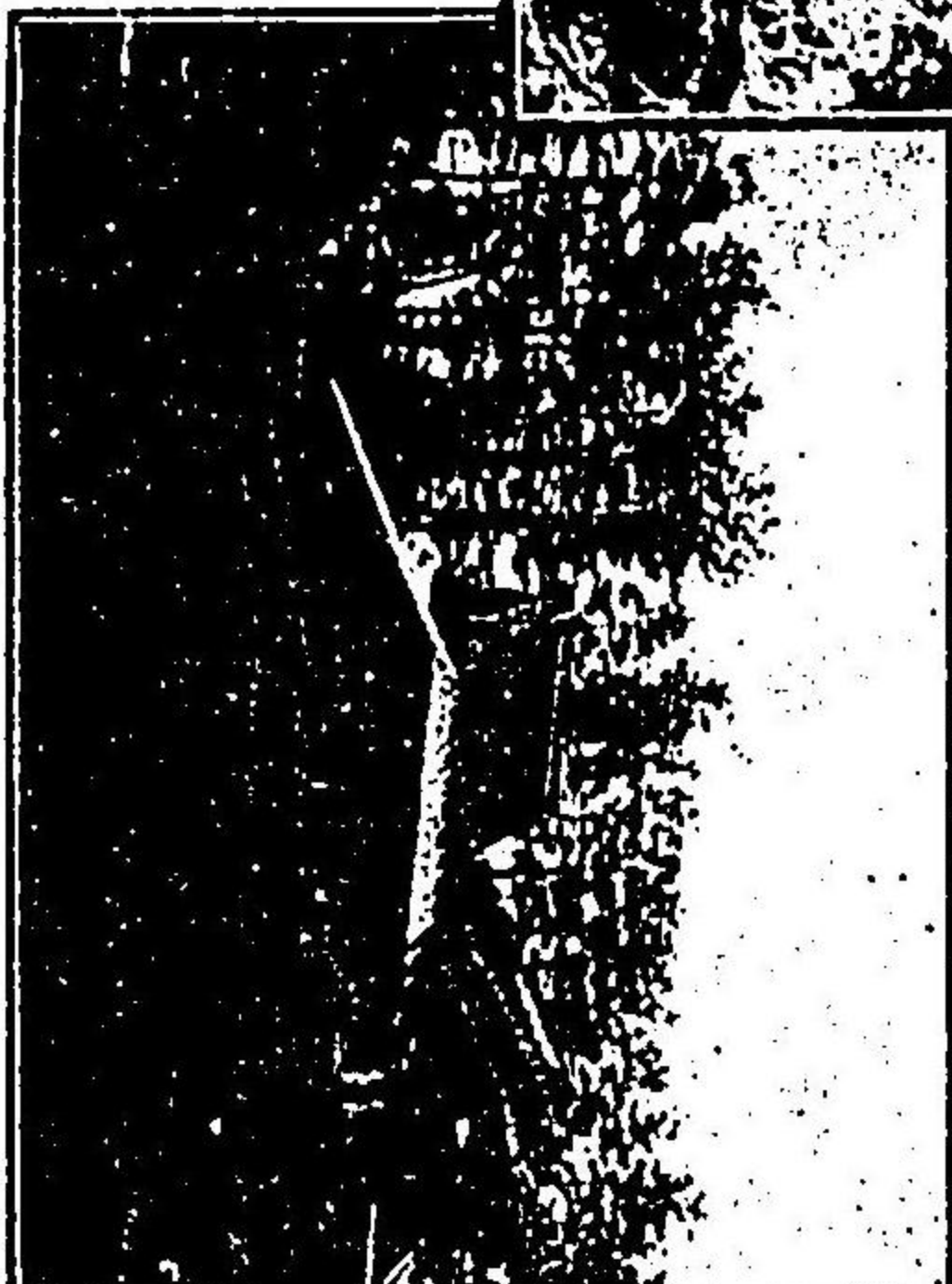


(幡因) 街市取鳥

近附窟少静海見石  
(見石)



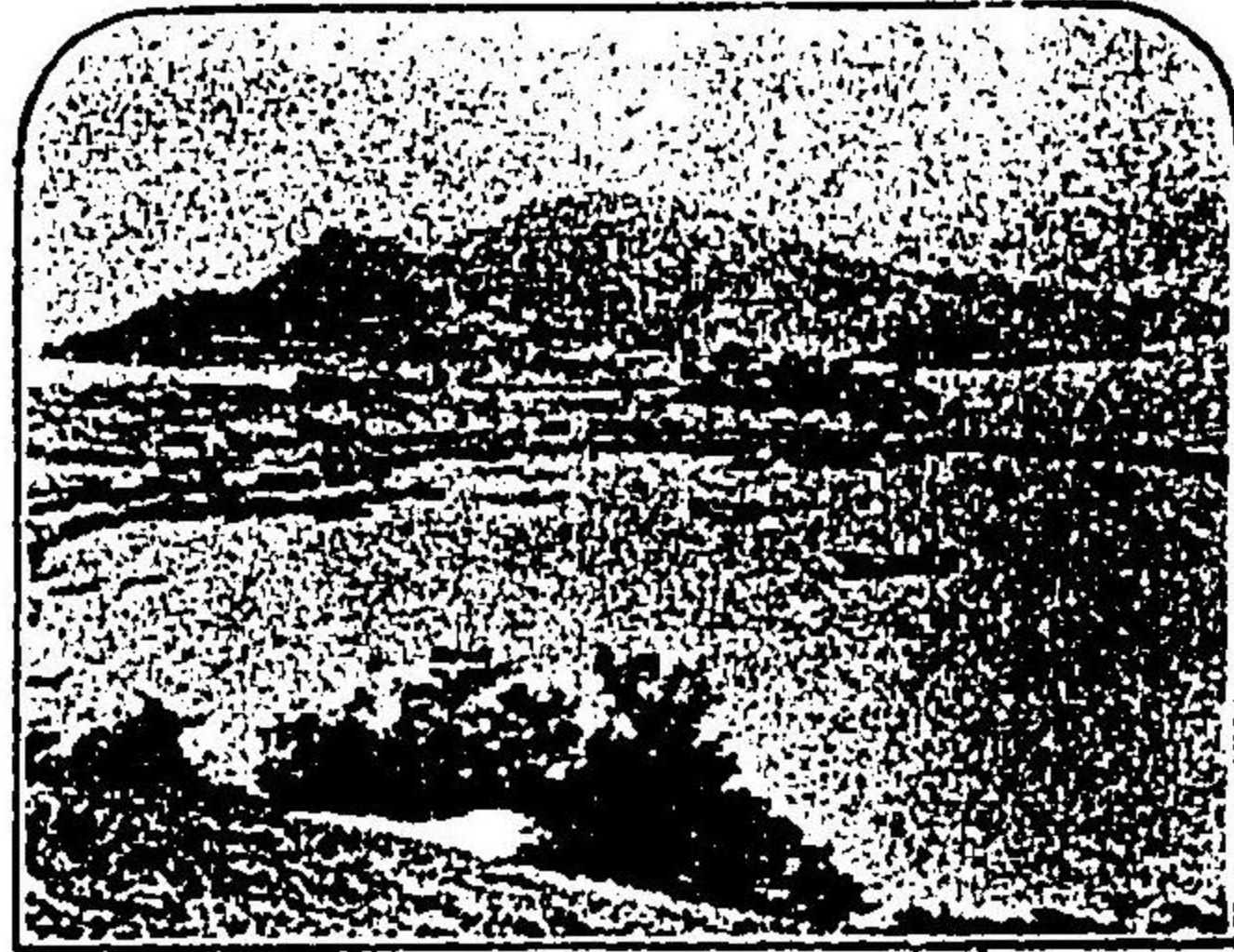
(雲出) 社本社大雲出



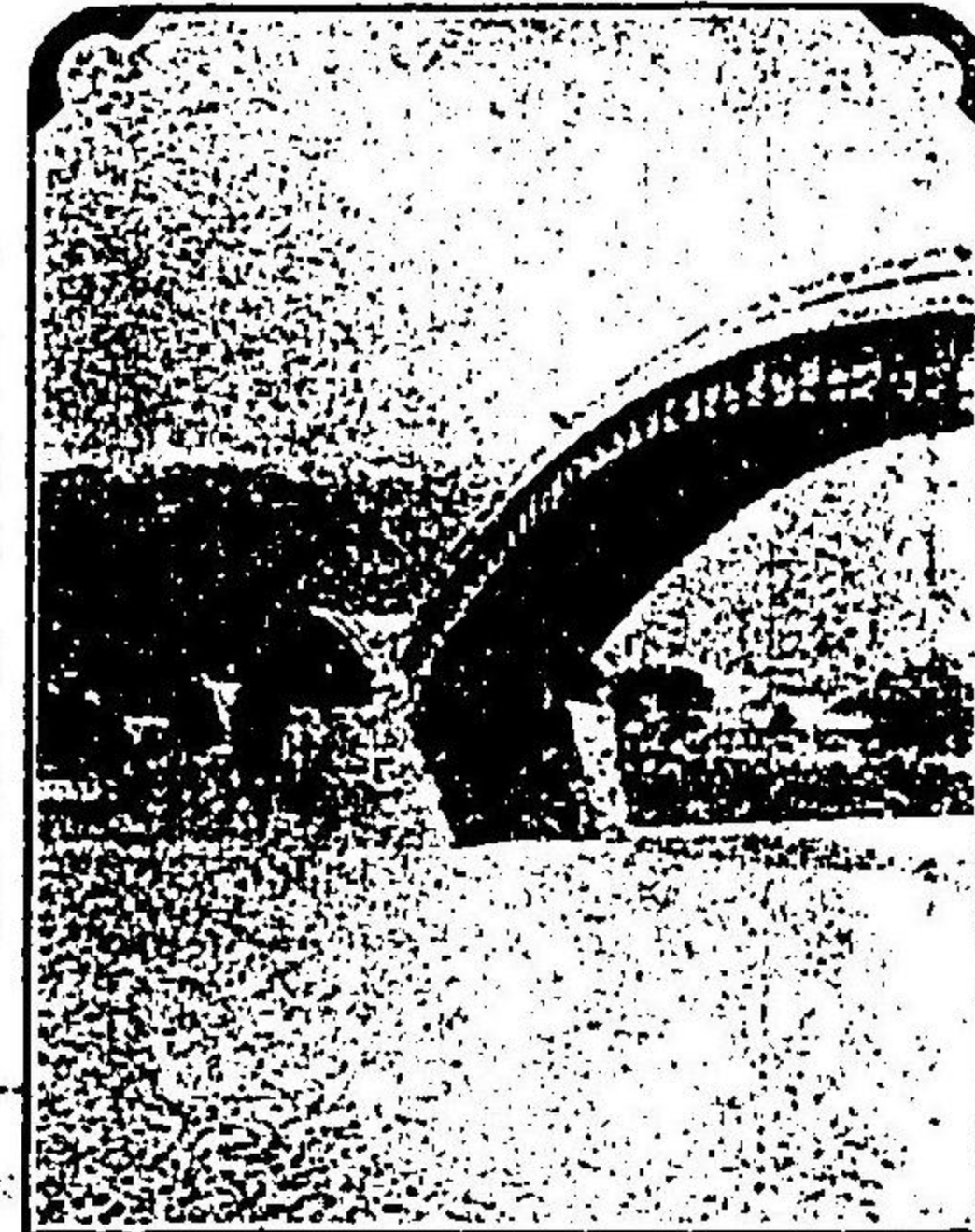
(磐伯) 社神和名



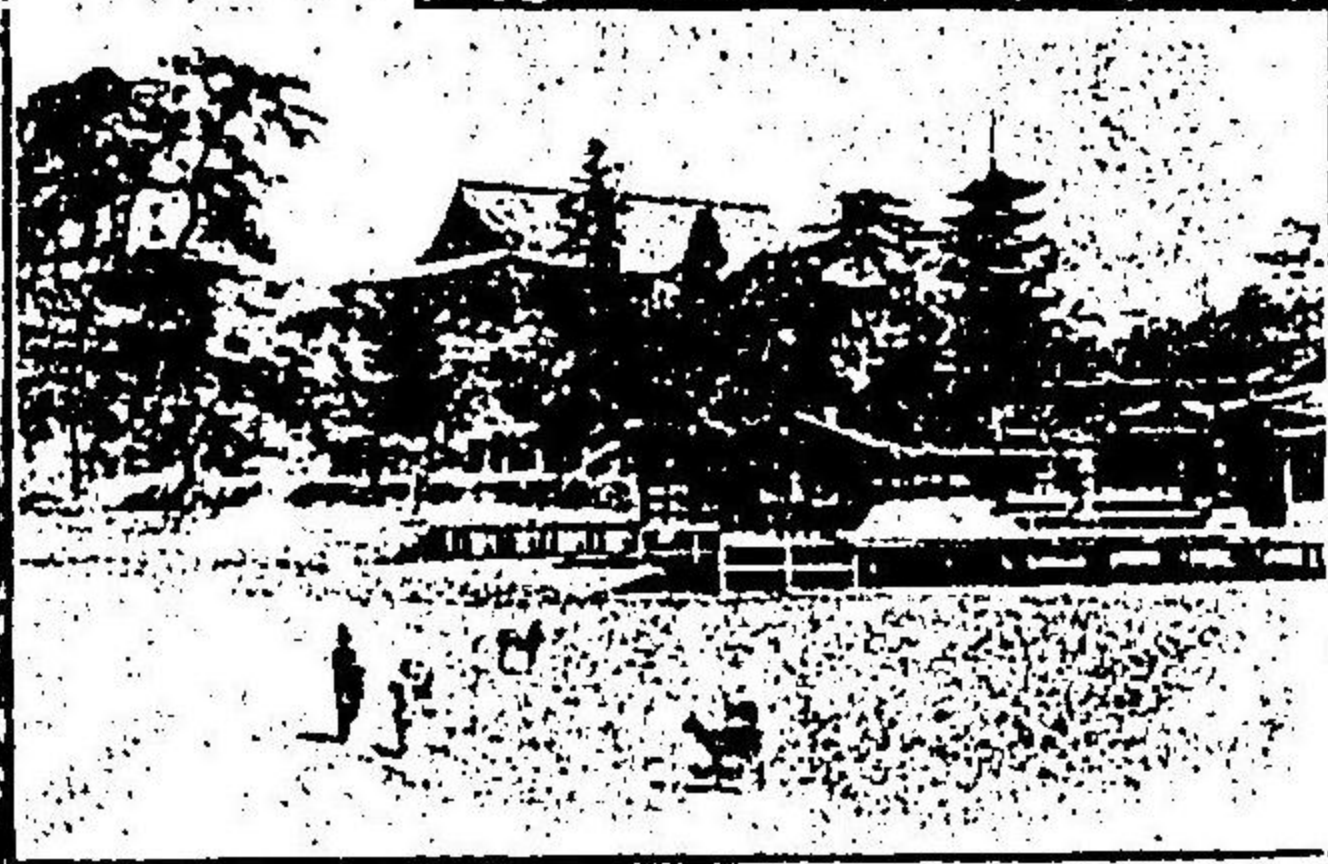
(後備) 津 鞆



岩國錦帯橋(周防)



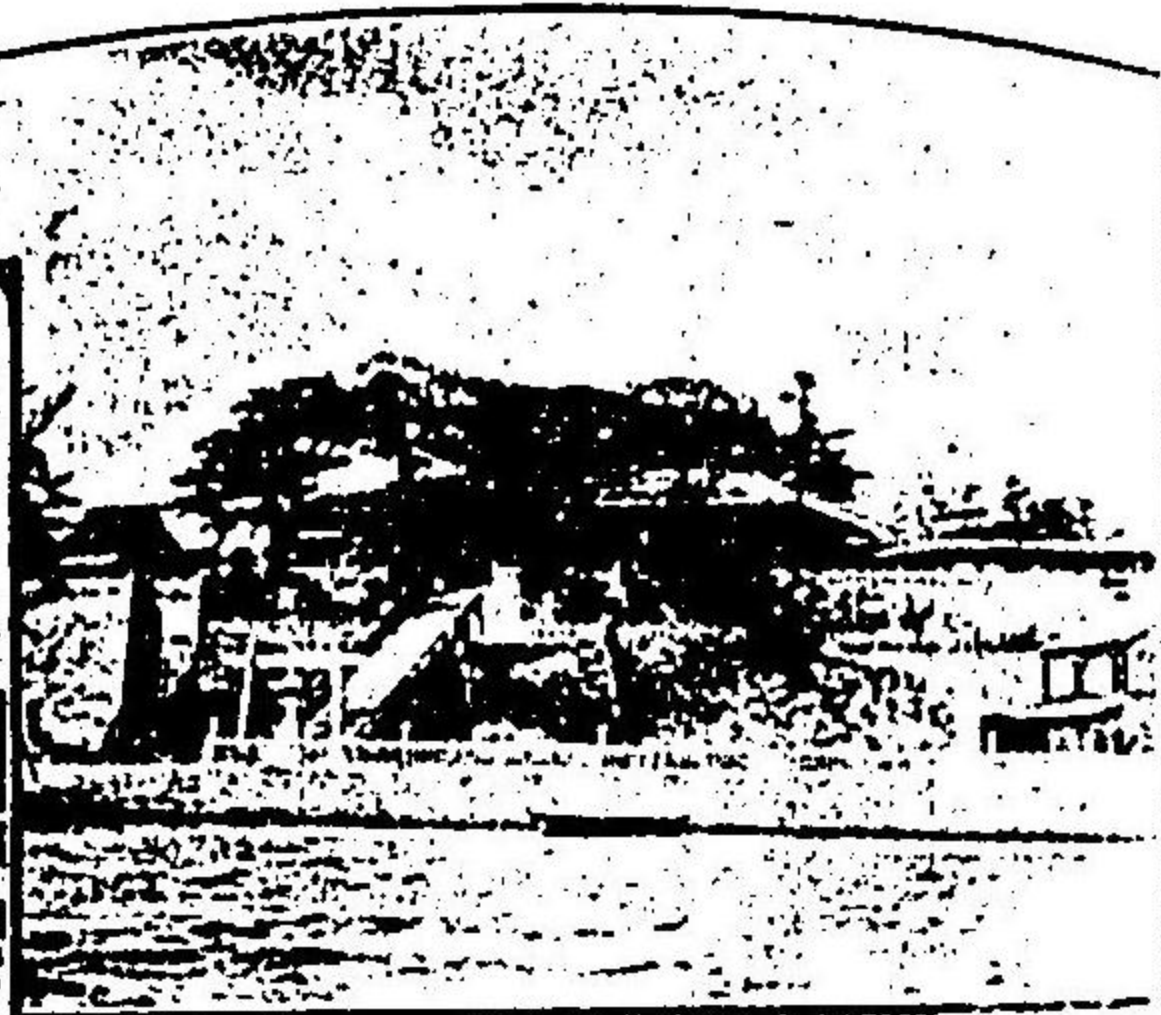
廣島城(安藝)



嚴島(安藝)



(前備) 園樂後山岡

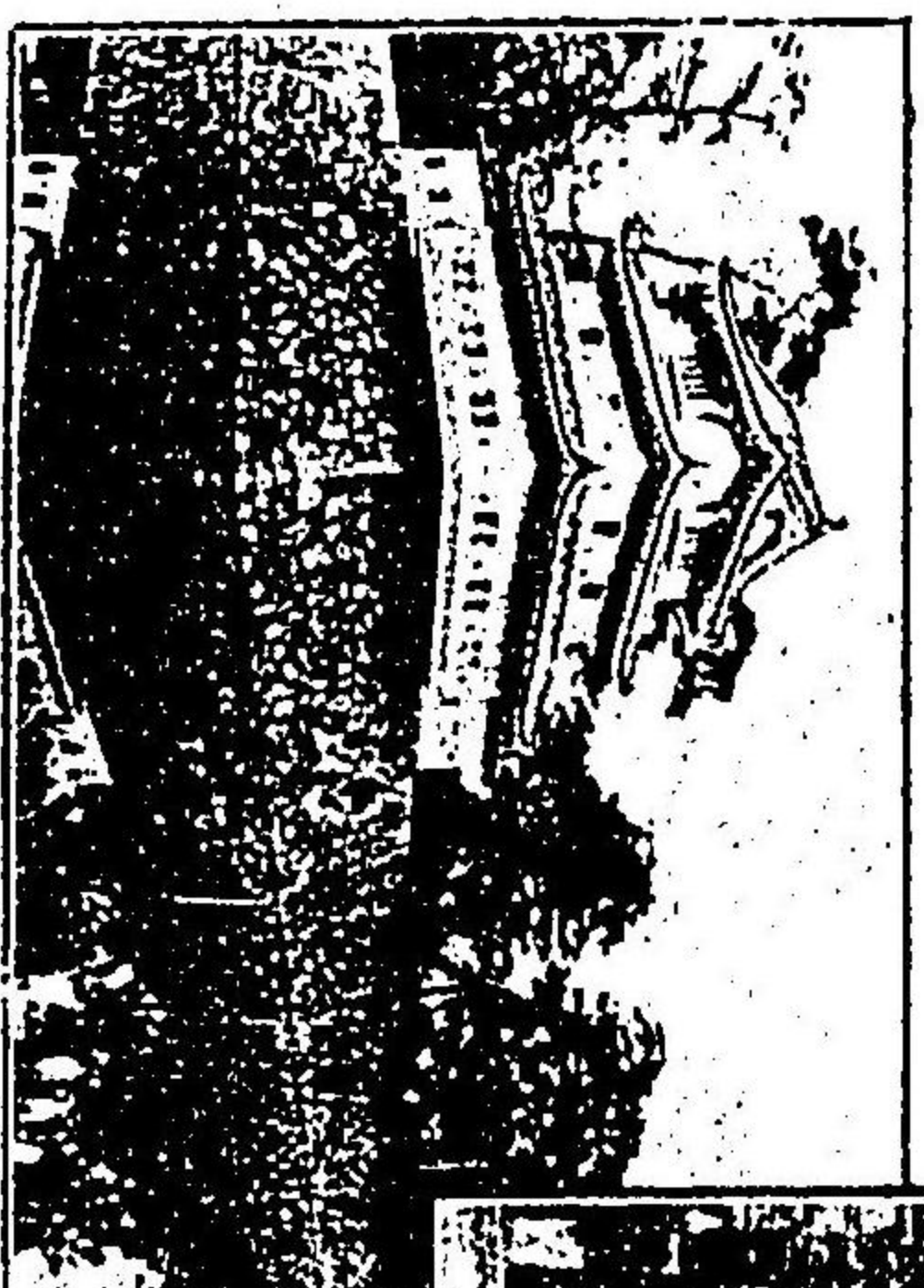


(門長) 社神山龜關馬



(岐説) 石子朝の溪霞寒島豆小

(岐説) 城松高

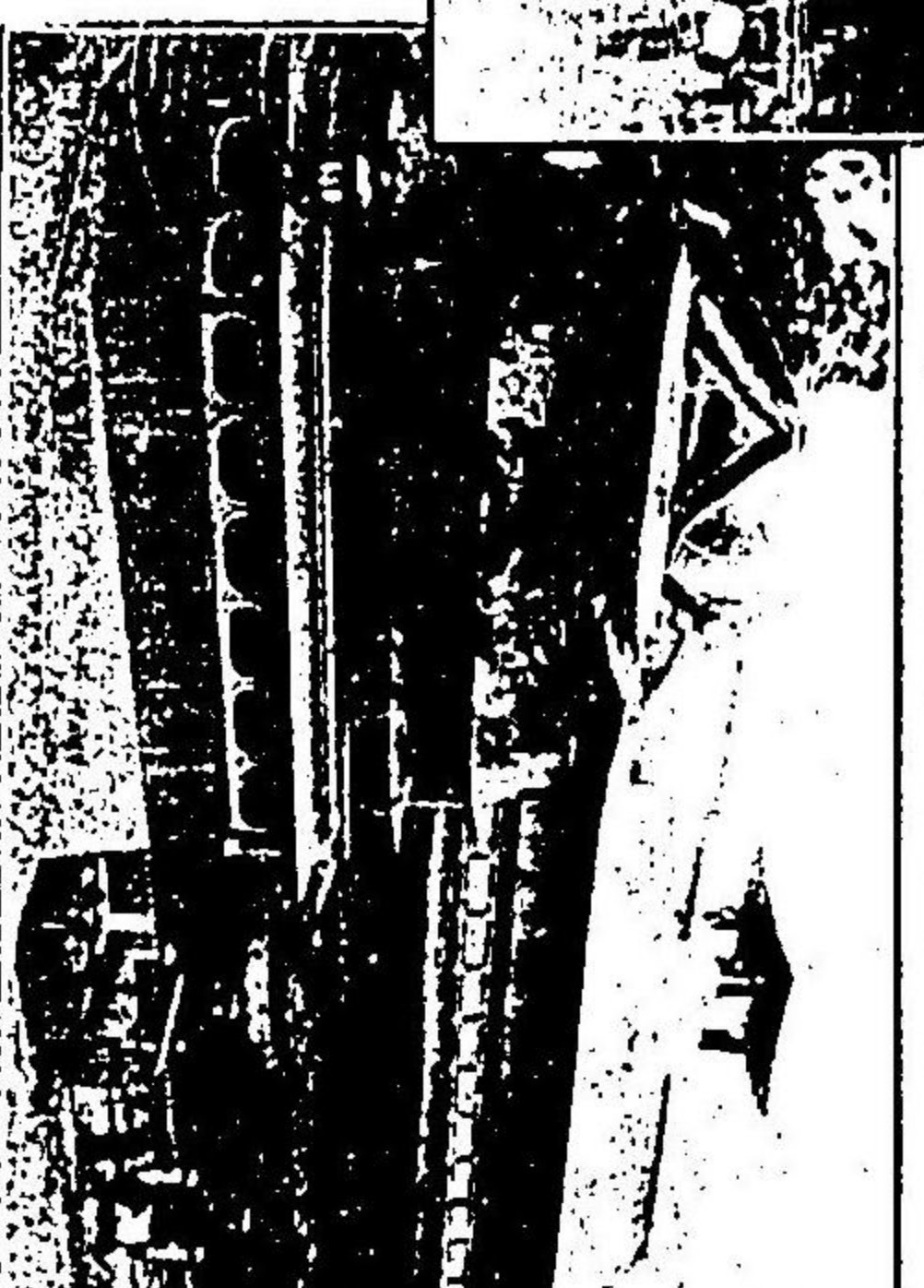


(岐説) 社神平琴



(岐説) 寺通誓

(探伊) 閣鷺振泉温後道



より起りて美作の津山まで通ず。旭川は上流二十餘里の作州勝山町より、此地を経て三  
幡港まで、舟楫を通し、加ふるに山陽鐵道は、また此地より西南方兒島灣の東岸を走り、  
兒島郡半島の最南端なる宇野灣の岸まで、遠からず延長せんとするあり。左なきだに方  
今同鐵道は、岡山停車場より市の中央なる京橋まで人力車、京橋より旭川の海に注ぐ所  
なる三幡港まで小蒸汽船、三幡港より讃岐の高松までは日々に二回快速美麗なる連絡汽  
船を往復せしめ、また高松港より高松停車場まで人力車にて送り、之によりて山陽鐵道  
と讃岐鐵道とを接続する上に、今後山陽鐵道は宇野灣までの十八哩を延長し、之と同時  
に讃岐鐵道も高松港まで延長すべき計畫なる故、其等の實行せらるゝときは、また人力車  
と河汽船とを要せず、宇野高松間は、片道一時間にて達するを得べしと云へば、中國、  
四國間連絡の最捷路となり、將來益ます岡山市の繁昌を加ふべきなり。旅館には上出石  
の三好野花壇、同地の錦園、上之町の自由舎、西大寺町の三好野本店など最も名高く、  
また各料理店を兼ね。其の他に常磐木、高橋屋、水田、有馬館、高塚、山長などの旅館  
と、松の江、石谷、魚嘉、山佐、翠明樓、花月、大黒屋、山啓、今原、藤久、紙安など  
の料理店あり。新聞紙は山陽新報、中國民報の二あり。物産は米穀、紋苳、熊野染、編

笠、などにて、菓子の吉備團子、調布、米のなる木などは、以て家づとに爲すに適す。  
●後樂園 水戸の後樂園、金澤の兼六公園と共に日本の三大公園と稱せらる。舊藩主池田侯の庭園なりしを、明治十七年以降、岡山縣に譲り受けて公園とせるなり。旭川の東岸に在りて、舊城の天守閣は對岸に聳え、川に架する長橋を鶴見橋といふ。園の面積二萬七千坪、泉石の配合、竹樹の位地、巧みに自然の景趣に擬し、池あり、瀧あり、丘陵あり、芝生あり。亭榭其間に設けられ、仙鶴は常に池畔に徜徉し、殊に風致を添ふ。停車場を距ること東に十丁、四時遊客輻輳す。

●閑谷巖

岡山侯池田光政、儒臣熊澤蕃山を聘して子弟を薰陶せしめたる所、岡山より二十哩の東なる吉永停車場の南三十丁にあり。今に至るまで中國第一の私立學校たり。(口繪寫眞参照)

●中國鐵道

岡山より北方に旭川に沿ふて溯り、美作の福渡に至り、川と別れて東北に轉じ、津山町に至る。延長三十四哩七十六鎖の鐵道にて、片道二時十五分を費やし、一日七回づつ往復す。岡山より、因幡の鳥取、伯耆の米子、若くは出雲の松江地方に往復するものは、皆な此の鐵道による。元來津山を経て米子に達する豫定なるも、作伯二

州の國境に横はる四十曲越の高山に遮ぎられて、今は津山を終點と爲すも、津山米子間には、陰陽連絡の人力車ありて、二十五里の間、一日にして達すべし。

中國鐵道附近

●福渡(ふくわた)

美作の南端にて、中國鐵道の一驛、備前と美作とを境する旭川の北岸にあり。東北に因幡街道、西北に伯耆街道の分岐する所、旭川の上流なる勝山、久世、落合等より高瀬舟にて下る旅客は、多く此所に上陸し、汽車に乗換へて岡山に至るを常とし、岡山津山間の最も賑かなる所、人口二千三百、戸數五百餘あり。驛より四丁許に入幡温泉あり。近來浴の客多し。旅館には、吉野屋、豊屋、田舎屋、湯木屋等あり。旭川の香魚、味ひ最も美なり。

●津山町

美作國第一の都會、岡山より中國鐵道通じ、此所より出雲街道の國道は、西北に伯耆の米子に通じ、東北に因幡街道、東南に姫路街道は、ともに縣道通じ、吉井川は、北西より流れ、町の南端を過ぎ、南に流れて備前の兒島灣に注ぐ。流域二十餘里の間、古來高瀬舟を通じ、鐵道開通前は、運輸を助くること多かりき。町は元と松平參河

守十萬石の城下にて、舊城址は鶴山の上に在り。墨壁依然として存し、今は鶴山公園と稱し、登臨すれば全市街を一目の下に下瞰し、西南は老松林を爲し、北方の山麓は、竹林濠を蔽ひ、東は懸崖高く峙ち、宮川其下を流れ、天守閣、本丸、二ノ丸等の位置、明かに存す。別に津山公園は、市街の東北五町許の平地に在りて、中央に池あり、樹石亭樹其の周圍に排置せられ、規模大ならずと雖も近く鶴山公園と相對し、幽邃閑雅甚だ愛すべし。津山町には、區裁判所、稅務署、岡山縣高等女學校、美作銀行、津山銀行、其他一二の製絲會社あり。物産は、木材、荒銅、木炭、紙、繭、生絲、及び足袋と菓子、初雪などあり。旅館は多く料理店を兼ね、武藏野、對鶴樓、曙樓、長久樓、大津樓、千切屋、洗心館、山長支店などあり。

院庄 元弘の昔、兒島高德、後醍醐帝の隱岐に遷幸し給ふとき、行在所の庭に忍び、櫻樹を削りて「天眞空勾踐、時非無范蠡」の十字を書したる美作國院ノ庄は、津山町より西北一里許にして、伯耆街道の東北方五丁許の地に在り。今は當時の行在の跡に社殿を建て、作樂神社と崇め、後醍醐天皇と贈正四位兒島高德の靈とを祭り、有栖川熾仁親王殿下の揮毫にて天皇當時の御製なる

あはれとはなれも見るらむ我民を思ふ心は今もかはらす  
よそにのみ思ひそやりしおもひきや民の籠をかくて見むとは  
の二首を刻したる石碑を建つ。高德の事蹟を詠みたる古今の詩歌數ふるに堪へず、中にも八田知紀の

櫻木にうつせはかりのこの葉もやまと心の花にそありける  
など最も人口に膾炙せらる。(口繪寫眞參照)

勝山町 津山以北米子に至る沿道は、院庄を経て、宮尾(一里三十丁)坪井(三里十五丁)久世(六里十五丁)の諸村を過ぎ、七里二十九丁にして勝山町に至る。久世、勝山ともに旭川の流に臨み、岡山まで水路二十四里、高瀬舟に棹して下るを得べし。勝山は、舊時三浦玄蕃頭二萬三千石の城下にて、戸數約四百八十、人口約三千三百餘、津山米子間二十五里中に於ては第一の都會なり。旅館は岸屋、三島屋、今出屋などあり。家は旭川の岸に建てられ、樓上の欄に凭れば、清流下を走りて水底の石一々數ふべく、川に漁する香魚は、肥るときは一尺餘に及び、味最も美なり。

勝山米子間 勝山より、美甘(四里)新庄(また二里)を経て、四十曲の險路に入り、

絶頂の國境に標榜して、鳥取縣鳥取市四町元標まで三十四里十一丁四十間、岡山縣岡山  
市橋本元標まで二十五里二十丁二十六間と書す。此邊冬時は積雪多く、時としては地上  
一丈に達すと。而して新庄より山を越へて伯耆の板井原驛まで二里廿丁の間、人力車の  
輻に綱を付け、馬をして曳かしむ。一種の人馬折衷車なり。板井原より二里にして根  
雨、また二里にして江尾、また二里八丁にして溝口、更に二里二十丁にして伯耆第一の  
都會米子町に達すべく、根雨以西は、道すがら出雲富士と稱せらる、大山の奇勝を賞す  
るを得べし。委しくは山陰道の章に説くべし。

倉敷玉島近傍

今は再び岡山に戻りて、山陽の國道を西に案内すべし。而して岡山より一里餘にして  
備中に入れば、國の東端なる庭瀬村は、賀陽郡内第一の大村にて、一市街を爲し、警察  
署、區裁判所出張所などある所、山陽鐵道停車場あり。驛の北二里吉備郡高松村に、天  
正十年五月羽柴秀吉が高松城を圍みたる水攻の古戰場あり。また元暦元年佐々木三郎盛  
綱が、源氏の軍の先鋒と爲り、士民を案内者として淺瀬を知り、海を渡りて平行盛の軍

を兒島に破りたる藤戸の渡津は、庭瀬驛の西南三里、兒島郡藤戸村にあり。更に西すれ  
ば

倉敷町 には達す。備中にては、高梁、玉島とも、並び稱せらる、小都會にて、  
戸敷一千八百餘、人口八千餘あり。都窪郡役所、警察署、稅務署等のある所、東雲樓、  
池田屋、新米樓、芳和樓、備前屋等の旅館あり。また町に公園あり、町の中央の一小丘  
にて、老樹鬱蒼として茂り、頂に登れば、倉敷全町を下瞰すべし。更に西方に進んで高  
梁川を渡れば

玉島港 は、玉島灣深く陸内に入り、市街は灣の西岸に在り。此邊の海岸を琴の浦  
と稱し、巨巖重疊して海波來り撃ち、碎けて白玉を散ずるの景は、壯快頗る喜ぶべし。  
港の南方二里半の海上に水島あり、壽永二年平知盛、教盛等、源氏の軍を邀へ打て之を  
破りし古戰場、現今は大阪の住友氏に屬する銅精練所あり。玉島には淺口郡役所、區裁  
判所、警察署、三品取引所、吉備紡績會社、玉島銀行、其他數多の銀行會社あり。戸敷  
二千五百、人口一萬五千、穀類、綿、繭、紡績絲、花菴等の物産多く、此地より讃岐の  
多度津まで、日々二回、同國丸絶へも日々二回、往復する汽船の便あり。何れも二時間

許の航海に過ぎず。故に交通繁く、商業盛んに、貨物の集散するもの多し。旅館には、森脇、玉島ホテル、山中屋、兒島屋あり。宿料は普通五十錢内外、上等一圓許と爲す。鐵道停車場は市街の北一里許なり。

高梁町

玉島港より北方に備中を買きて伯耆の米子に通ずる縣道の要衝に當り、玉島より九里、高梁川の東岸にありて、高梁より玉島附近の海口まで、高瀬舟を上下し、

百貨の運送に便す。此地は元と板倉周防守五萬石の城下にて、備中第一の都會、舊時松山と稱し、方今上房郡役所、警察署、稅務署等の在る所、舊城址は町の北方臥牛山に在り、尙ほ外壁を存す。岡山市まで十一里二十七町を隔つ、近來中國鐵道を岡山より此所

まで延長せんと欲し、既に此所より四里の湛井まで開通す。其全通するも近きにあり。笠岡町 玉島より、濱街道を西に行き、鴨方驛を過ぎて笠岡町に達す。此地は小田

郡役所、區裁判所、稅務署、警察署等の在る所、また紡績會社、製絲會社、織物會社など多く、海に瀕して舟楫の便に富み、縣道は市街を東西に貫ぬき、鐵道は海港に近く、讃岐の多度津とは、海路十里を隔つるのみ。其間汽船は日々一回づゝ往來す。戸數二千二百、人口一萬餘、穀物、蒟蒻玉、紡績絲、などの物産多く、藤酒家、三快樓、醉月樓な

どの旅館ありて、備中西南部の一都會なり。笠岡以西、幾ばくもなく國境を越へて備後に入れば、岡山縣を離れて廣島縣に屬す。

尾ノ道近傍

福山町

此地元と阿部伊勢守十一萬石の城下にて、維新の前、外交始めて開けたる

とき、幕府老中の首席たりし阿部正弘は、此地の藩主なり。城は元と久松城と稱し、元和年間、水野日向守勝成の築く所、今も天守閣と二三の建物を存し、近く停車場の前に在り。方今此地に深安郡役所、區裁判所、警察署、中學校、福山銀行等あり。四千の戸數、一萬五千の人口、木綿、疊表、花菱等を産し、松村、粟定、酒利、坂田屋、吉野等の旅館あり。南方三里半を隔て、鞆ノ津あり。

鞆ノ津

福山の西南に斗出して半島形を爲す沼隈郡の東南端にある海港にて、古來帆

船時代には、帆檣常に林立し、播摩の室津に並びて、中國有數の要津たりしも、汽船の出入には規模の小なるが爲に、また舊日の盛を見ず。二千五百の戸數、九千五百の人口、瀬戸内海通ひの汽船は、日々に上下とも寄港するも、陸上の交通十分ならず、故に漸や

く衰頹の觀あるを免かれず。然れども此所より海上十丁許なる仙醉島の風景は、古今渝ること無く、遊賞の客をして稱贊を禁ぜざらしむ。(口繪寫眞參照)

尾道市 是れ備後國御調郡の東南、海濱に沿へる一大市街、岡山廣島兩大市間に於て第一の繁昌地、往昔は玉の浦と稱し、大寶、愛宕の二山は北方の背後に峙ち、向島は前に横はりて、海は恰かも河流の形を爲し、市街は其の北岸に連なり、山陽鐵道は、市街に沿ふて東西に走る。山には千光寺の巨刹、海に臨みて立ち、海には船舶輻輳して、帆檣常に林立す。戸數約五千七百、人口約二萬二千、市役所、況や食鹽、花筵、壘表等の特産物多く、瀬戸内海を往來する中國航路の汽船は、概ね此地に寄港し、また此地を起點として四國通ひの汽船も多く、讃岐の多度津へは四時間にて達し、山陽鐵道會社は、此地と多度津との間に特別の連絡汽船を備へ、鐵道乗客にし



て四國へ渡るものは、其の連絡船にて輸送し、一日二回づゝ往復す。また大阪住友氏の所有船にて、毎日此地より伊豫の新居濱へ往復するあり。また尾道汽船會社の汽船は、日々に伊豫の今治、美津濱、長濱、豊後の守江、日出、別府、大分、佐賀關、八幡濱、吉田を経て伊豫の宇和島に往復す。また此地より陸上は、中國街道の東西に通ずる外に、出雲街道は、北方に通じ、備後の三次を経て、出雲の西南端なる飯石郡に入り、赤名、頓原、掛合、三刀屋等の諸驛を過ぎ、宍道湖畔の宍道に通ずる縣道あり。宍道より松江市までは國道通ず。斯くして尾ノ道、松江、兩市を連絡し、其間殆ど四十里、山陽山陰の二道を連絡す。唯だ途中に山路多く、交通の容易ならざるを憾とするなり。尾道市の旅館には、濱吉樓、鶴水館、今井樓等名高し。宿料は五十錢乃至一圓以内。  
千光寺 尾道市宇土堂町大寶山の半腹に在り。古義真言宗の巨刹、千百餘年前の創立にて、本堂には千手觀音を安置し、境内は尾の道全市を下瞰し、近く向島と相對して遙に伊豫讃岐の翠巒を烟波漂渺の間に望む。風光頗る愛すべし。  
三次町 備後雙三郡と安藝の高田郡と境を接する所、三次川の流れを以て國境を劃し、三次町は川の東岸にあり。南方尾道まで二十一里、西方廣島まで十七里入り、北方



松江まで二十餘里、東方米子まで三十餘里、縣道は四方に通じ、また吉田川は西北に流れ、石見に入りて江川と爲り、山陰道第一の長江を爲し、那智郡江津に至り日本海に注ぎ、三次より江津まで、流域二十餘里、舟楫を通ずべし。故に三次は、山間の一市街ながら、東西往來の中樞に位し、古來幕府直領にて、多くの人物を輩出し、今も雙三郡役所の在る所、山間には奇らしく商業販の地なり。戸數約一千五百、人口約五千五百、尾ノ道より三次まで、人力車賃二圓内外と云ふ。土地高峻にして、烟霧深く鎖し、數しば咫尺を辨ぜざることあり。晴曉高きに登りて四方を望めば、雲霧朦朧の中、處々の高山其の頭角を見はし、恰かも海中に群島を望むが如し。里人之を霧の海と稱し、奇景を以て他郷の人に誇る。

今は轉じて再び尾ノ道の西方、山陽鐵道に沿ふて下れば

糸崎港 は、海岸の小村落なるも、其地陸岸に圍まれて深く海灣を爲し、今は開港場と爲りて、糸崎海務局、神戸税關糸崎支署を置かれ、また因島船渠株式會社、糸崎通船會社など起り、風月樓、丸和、東洋樓等の旅館あるに至れり。然れども尾ノ道の開港場と爲らずして、此地の開港場と爲れるは、世に運動なるもの、勢力大にして、人力の

數しば天然力に勝つ實例として引證せらるゝ所なり。

三原 此地は備後の西南端なる海濱の一都會にて、天正五年小早川隆景の城を築いて居りし所、後年廣島藩主淺野氏の家老淺野右近之に居り、維新以後、同城址は破壊せられて、今は民有地たり。市街は山陽道の國道に沿ひ、此地より西は、安藝に入りて、廣島まで道路二線と爲り、南方の國道は海岸に沿ひ、忠海、竹原、三津、内海、吳、海田市の各市街を経て、廣島に通じ、北方の縣道は三原より本郷、田萬里、西條を經、海田市に至りて海岸線と合し、廣島に通ず。山陽鐵道は、多く北方の道路に沿ふ。また三原より山陰道に通ずる縣道あり、尾道と同じく、同國三次を經て出雲の松江へ三十六里、伯耆の米子へ三十八里といふ。町の戸數二千、人口約一萬、旅館には五雲樓、綾平、風月樓、金丸などあり。米穀、食鹽、烟草、疊表、酒、醬油等を産す。停車場の西北十八丁に西野村梅林あり。往昔昔公筑紫へ貶せられて下るとき、手づから植ゑし梅と言ひ傳ふ。また停車場の西南一里、田野村字壬生に、延喜の頃有名なりし歌人壬生忠岑の墓あり。

吳市附近

備後の三原を去て西方安藝に入れば、三原より海田市まで、鐵道の沿道には特に記すべき所なし。海岸線には、忠海、竹原、三津、内海、吳、海田市の各地、大小の市街海岸に連なり、海上には島嶼密布して中國瀬戸内海中最も好風景を以て稱せらるゝ所なるも、別に内海航路の案内の下に詳説すべければ今は略し、鐵道によりて直ちに海田市に至り、先づ官設吳鐵道と吳港とに就て説くべし。

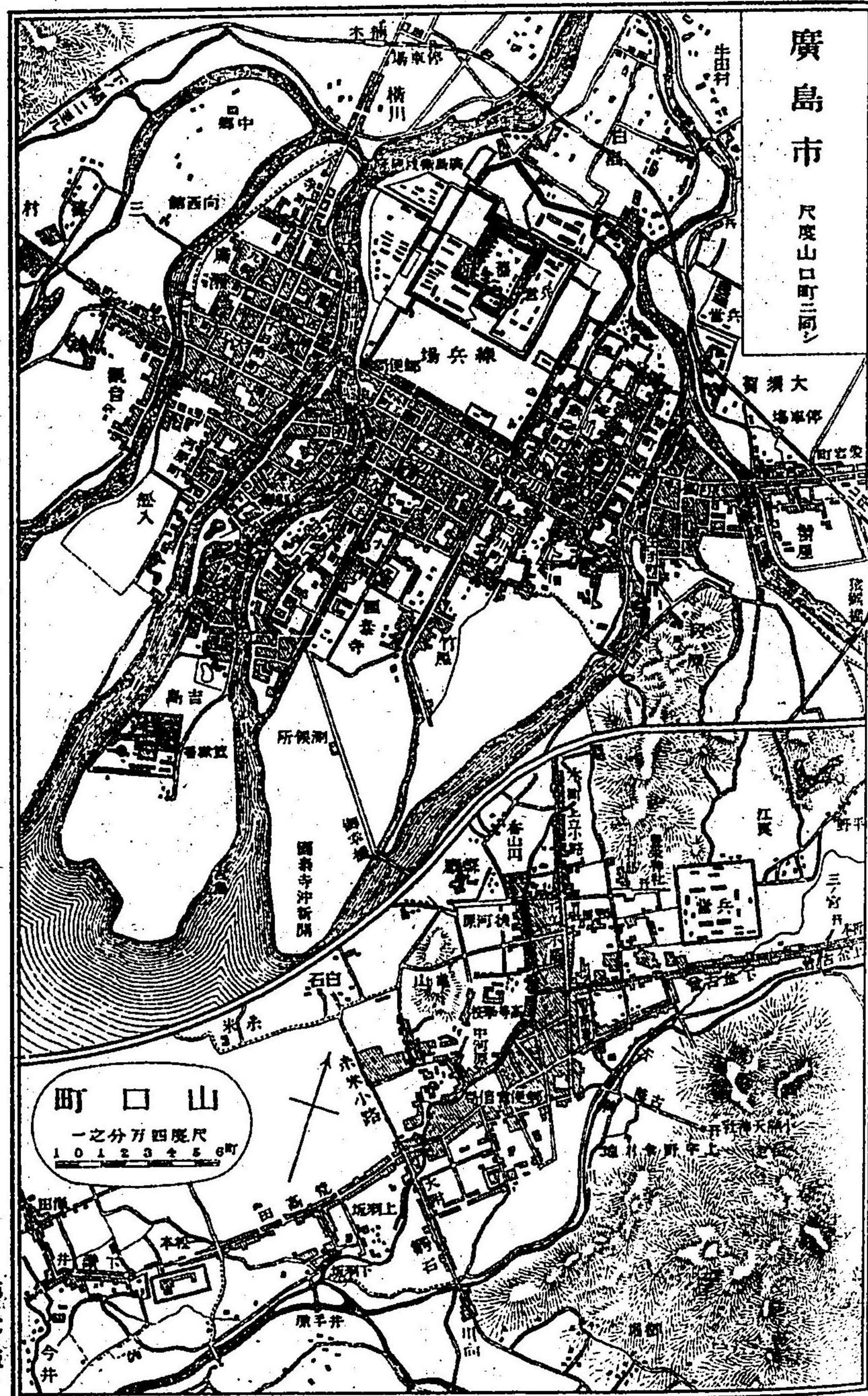
吳鐵道 此の鐵道は廣島の第五師團と吳の軍港とを連絡する爲に、特に山陽鐵道の海田市より吳市まで官設を以て敷設せられ、海田市吳間十二哩四鎖は明治三十六年十二月二十七日より開通し、沿線には、海田市、矢野、坂、天應、吉浦の諸驛を経て吳に達し、一日九回往復す。從來宇品港と吳との間は日々五六回汽船往來して、以て廣島市と吳市とを連絡したりしも、今は此鐵道によりて兩市の交通には最も便利なるに至れり。

吳市 此地は元と安藝國安藝郡の南端に僻在する小市街なりしも、明治十九年吳海軍鎮守府を置かれて以來、前面の江田島に海軍兵學校設けられ、また吳には造船廠、造兵

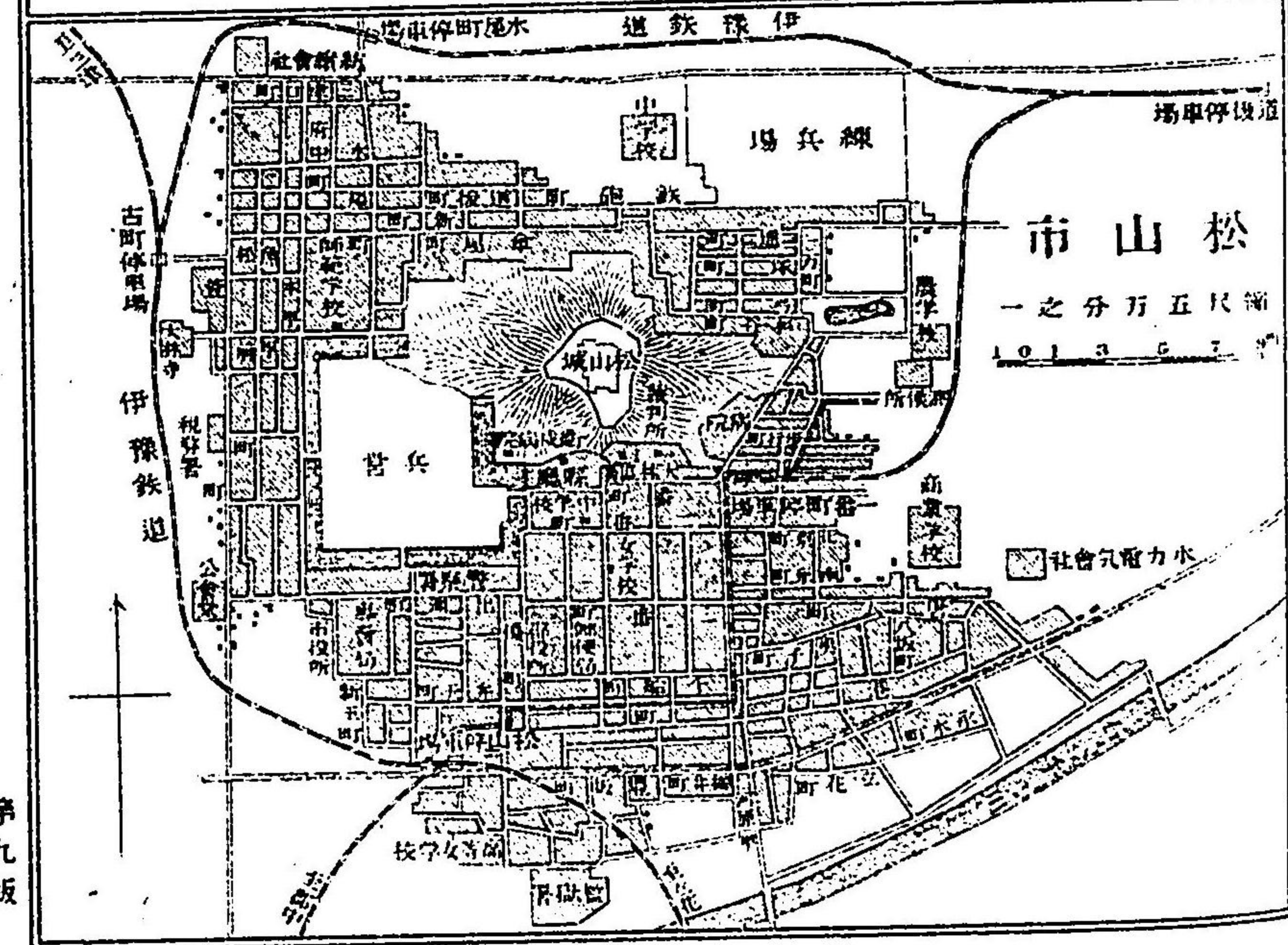
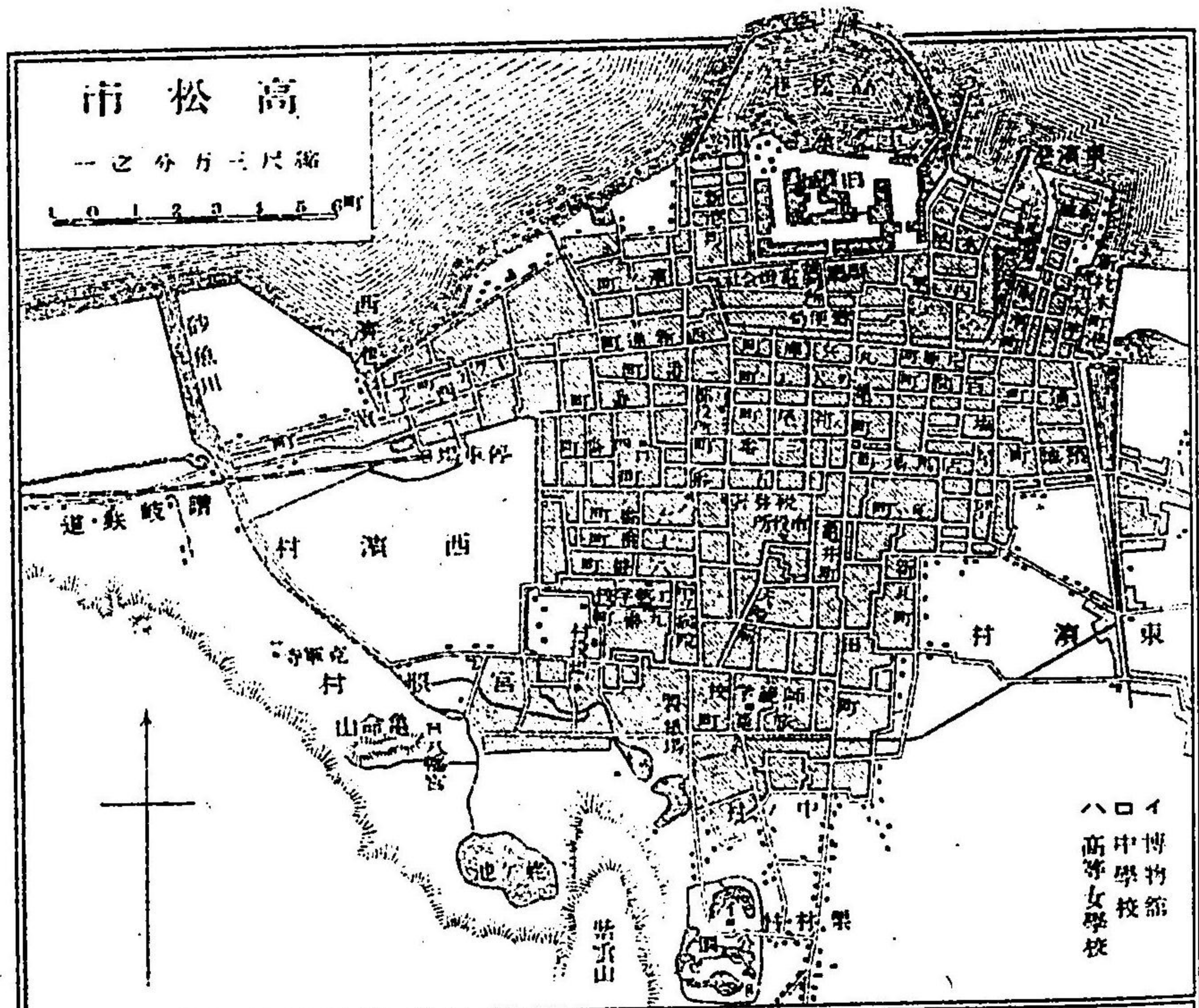
廠等も設けられ、俄然其の繁昌を加へ、十九年に戸數三千六百三十九戸、人口一萬七千八百十八人なりしもの、明治卅五年末には、戸數一萬八千六百十戸、人口八萬五千八百八十四の多きに達し、山陽道中有數の都會となれり。從來吳と廣島市との間は、汽船を以て吳より宇品まで日々七回も往復し、宇品廣島間の鐵道と連絡したりしも、今は吳鐵道の開通によりて、更に交通の便を増すこと甚だ大なり。市街には安藝郡役所、警察署、區裁判所等あり。市街の中心を和莊町と爲し、元と海岸の波土場までは二十二丁餘を隔てたるも、今は海岸まで一帯の市街と爲れり。而して海灣は三面に山を繞らし、前面には江田島、渡子島、能美島など横はり、南方は往時平清盛の開墾せしといふ隱戸の瀬戸を以て瀬戸内海には一小海峽を爲し、北七八里の海路を以て宇品港と連なり、海面恰かも湖水の如く、軍港内には常に艦艇數隻錨泊す。實に吳市の發達は、鎮守府の賜ものなり。旅館には吉川、徳田、菅、佐藤等あり。宿泊料は四拾錢乃至一圓五十錢、料理店には岩越樓、魚金樓、新野田、久保田等あり。中國通ひの汽船は、概ね上下ともに此地に寄るを常とす。

廣島傍近

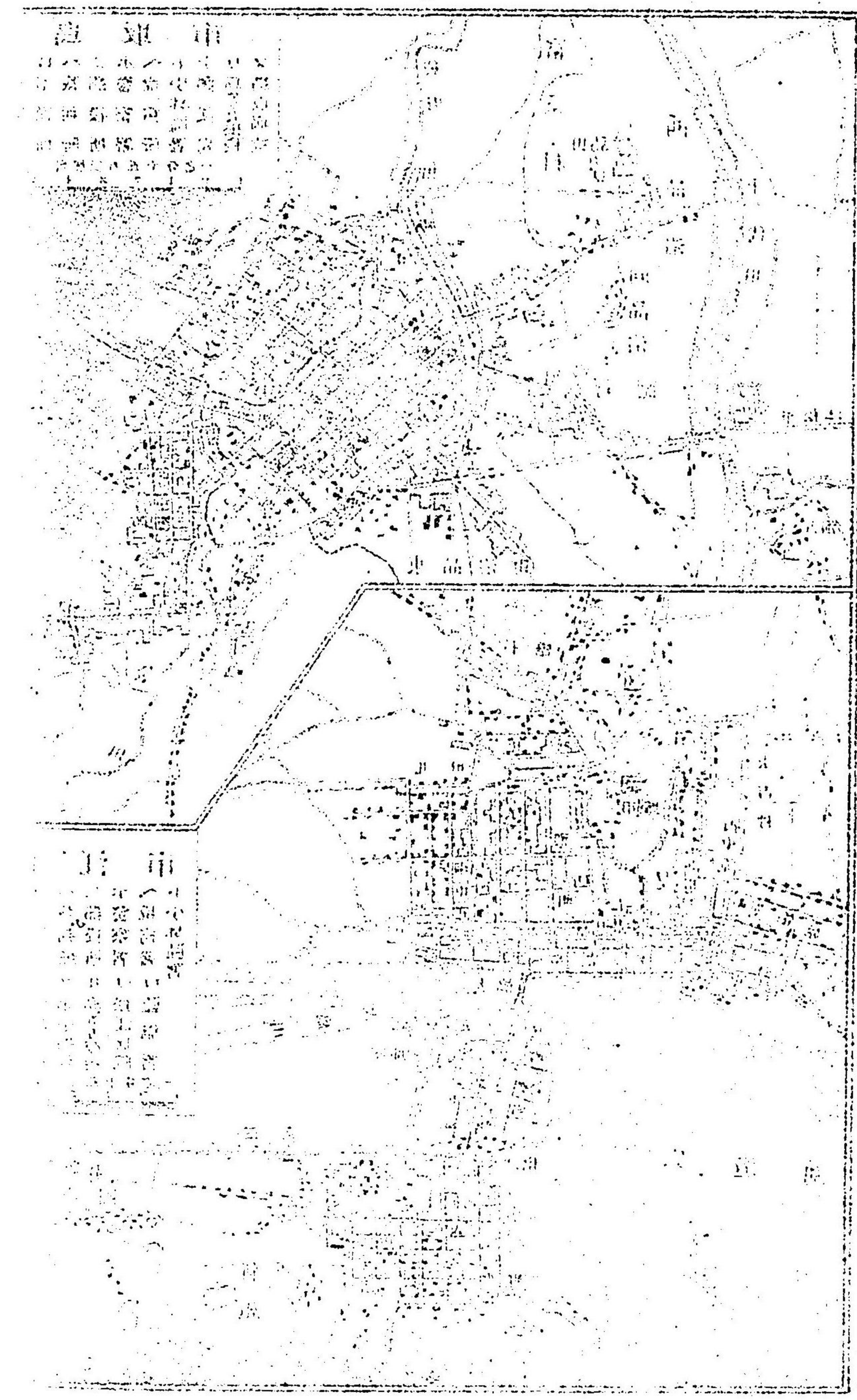
廣島市 海田市より西方二里、中國第一の大都會なる廣島市に達す。此地は元と淺野安藝守四十二萬六千石の城下にて、今は廣島縣廳の所在地なり。南方は海に接し、太田川は北より流れ、市内に入りて數派に分れ、京橋川、元安川、猫屋川、天満川、等となり。市中を貫流して海に注ぐ。故に舟楫の便多し。市の東南一里半に宇品港あり、廣島市より宇品までは、陸軍の軍用鐵道敷かれ、平時は山陽鐵道會社之を借りて使用し、今は宇品港も廣島市の一部なり。市に縣廳、控訴院、地方裁判所、稅務管理局、電話交換局、監獄署、大林區署、市役所、警察署、測候所等の諸官衙を首とし、電燈會社、中國紡績會社、水力電氣會社、綿絲紡績會社、米綿取引所、廣島農工銀行、廣島銀行など、會社銀行數十あり。また新聞紙は、藝備日々新聞、中國新聞、廣島日報の三種あり。戸數三萬一千百餘、人口十一萬一千五百、土地の面積に比して、全國中最も人口の稠密なる地方の一として數へられ、布哇出稼移民は、此の地方附近より出る者最も多く、之が爲めに海外渡航株式會社あり。物産には、花苴、綿絲、山繭紬、雨傘等、また名物に

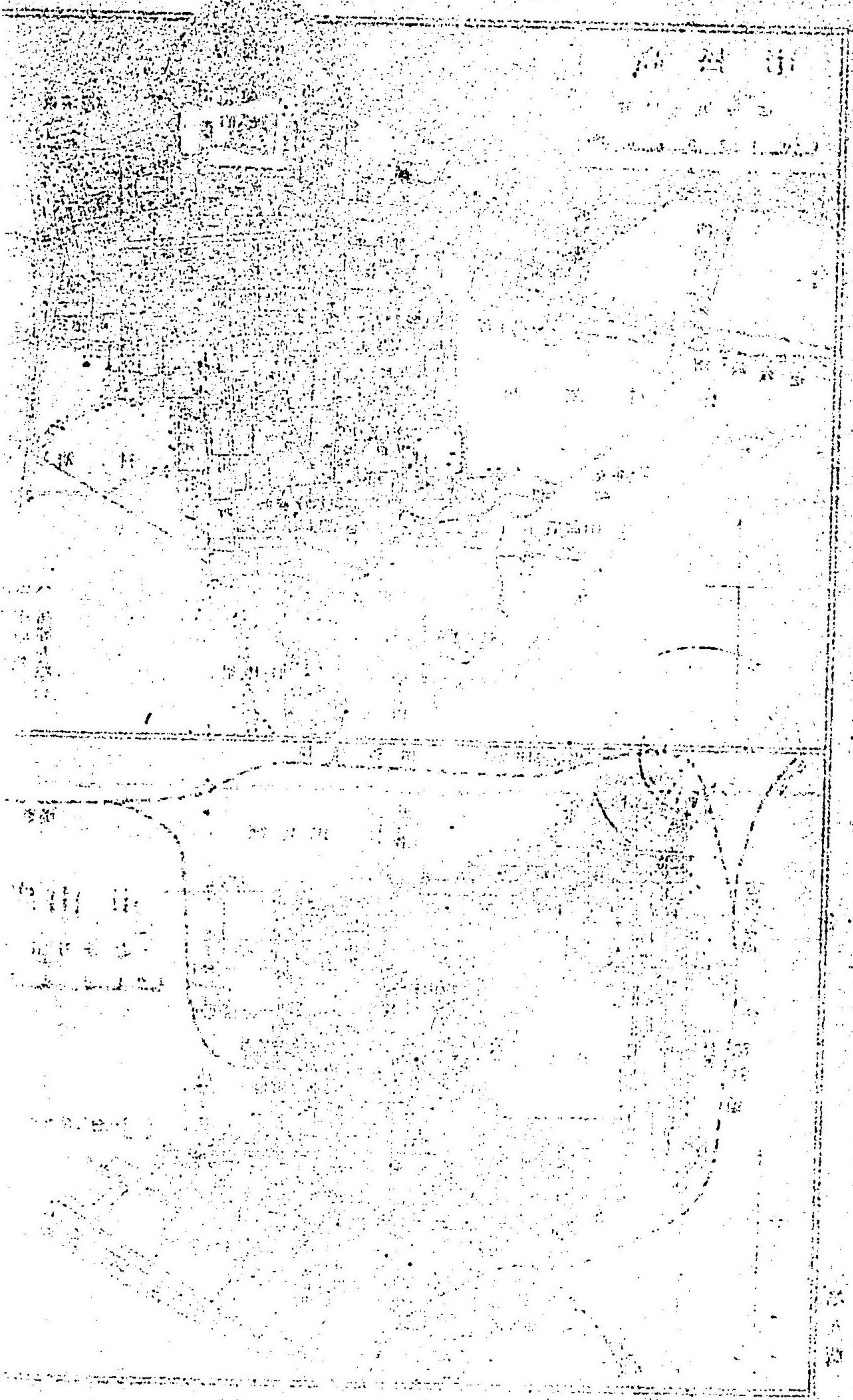




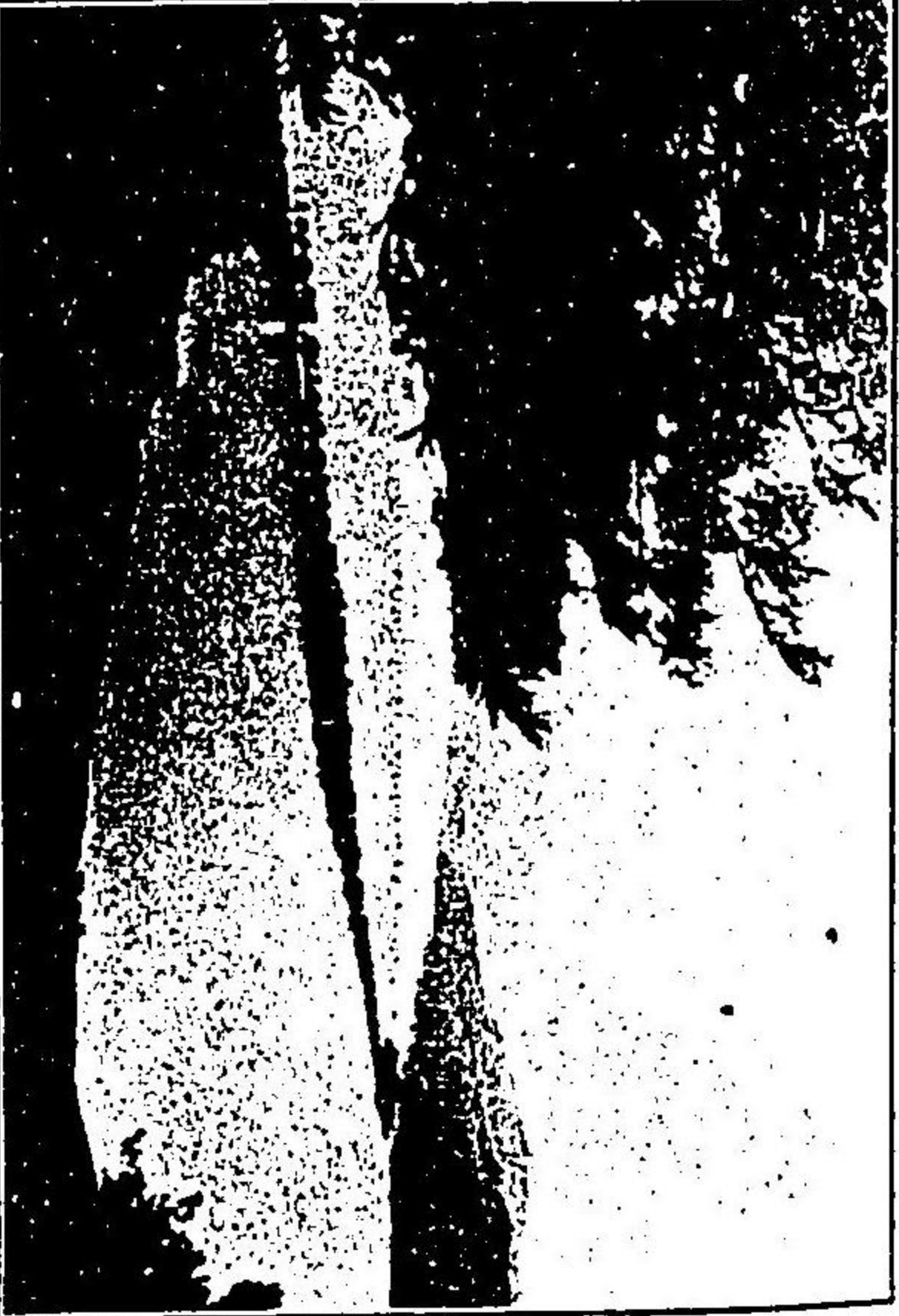


第九版

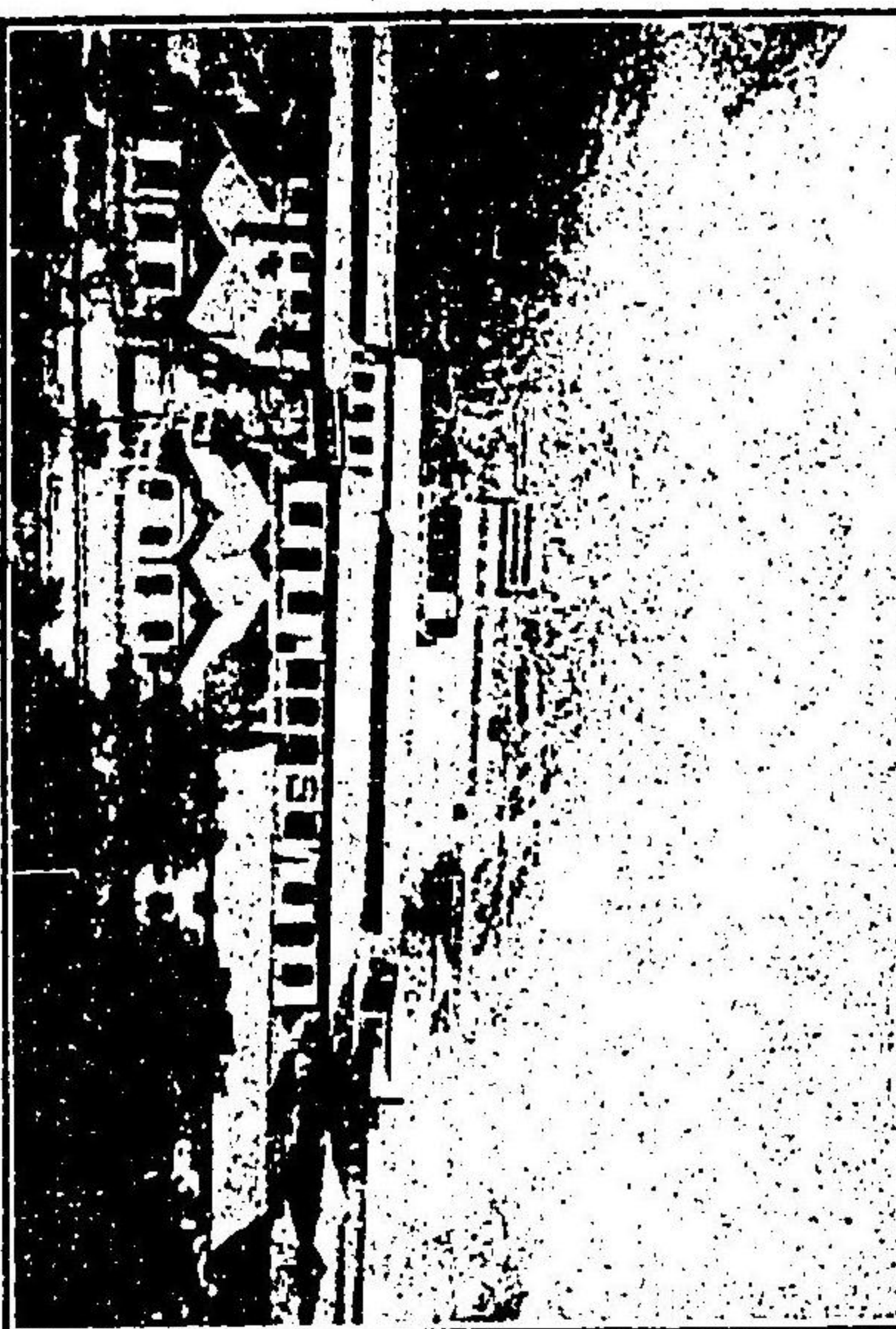




保津川の急流(丹波)



天橋立(丹後)



生野鐵山(但馬)



城崎温泉御所の湯(但馬)

山 陽 道

は彌、海苔、鮎魚、白魚等あり。旅館には大手町三丁目の吉川、長沼、潤身館、鳥屋町の溝口、泉、大手町四丁目の村上、紙屋町の川本、長崎、鐵砲町の松田、有田、佐々木、加川、山崎等あり。また停車場前には、長沼支店、晚翠館、加川支店、佐伯、東洋館、吉川支店などあり。宿泊料は上等一圓より一圓五十錢まで、中等七十錢より一圓三十三錢まで、下等五十錢より一圓までの等級あり。



長門に徙され福島正則代りて藝備二州に主と爲り、此城に主たると二十年にして、また幕府の嫌疑を得て領地を沒收せられ、元和五年以降、淺野氏此所に封

せられ、安藝全州と備後北部の入郡を領し、十二代の主、長勳侯に至るまで、二百五十三年間の居城たり。明治六年廣島鎮臺を置かれ、後に第五師團と改稱し、司令部は舊城内に置かる。明治三十八年の戦役中には大本營を此所に置かせられ、大元帥陛下の行在所たり。當時第五師團は、事變の起るや直ちに韓國に派遣せられ、牙山の開戦以來、平

壤の包圍攻撃に拔群の偉功を奏し、後に滿洲の各地に轉戦し最も多く戰鬪の衝に當り、また三十三年北清の事變には、天津北京の間に轉戦し、勇武を世界列國軍の前に輝かし、續いて日露戰役にも、毎戰赫々の功を表はしたり。(口繪寫眞參照)

泉邸 一に縮景園と稱し、舊藩主淺野侯の別邸なり。支那の西湖の景を模し、河流を隔て、斜に尾長、二葉の二山に對し、邸内に池あり、池中に島あり、梅林、楓溪、櫻巷、菜圃など、巧みに排置せられて、天然の景勝を備へ、曾て陛下の行幸ありし所、公衆の縦覽を許す。市内第一の勝區、停車場より西方六丁、人力車賃六錢を普通とす。

宇品港 古來廣島市内を貫流する太田川の下流、年々埋没し、汽船の廣島に入るを悩むや、明治十七年中、時の廣島縣知事千田貞曉氏は、太田川の河口なる此の宇品に築港の工事を計畫し、起工の後、幾多の蹉跌を生じたるも、能く萬難に堪へて、漸やく二十年十一月始めて竣工し、其の工費は三十四萬圓を費やし、當時世間には未だ其の効用を認めざりしが、二十七年日清戰役の起るに及び、第五師團の兵を此地より發し、續いて廣島以東の各師團兵は、皆な此所より進發し、數十隻の御用船は、常に本港内に繫泊して、綽々餘裕あるを見るに及び、宇品港の價值始めて天下に知らる。廣島より此

地まで一里半の間、陸軍の軍用鐵道敷かれて、平時は山陽鐵道會社借りて之を使用し、また陸軍荷物廠、陸軍糧秣宇品支廠、同豫備倉庫、宇品通信支部、などを設けられて、陸軍の大兵を海外に派遣するに必要な設備は盡く備はり、また大阪商船會社と日本郵船會社の各支店あり。其他平時には、伊豫の三津ヶ濱へは毎日二回、同國今治へは毎日一回の定期航海汽船あり。また吳へも毎日數回汽船の往復するあり。其他中國各港の間を往來する汽船は、毎日一回上下ともに寄港し、陸海の交通甚だ便利なり。旅館には長沼、吉川、伊藤、石崎、川友などあり。此地今は廣島の一部にて、戶數人口は廣島市に算入せらる。

廣島以西、汽車にて走れば、横川、巳斐、五日市、廿日市、の各驛は瞬く間に過ぎ、早くも宮島驛に達す。而して停車場の背後、海上數町を隔て、翠綠鬱蒼たる一大島の前に、海中に一大華表の浮かぶが如くに立ち、後ろに厩氣樓の如き回廊の連なるものは、問はずして嚴島なるを知るべし。

嚴島 日本三景の一として、陸前の松島、丹後の天橋立と共に、海山天然の風景を形つくり、遊賞の客をして歎賞して去るを忘れしむる所、舊時は多く廣島より船を繋ふ



て遊びたるも、山陽鐵道開通し、海上七丁の對岸なる佐伯郡大野村字赤崎に停車場を設け、之を宮島驛と名けしより、今は人皆な此所より船に乗る。停車場より一丁許の棧橋まで行けば、嚴島往復の小汽船は、汽車の着する毎に發し、十分時にして島に着すべく、汽船賃は片道金八錢、島は周回七里三十二町、東西二里六町、南北一里、山を彌山と稱し、山陰に七浦あり。浦毎に神祠を安んず。片舟を浮めて一巡するを俗に島巡りと云ふ。彌山の北の麓なる海濱に市街あり。戸數七百七十餘、人口三千六百五十餘。舊時西方の各地より廣島へ輸送する百貨は、一たび此地の陸に揚げ、然る後に解舟に移して廣島へ送りしも、今は直ちに宇品港に送る爲に、嚴島に輻輳する船舶の數は大に減じたり。然れども、瀛車瀛船の便により、此地の景勝を賞せんとして、東西より來る遊客の數は夥多しく増し、商賈の大部分は此等の遊客によりて成立す。杓子、匙、楊枝などの木竹細工物を産物とし、旅館には、紅葉谷の岩惣、塔の岡の松岡、大元公園の白雪洞、海岸通りの龜福などあり。宿泊料は一等一圓五十錢より一圓と七十錢とあり。二等は六十錢乃至四十錢なり。宇品港より此地に赴かんと欲すれば、日々數回の定期船もありて、一時間にて達すべし。

嚴島神社 嚴島町の中央にある國幣神社にて、市杵島姫、田心姫、湍津姫の三神を祭り、本殿、拜殿、祓殿など相連り、祓殿の前に高舞臺あり。方三間許、其の左右に平舞臺あり。廣さ百八十六坪、海中淺洲の上に斗出し、満潮には、海水其の床下を浸す。拜殿の左右に回廊あり、屈曲百四十八間、一間毎に鐵燈籠を釣り、回廊の楯間には古今名家の書畫數百點を掲げ、稀世の珍品多し。また此地の壯觀の一は、海中の大華表にて本社々前、舞臺の火燒前を距ること海上八十八間の平沙中に立ち、満潮の時、參詣者の舟は白帆を揚げたるまゝ、華表を潜りて入るを得るなり。本社創建の時より設けられ、後世數しば改造し、現時の華表は、明治七年より八年に亘りて竣工し、柱の高さ七間二尺五寸、周り五間三尺三寸、棟の長さ十二間一尺七寸、上棟より軒先まで一間六寸、總高さ八間三尺七寸、額は豎一間二尺三寸、横一間二尺にて、故有栖川熾仁親王の御筆なり。遊覽者は、先づ此の方面を一覽の後、歩を旋らして本社の前に歸り、回廊を西に渡り盡し、御手洗川を渡り、松原に連なる百八の石燈籠、小松内府手植の松などを視、海に沿ふて西し、大元浦に至れば、櫻樹多く、芳雲の海波に映ずる花時の風景は最も奇なり。更に進んで中西町、瀧町を過ぎ、後白河法皇の行在所なりし趾の御幸松を視、御手洗川

に架せる筋違橋の傍なる寶庫に就て、數多の寶物を縦覽し、南に轉じて山奥の紅葉谷  
に入れば、神鹿の群がり來りて餌を求むること、奈良の春日神社と彷彿たり。紅葉谷は、  
旅館酒樓數戸あり。就て飲むべく、また一泊するも可なり。轉じて東に進めば、大宮の  
岡に千疊敷及び五重の塔あり。千疊敷は、豊太閤征韓の師を起さんとするとき、本社に  
賽して神助を祈り、後に此の大建築を寄附したるなり。梁間十間五尺、桁行二十間、椽  
幅八尺にして、四方に欄を設く、今は其内に豊國神社を安んず。五重の塔は南方に隣り  
し、方二間半、九輪までの高さ凡そ十丈、應永十四年七月の創建にして、天文年間修築  
したるものといふ。若し夫れ此等の勝景を視了りて、更に船を浮べ、嚴島全島を一週せ  
んと欲せば、所謂七浦は、杉の浦、須屋浦、包ヶ浦、御床浦、腰網ヶ浦、青海苔浦、山  
白浦の各地、皆な山水石樹の勝に富み、一日の清遊に適す。況や此地、天文二十年、毛利  
元就が、周防の大内義隆の遺囑を受け、義隆の臣陶晴賢が、其主を弑したる罪を討せん  
と欲し、討賊の勅許を請ふて城を此所に築き、以て敵を誘ひ、晴賢が歩騎三萬、軍船千  
艘を以て來り攻るに及び、元就は、風雨の夜に乘じ、精兵三千を以て之と戦ひ、大に敵  
を破り、晴賢力竭きて終に自刃し、是より毛利氏の威武山陰山陽に震ふに至りし古戰場

にして、また曾て平相國清盛が安藝守たりし時、本社の崇敬殊に深く、神領を増し、社  
殿を營みて、今も清盛の眞筆を藏し、稀世の珍として傳へらる。自然美と人工美と相待  
て、古來帝國三大勝區の一として賞せらるゝもの、實に偶然にあらざるなり。(口繪寫  
眞参照)

岩國三田尻近傍

宮島以西、玖波、大竹の二驛を過れば、國界を越へて、周防の玖珂郡に入り、間もな  
く岩國町に達す。

岩國町 は、山陽鐵道岩國驛の西北一里餘の地にて、舊時は毛利氏の家臣吉川監物  
六萬石の居城ありし所、今は玖珂郡役所、區裁判所、警察署、商業銀行等の在る所、戸  
數二千八百餘、人口一萬七千餘の一都會、松茸、筍、海草、繭、生絲、茶、材木などを  
産し、米平糶、松清館などの旅館あり。錦川は、町の西端を北より南に流れ、下流は兩  
岐と爲り、東を今津川、西を門前川と稱し、各一里餘にして海に注ぐ。有名なる錦帶橋  
は、錦川に架するなり。

錦帯橋 岩國町の西端より錦川の對岸なる横山村に架す。延寶元年藩主吉川廣嘉始めて架設し、一名十露盤橋と稱す。五箇の橋梁連續して一橋を爲し、長さ百二十五間、最も高さ所、水面より六間、其の構造は、先づ河中に石を疊みて四箇の橋脚を築き、之に半月形の五小橋を架し、小橋毎に一柱をも用ゐず、框を組み立て層々相擦らしめ、因て全橋の重量を支ふ。其の制恰も泰西の建築術と符合し、奇巧を以て古來名高し(口繪寫真參照)

錦帯橋

玉乃世履

萬馬奔騰走波浪、五龍踴躍度雲霄、要知東海神機妙、請看防州錦帶橋、岩國以西 道路は二線と爲り、海岸線は藤生、由宇、神代、大島、柳井津、田布施、岩田、島田、下松等の各驛を経て徳山に達し、山陽鐵道之に沿ふも一々訪尋すべきほどの名所少なし。また一線は、岩國より一直線に川西、玖珂、今市、久保などの諸驛を経て徳山に達す。海岸線とは弧と弦との形を爲す。然ども沿道の勝區は、海岸線に比すれば更に少なし。故に直に徳山町に案内すべし。

徳山町 是れ舊時毛利氏の分家、毛利淡路守四萬石の城下にて、山を負ふて海に臨

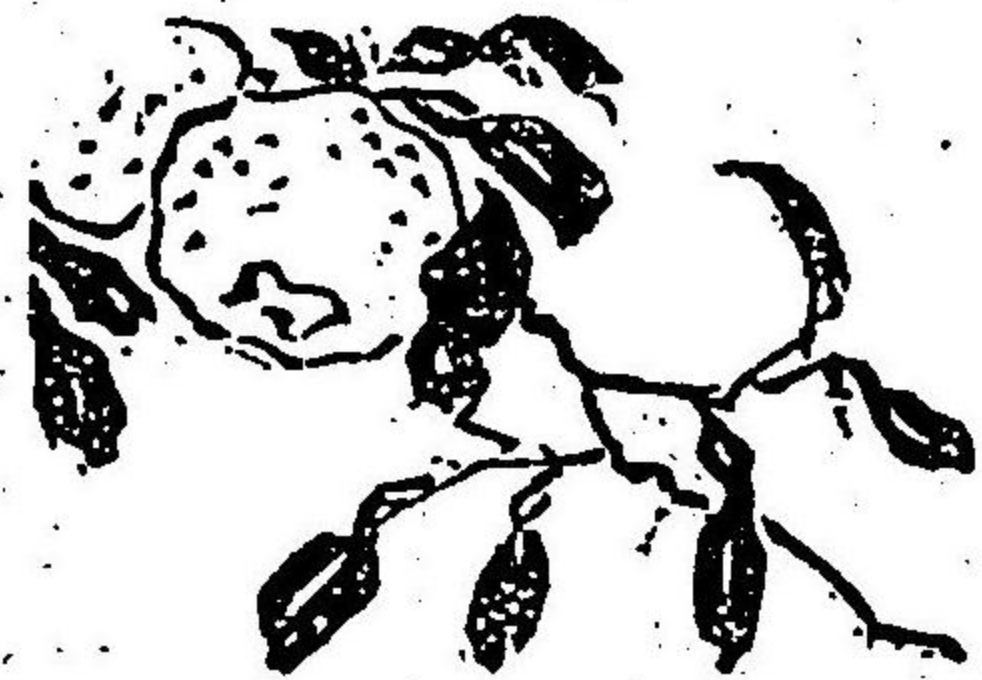
み、山陽の國道の要衝に位し、別に一線は北方石見の津和野を経て、松江に通ず。此地方今は都濃郡役所、税務署、區裁判所、警察署、尋常中學校、兒玉文庫などのある所、陸軍大將兒玉源太郎男は此地の出身にて、文庫は男爵の私費を以て設立し、公衆の縦覽に供するなり。戸數二千五百、人口一萬三千餘、陸には山陽鐵道東西に走り、海には中國航行の汽船日夜出入し、水陸の交通甚だ便に、商業また盛んなり。物産は、茶、安質母尼、和紙、酒、生牛等にて、松政、櫻部、武下、原庄、鶴水館等の旅館と、松琴樓藤源等の料理店を著名なるものとし、宿泊料は一等金一圓、二等金七十五錢、三等金五十錢とす。附近の遊覽地には、維新の前、勤王を唱へて非命に燈れたる殉難七士の碑、天保年間の孝女阿米の碑、櫛ヶ濱の海水浴場等と爲す。此地を西に去り、福川、富海の二停車場を過れば、三田尻 は周防國佐波郡の南端なる港灣にて、佐波郡役所、警察署、税務署、米鹽取引所、華浦銀行等あり。内海航路航行の汽船は、日に數回出入し、貨客の上下するもの多し。此地より北方に連なりて、國道に沿へる市街を宮市町と稱し、昔時國府のありし所、今も戸數七百、人口三千餘、區裁判所、宮市銀行等あり。宮市の旅館には藤

村、松崎館、三田尻ホテル、井原、石田等あり。宿泊料は、通常五十錢許、物産は、米、陶器、園の露と名くる菓子等なり。東より来りし山陽鐵道は、三田尻と宮市との間を過ぎて西方小郡に走り、國道は宮市の西北山口町に通じ、宮市と山口及小郡の三市街は、正に三角形を爲す。宮市山口間四里二十九町、一直線の道路、車行甚だ易し。人力車賃金五十錢、三田尻小郡間は鐵道にて十一哩許なり。また宮市より北方石見の津和野へ通ずる、石州街道の縣道あり。其の距離十八里、山路の勾配急に、屈曲多く、人馬の交通易からず、人力車賃金二圓を普通とす。

山口下ノ關近傍

山口町 三田尻より、宮市を経て西北方四里二十九丁の國道を行けば、防長二州の

管轄應所在地なる山口町に達す。舊時防長兩國に主たる毛利氏は、文久三年此地に城を築き、其の舊來の居城なる長門の萩より移つて此に居り、徳川氏が全國の兵を發して來り征せしも、却て散々に寄手を擊破し、逆まに領外に進撃し、石見口には濱田城を陥れ、海を越へては豊前に入り小倉城を取り、終に幕府をして天下を制するの力を失ひ、政權を奉還するに至らしめたる、王政維新に最大の功績ある地、實に吉田松蔭、高杉晋作、大村益次郎、木戸孝允、伊藤博文、山縣有朋、井上馨、品川彌次郎等の諸名士を出したる所なり。此地を中心として國道はX字形を爲し、北は校、高等女學校等あり。また歩兵第四十二聯隊の兵營は舊城内にあり。此地は往昔大内氏の久しく居城とし、防、長、豊、筑、藝、備、石の七州を領して、居城を構へたる所なりしも、天文二十年大内義隆の代に至り、其の臣陶隆房叛きて義隆父子を弑し、後に



陶隆房の子晴賢は、毛利氏の爲に亡ぼさるゝに及び、市街は盡く兵燹に罹り、同時の繁昌は跡を留めざりしに、文久三年毛利氏萩より移り住むに及びて大に昔日の繁昌を恢復し、明治初年以來山口縣廳を置かれて、益ます戸口を増加せり。町の北方上宇野令村に別格官幣社豊榮神社あり。贈正三位毛利元就を祭る。市街の最も盛なる所を大市町、中市町、米屋町とし、里程元標を大市町に立つ。山口より小郡まで三里二十丁の間は、人力車賃金四十銭なり。今は小郡に案内する前に、先づ舊時毛利氏二百餘年間の居城たりし萩に導くべし。

萩町 長門國阿武郡の西北方海岸に瀕する都會にて、防長兩州の太守毛利大膳大夫三十六萬石の舊城下、三方山嶽を繞らし、北方は海に面し、南より流るゝ阿武川は、町の南方にて兩岐に分れ、町の東西に流れて海に注ぐ。東なるを松本川、西なるを橋本川といふ。市街は平坦にして、溝渠縱横其間を貫き、橋梁甚だ多し。舊城址は町の北端指月山に在り。慶長五年關ヶ原の役後、毛利輝元西軍に與みしたる爲に領地を削られて防長二州に封ぜられしより、文久三年十三世の主敬親公の山口に徙るまで、二百數十年間此に居り、天守閣、城櫓とも尙ほ存す。町に阿武、見島郡役所、區裁判所、警察署等ありし萩に導くべし。

り。戸數四千餘、人口二萬餘、夏橙、松本燒の陶器、生絲、生蠟、海産物等を産し、旅館には熊野多吉、岡喜三郎、大和屋、藤原屋、中村屋、吉山屋、中谷富三などあり。宿料は一圓廿錢より最低は三十錢位とす。料理店には高大亭、松本屋、岡松亭、金子屋などあり。馬關を経て山陰各港へ通ふ大阪商船會社の汽船は、隔日一回、また大阪舞鶴往來の同社汽船毎月三回寄港す。此地より海路神戸馬關まで六十六哩、仙崎まで十哩、また東方濱田まで五十哩、須佐まで十七哩半なり。

山口以西 今は再び瀬戸内海沿岸に轉じ、山口より西に向へば、小郡に至る三里二十町の間は、湯田の温泉、上郷の天満宮、中領八幡宮、榮山太神宮、御茶屋の天満宮などの遊覽地あり。中にも湯田の温泉は、山口町の門戸にて、毎戸浴室を備へ、四時浴客を絶たず、松田屋、尾屋、茶屋、野原などの温泉宿ありて、山口人士の常に來り遊ぶ所なり。山口まで約一里、湯は鹽類泉、淡黄色を帯び、無臭にして微く鹹味あり。慢性皮膚病に効能多しといふ。小郡町は、山陽鐵道の停車場ある所、戸數千三百、人口七千餘、國道は此地にて三岐と爲り、東は三田尻に連なり、西南は馬關に通じ、北は山口を経て石見の津和野に連なる。故に周防の西端なる一都會なり。小郡より、鐵道は國道の南

方を走り、嘉川、阿知須の二驛を過ぎ、西に轉じて防長の國境を越へ、厚東川を渡り、小野田驛を経て厚狹に達す。

小野田町 是、厚東川と有帆川との海に注ぐ間に介まり、須惠半島の西岸にある一市街にて、小野田警察署、小野田銀行などあり。旅館は長豊樓、櫻井などあり。馬關まで海路十一哩半、日々數回汽船往復し、セメント會社ありてセメントを産し、また硫酸、晒粉、曹達灰などを産する所なるも、停車場の小野田は、同じ名の市街より北方十五町を隔つ。是より西、長府に至る沿道にて厚狹町は、戸數七百人、人口三千六百餘の小市街、米、麥、紙、酒、石炭、干海老、赤間關視などを産し、旅館には西田、山城屋あり。其の次なる停車場を塙生(はにふ)と爲し、西方六町に和泉式部の墓といふあり。また南方三町、國道に沿ふ系根の松原は、海濱に沿ひ、春は松露を拾ひ、夏は海水に浴すべし。旅館富田屋、角幸、關文などありて、干鳥賊と松茸とを産す。塙生の西、小月驛より、長府に至るまで、鐵道は國道に沿ふて海岸を走り、海上には干珠、滿珠の二島と相對し、散步には甚だ妙なり。

長府町 一に豊浦と云ひ、國道に沿ふ海岸の一勝區にて、西北に四王司山、勝山を

負ひ、東は海に面して、滿珠干珠の二島嶼其前に横はり、遙に本山ノ岬と相對し、東北は二里二十町を隔て、小月驛に通じ、西南は塙ノ浦を経て赤間關市まで約二里なり。戸數千五百、人口七千二百餘、豊浦郡役所、警察署、中學校、英和女學校、嘔噎院等あり。また功山寺の糸櫻、花時遊賞の人多く、關見臺の亂松は、中秋觀月の客多し。此所より赤間關まで鐵道によれば、西北を迂迴し、一ノ宮、幡生の二驛を経て、赤間關、乃ち馬關の西端に達し、停車場より直ちに山陽鐵道の連絡線によりて筑前の門司市に渡るを得るも、遊覽者には、長府より汽車を辭し、海岸の國道を過ぎ、外ノ浦より塙ノ浦を過ぎ、壽永の昔、平家一門没落の古蹟を弔ひ、更に中國九州近接して、早柄の瀬戸を爲す所、近く文久二年に毛利氏の兵が、攘夷の詔勅を奉じて通過の各國軍艦を砲撃し、後に英佛米蘭四國の聯合艦隊が、舳艫相啣んで來り攻めたる海戰の古蹟をも見るべく、況や今は兩岸に聳ゆる山上には、日夜要塞兵守備し、一々通過の船舶を監視して、如何なる敵國の艦艦海を壓して來り侵すとも、到底近づく可らざる金城湯地の固めとなりしを見るも心地よく、脚は何時となく運びて、早く馬關の市街に入るべし。長府には小串屋、三好屋、林屋、などの旅館と、對珪樓、富春樓などの料理店あり。また此邊り一帶に夏蜜柑

の産地として著はる。

馬關 本名は赤間關市なり。また周防の上ノ關、中ノ關に對し、下ノ關とも云ふ。頼山陽曾て此地に遊び、赤間關の名を雅ならずと爲し、馬關と名け、今は一般に斯く稱し、山陽鐵道もまた其の驛名を斯く名く。而して此停車場は、同鐵道の終端驛にて、市の北方なる背後を迂廻し來りて西端の海岸に出て、海峽七町の海を隔て、對岸九州鐵道の門司停車場と相對し、山陽鐵道は、此間に連絡汽船を往復せしめ、九州に赴く旅客は、馬關停車場を出て、直ちに棧橋より汽船に乗れば、十分時にして門司の棧橋に達し、其の棧橋より一町許にして九州鐵道の門司停車場に達することを得るなり。馬關の市街は、彼の山陽翁が詠じけん如く、千帆纜に去て千帆來り、帆檣常に海上に林立し、戸數約一萬二千、人口約四萬三千、古來瀬戸内海の咽喉にて、海に沿ふて東西に長く、壇ノ浦より馬關停車場まで、延長殆ど二里、市中最も繁華なるを南部町とす。背後に日和山、廣嚴寺山、火山等を負ふ。此長防二州の海峽は、普通に關門海峽と呼ぶ。是れ瀬戸内海の關門なる上に、また馬關門司の相對する海峽なればなり。要塞司令部は馬關にありて、對岸をも管轄し、嚴に内外人の撮影または見取り圖を畫くを禁ず。此地

を通過する内外の船客、之を知らずして撮影し、機械を沒收せられ、且つ處刑を受くる者多し。戒むべきなり。海峽の東は早朝の瀬戸にて、潮流急なること矢の如く、北岸は壇ノ浦にて、平家一門の海底に沒したる古戰場なり。赤間關市役所、同警察署、水上警察署、區裁判所、測候所、要塞砲兵營、海務署、憲兵屯所等の諸官衙あり。また三井物産會社、日本郵船會社、大阪商船會社等は、各支店を此地に置き、電燈會社、棧橋會社、汽船會社、商業銀行、貯蓄銀行、第百十銀行、米穀取引所、商業會議所などあり。對岸なる門司市が、近來俄に長足の進歩を呈したる爲に、馬關の繁昌は微しく奪はれたる感あるも、神戸以西、中國第一の開港場にて、最近一ケ年の輸出入額一千七百萬圓に上り、其の最も重要な商品は、米穀、肥料、烟草等にて、土地の物産は僅に硯と雲丹などのみなるも、陸海交通の連絡に便なるが爲に、百貨の集散地として、此の如く商業の般賑を見るなり。旅館は多く料理店を兼ね、中にも阿彌陀寺町の春帆樓は、明治二十八年日清戰役の終りに於て、兩國全權が數回會見して講和を議定したる遺跡なり。其他同町の大吉樓、赤間町の鎮海樓、西部小門口の長保樓支店及梅園など、何れも名高く、專業の旅館には、外濱町の川卯、唐戸町の錦波樓、柏長、西ノ端の天真樓、阿彌陀寺町の

常富、常六、岡崎、若竹、福辰、茶勘、等あり。宿料は、上等一圓廿錢、中等八十錢、下等五十錢、晝食料は上等五十錢、中等三十錢、下等二十錢とし、馬關停車場構内には、洋食のホテルと日本食の川卵旅館とを設け、鐵道旅客の便に供す。若し夫れ市街に用なく、唯だ馬關を通過するのみにて、深夜到着し、翌早朝に出發する者の爲には、便利殊に多し。室は新築にして宿料また高からず。而して恰も停車場内の待合室に在ると同く、乗車には振鈴の聲を聞て旅宿を發し、宿泊には車室を出て、直ちに旅館に入り、其間雨中にも傘を用ふる必要なく、況して車を雇ふの手續と失費と無し。

赤間宮：市内阿彌陀寺町にある官幣中社にて、安徳天皇を奉祀し、舊時は阿彌陀寺と稱する寺院なりしを、維新後今の神社に改め、社殿を改造し、毎年陰曆三月廿三日より三日間例祭を執行す。安徳帝の御陵は、宮の隣りに在り。宮の背後なる丘陵の半腹には、平家一門の墓あり。風淋雨蝕數百の星霜を経、碑面苔蒸して文字判明ならざるも、仔細に之を検すれば、前列の七碑には、平○盛(二字不明)平清經、平資盛、平敏經、平經盛、平知盛、平教經の文字を刻し、後列の七碑には、宗長、忠光、景經、景俊、盛繼、忠○(一字不明)平二位尼の文字を認む。蓋し平家没落の後、幾ばくも無く有志の

樹てたるもの、如しといふ。此所より東方一帯の海は、壽永の古戰場なる壇浦にて、當時攝津の一ノ谷の城陥り、平家は皆な船に乗り、安徳帝の御座船に従がひ、瀬戸内の海に浮み、讃岐の屋島に戦ふてまた敗れ、走りて此所まで來り、力盡きて皆な此所に戰歿し、安徳帝も、二位尼に擁せられて海に沈ませ給へるにて、當時の辭世なる今どしる御裳川の流れには浪の底にも都ありとは。の御裳川は、壇浦の傍に、南流して海に注ぐ細流なり。

赤間關懷古二首

朝川善庵

維昔天皇壽永春、崖山一敗自傷人、寺僧幸說當年事、免把興亡問水濱、  
御裳水古玉瑋琮、忍向烟波問舊蹤、海底便知帝都在、百川無日不朝宗、  
壇浦の古戰場 壇浦の名、往昔の長府より赤間關までの海岸一帯の稱にて、長府二ノ宮の沖、同宮第三の華表あり、それより早鞆の明神まで五百段の石階ありしを以て、斯く名けしといふ。元と漁家より成る一市街なりしも、文久三年毛利家にて瀬海防禦の爲に此地に砲臺を設くるに及び、市街を方今市の東端なる壇浦町に移し、之と區別する爲に古壇浦と呼ぶ。地は火ノ山を負ひ、西は御裳川に接し、前は早鞆瀬戸を隔て、豊



前の明神崎と相對す。御裳川の海に注ぐ邊、多く蟹を産し、俗に之を平家蟹といふ。甲上に鱗あり、宛も憤怒せる人面に似たり。又小平家と稱する魚あり、形鯛に似て、鱗に金色を帯び、白色の斑點あり。頗る美麗なり。但俗は曰く、平家の亡靈は、男子は蟹と化し、女子は此の魚となれりと。妄誕探るに足らざるも、蟹と魚とは共に奇なり。

龜山八幡宮 赤間關市内、字



外濱町と神宮司町との間なる一小丘の上に在り。郷社にして、應神天皇、仲哀天皇、及神功皇后を奉祀す。境内一千八百六十餘坪、社殿は南に面し、華表の前は直に海陰曆九月十五日を大祭日とし、境内には多くの露店出て、頗る雑沓を極む。(口繪寫眞參照)

小門 赤間關市街の西端にて、小瀬戸を隔て彦島と相對し、其間僅に五十間許、東は關門海峡にて早瀬の瀬戸、一に硯ノ海と稱し、西は玄海灘に連なり、六連島其の西に

連なる。潮流矢の如く急に、漁舟の此の間を往來するもの、宛も落葉の狂風に舞ふが如し。山を負ひ、水に臨み、奇岩怪石海岸に横はり、水邊に酒樓あり、夏時海水浴の客多し。

岩柳島 赤馬關市と豊前の門司市と、南北に相對し、西方に彦島横はりて、其間の

海は稍や三角形を爲し、海峡また三叉形を爲し、東は關門海峡の早瀬瀬戸、西北は小門と彦島間の小瀬戸、西南は彦島と豊前大里との間の瀬戸を爲す。而して其の三角形の北岸は下ノ關港、南岸は門司港にて、内外の汽船は、瀬戸内海を過ぎ來り、早瀬瀬戸を通過して、大汽船は多くは門司港に碇泊し、小汽船は下ノ關港に碇泊す。兩港の中間、彦島の東岸に近く、一小島あり。之を岸柳島といふ。是れ往昔小倉藩士宮本武藏が、長門の士佐々木岸柳と武を争ひ、此所にて決闘を試み、岸柳を斃したるにて名高き所、武藏の墓は、對岸豊前國赤坂村延命寺に在り。岸柳の墓は、元と此の島中に在りしも、今は海中に陥没して見へずといふ。島に近く與次兵衛の瀬といふあり。是れ豊太閤征韓の役、公の乗船此地を過るとき、船頭明石與次兵衛なる者、乗船を此瀬に乗り上げて危害を加へんと欲し、終に誅せられてより、此名ありとぞ。此地の北岸は乃ち豊前なるも、そは

九州の案内にて説くべければ止みつ。

(二) 瀬戸内海

山陽沿道の陸上に於る案内は、既に了れり。然れども此の地方遊覽者には必ず瀬戸内海の諸勝をも案内せざる可らず。此に所謂瀬戸内海とは、神戸を西に去て、明石海峡より、山陽道と四國との間なる、多島海の間を過ぎ、山陽道と九州と相對する關門海峡に至るまでの海路を言ふ。其間に播磨灘、備後灘、安藝灘、周防灘を経て、早瀬瀬戸を過ぎ、關門海峡に入る。而して其間最も風景に富むは、播磨灘の西、周防灘の東にあり。北に山陽の白砂青松、南に讃豫の長汀曲浦、灣環逶迤として連なる間、大島小嶼數百散在し、船中の人をして、一島を送り、一島を迎へ、前後應接に暇無らしめ、歐米の旅客をして、世界無比の絶景と稱せしむる所なり。今は之を(一)播磨灘(二)備讃の瀬戸(三)讃豫の瀬戸(四)廣島瀬戸附近及(五)周防灘の五區に別ちて案内を試みるべし。

播磨灘 大坂港の安治川口を發し、神戸に寄港して西の方、和田岬を右に見て過れば、間もなく明石の海峡に至るべし。淡路島通ふ千鳥の啼く聲は、舞子の濱の松に渡り

て、ほのくくと明石の浦の曙に、燈の笠屋の烟たなびき、高砂の尾上の松、相生の松、かすかに續く白妙の、沙の渚に寄せては返し、小波疊む鱗形、女神舞ひ來て人間に、濱松風や鹽汲の、曲を傳へし播磨の海岸を右舷に眺め、飾磨、網干、室津などの各地を過るに、播磨灘に散在する鞍掛島、男鹿島、家島、西島、院家島などの屋島群島は、常に左方に連なり、群島盡きて忽ち一大島は西南に横はる。之を讃岐の小豆島と爲す。島中の寒霞溪は、内海指屈の勝境ながら、其案内は四國の章に譲り、今は唯だ船中より山容の凡ならざるを眺むるのみにて、西に進めば、早くも備讃の瀬戸なる絶景の境に入る。

備讃の瀬戸 『白石若松灣又灣、扁舟靜過畫圖間、東南一髮青如拭、霜氣稜々五劍山』とは、是れ成島柳北翁が、瀬戸内航行の船中に、讃岐の五劍山を詠じたるもの、實に小豆島を左に眺めて西に進めば、右は備前の邑久郡の南端、牛窓港の前には、大島、前島、黄島、黒島の諸島横はり、續いて大島、沖波島、沖竹子島など、碁石を投げたる如くに散じ、更に兒郡島の半島は、蝙蝠の翼を廣げたらん様なる形して、近く讃岐の木田、香川の諸郡と對し、呼べば答へん計りの邊まで突出す。左方は讃岐の小豆島に續いて土庄、小豊島、豊島、井島、直島など、備前の諸島と入り交り、其の南方には、所謂五

劍山突元として聳へ、西方の白峰と相對して、高松市の左右に双腕を伸ばしたるが如く  
斗出し、屋島は五劍山の西に横はり、鏡島、大島、男木島、女木島など、取次風光、眞  
に畫圖の間を漕ぐの思あり。濱邊には青松山に聳へ、老巖波濤と闘ひ、左らぬだに風景  
絶奇なるに、況して屋島は源平の古戰場、那須與市が扇を射たるは何れの邊の海中にて、  
七兵衛景清と三保谷四郎が綴曳さの古跡は此所あたりの海濱かと、一々想像を下せば、  
徘徊願望人をして去るに忍びざらしむ。高松と備前の三幡港との間は、山陽鐵道の連絡  
船が日々に二回往復する航路にて、更に西して備讃兩州の斗出する陸角を過ぎ、左方に  
讚の丸龜を眺むる邊りは、堅場島、笠島、小與島、與島、櫃石島、六口島、鹽飽島、牛  
島、廣島、波節岩など散在し、有名なる金刀比羅神社の象頭山も、歴々海上より指點し  
得べく、更に西の方、三崎岬は、長く西北に向つて斗出す。廣島、波節岩より以西、讚  
岐の近海より、斜に西北に向ひ、備中を指して、志々島、粟島、高見島、下二面島、佐  
柳島、手島、眞鍋島、大島、北木島、白石島、大高島、神島を連ねて備中の笠岡町に接  
續す。北木島の西、三崎岬角より起れる一群の小島嶼、六島、土生島、小飛島、大飛島、  
宇治島、袴島、走島、など備後の鞆津にまで連なり、鞆津の東側に仙醉島の絶景を浮べ、

島の傍に小なる辨天島あり。天女廟の青松に掩はれて風致を添へたるは、畫もまた如か  
ず。鞆津が三崎岬と遙に相對する所、是れ備讃の瀬戸の盡さる所にて、是より西は、内  
海も遠く開けて、燈灘と爲り、暫らく島嶼の數を減ずるも、北岸は、鞆津より尾の道に  
連なりて田島、横島、百島、向島等、連なり、尾道より西南、伊豫の今治の西北は、島  
嶼最も複雑なる藝豫の瀬戸に入り来る。  
藝豫瀬戸 鞆津の西は、田島、横島、百島、向島等の諸島を以て尾の道に連なり、  
尾の道の瀬戸を隔て、對岸なる向島以南は、布刈瀬戸を隔て、岩子島、大細島、因ノ島  
等は備後に屬し、佐木島、高根島、生口島は安藝に、弓削島、生名島、佐島、岩城島、  
赤穂根島、伯方島、大三島、大島などは、伊豫に屬し、更に西すれば、安藝の忠海、竹  
原の兩市街と、伊豫の大陽崎との間、島と島とを以て幾條となく瀬戸を爲し、汽船は島  
の陰より縦横に出没して、輒もすれば衝突を生じ易く、航海は多少の不安なきにあらぬ  
も、海は恰も湖水の内を漕ぐが如く、全たく風浪の險を知らず。其中にて、大船船の通  
過する航路は、燈灘より西、大島と今治との間なる來島の瀬戸を經、小島と來島との極  
めて狭き間を過ぎ、伊豫の大陽崎の沖を通過して安藝灘に入るの航路を往來するなり。

また大三島の西に大崎上島あり、其間には大下瀬戸を爲し、大崎上島と安藝との間には柳ノ瀬戸を爲せり。伯方島の東角に錨島あり、大三島と生口島との間に瓢箪島あり。また大島の西に津島あり、大三島の北に大久野島あり。大三島と大崎上島との間に横島、肥島、大下島あり、大崎上島の北に生野島、阿波島あるも、此等は皆な小島嶼のみ。更に大崎上島の南なる大下島より西に、大下瀬戸を隔て、大崎下島、豊島、屋久比島、上浦刈島、下浦刈島あり。下浦刈島と安藝の陸地との間に横瀬戸を爲す。大崎上島の北に、伊久賀島、大芝島、馬島、里島の諸小嶼あり。大崎下島の北に三角島あり、上浦刈島の北に柏崎あり、また大崎下島より下浦刈島に至る列島の南西は、即ち安藝灘に入る。藝豫の瀬戸は此に盡く。實に藝豫の瀬戸は、瀬戸内海中最も島嶼多く、其の瀬戸の内に、更に島と島との間、または島と陸との間、布刈瀬戸、三原瀬戸、伯方瀬戸、花栗瀬戸、刈瀬戸、來島瀬戸、大下瀬戸、及猫瀬戸の八小瀬戸を劃し、皆な潮汐出入の門戸を爲すが爲に、航行者は最も苦心する所なるも、風光の美はまた内海に冠たり。中にも尾ノ道の山海相逼りて無数の青螺を海上に望み見るが如き、三原の瀬戸の朝暉夕陰氣象萬千するが如き、皆な宇内の大觀なり。而して優美にして温雅、佳麗にして明媚なる風光は、

更に廣島灣内の嚴島、江田島等の諸島に於て最も多く之を見るなり。  
廣島灣 藝豫瀬戸の大崎上島及大崎下島より上浦刈島下浦刈島列島に連なりて、其れより西南は、暫らく群島稍や稀疎となり、既にして更に倉橋島を起し、島と巽半島との間、往時平清盛が疏鑿したりといふ隠戸の瀬戸を過れば、江田島は前面に横はり、北は宇品港、西は周防の岩國より柳井津に至る、一帯の海灣を廣島灣と爲す。其間、江田島の北に、安藝の小富士の似島や、日本三景の一なる嚴島、偕は大黒神島、阿多田島等列なり、更に南方は、伊豫の三津濱より西方に、興居島は、また伊豫の小富士と稱せられ、遙に望めば富士の如き形して海上に聳え、其の北方には、野忽那島、陸月島、東中島、怒和島、二神島、津和知島など、横さまに東西に列なり、之を伊豫と周防との國境と爲し、更に屋代島は、一大瓢の如き形して、伊豫の津和知島の西端を頭とし、周防の玖珂郡の南端なる大島を尾と爲し、恰かも廣島灣の南方に蓋せるが如くに横はり、屋代島と大島との相對する間、大島瀬戸を爲し、瀬戸の西に柳井津港を爲し、南は室津の半島を形つくりて、其の岬端に室津港を成す。室津の西、また上ノ關海峡を隔て、長島横はる。而して廣島灣外の諸島嶼は、長島の東南には、平郡島、屋島あり。長島の西には、

祝島及小祝島ありて、之より西は周防灘と爲り、内海も漸く廣く、島嶼また疎に、西は關門海峡に、南は佐賀關海峡に、航路は三叉形を爲して通じ、最早瀬戸内海なる多島海の絶景と離る。

周防灘 廣島灣を西南に出で、大島瀬戸を過ぎ、宍津半島を廻りて上ノ關の瀬戸を過ぎ、長島の西に出れば、北は周防灘、南は伊豫灘にて、伊豫の佐田半島は、遠く西に斗出して豊後の佐賀關と相對し、四國と九州の間に豊後水道を形成し、豊後と、北方なる周防との間、兩陸遠く相隔たりて周防灘を爲すなり。而して周防の沿岸には、尙ほ笠戸島、大島など、同國徳山灣なる仙島、黒神島、大津島、馬島、沖島、野島等、ともに一島系を爲し、遙に南の方、豊後の姫島と相望み、文珠山は巖然として豊後の海角に峙ち、豊後の連山は、更に其背後に、黛を凝らして、高低波浪の狀を爲す。周防灘の西方、暫らく陸岸に離れ、中國と九州とは、互にたゞ一髮の青を認むるのみなるも、漸やく西するに隨つて兩陸また漸やく近き、關門海峡を爲す所、滿珠、干珠の二島は長門の豊浦の沖に浮動し、南岸は門司、北岸は馬關と相對して、壇ノ浦の水路川の如く窄く、古の文字ノ關、赤間ケ關の間、早瀬瀬戸、一に視海と名く。當年源平の兵船波上に戦ひ、

平家の一門皆な海底に沈みたる地は、今は林なす帆船、城廓なす艦船、いろくの國旗兩岸を軋る汽車、空に漲ぎるセメント會社の煤烟など、また壽永の昔の面影を偲ぶに由なし。海峡の西、彦島の横はるは、實に玄海灘の風濤を防ぎ、海峡内に馬關門司の兩港を形づくらしむる原因にて、彦島の西は、六連島に連なり、之を出れば玄海灘、雲濤萬里また際涯なし、瀬戸内海の遊覽此に終る。

平家蟹

釋 梅 癡

豪華洵去浪悠悠、蘆荻叢邊浸古愁、今日英魂歸郭索、腥風怪雨海莊秋。

大刀魚

柏 如 亭

吶喊聲消天日麗、波濤海靜太平初、折刀百萬沈波去、一夜東風盡作魚。

# 山 陰 道

山陰道の三大區劃 大江山生野の道の遠ければ、まだふみも見ず天の橋立、と、小式部の内侍が詠じけん、其の大江山は丹波、生野は但馬、天の橋立は丹後にて、一首の中、能く三丹の名所を網羅したり。今は山陰道の遊覽を案内するに當りて、先づ此の方面より説くを順序とす。元來山陰道の八國は、丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見と隱岐の島にて、一道とは云へ、全道は名の如く山の陰に在る上に、國々皆な山を以て隔てられ、孤立して小天地を爲す。然れども大別して三大部落に分れ、丹波、丹後、但馬は三丹と稱せられ、互に往來する交通の便は、海陸ともに稍や備はり、因幡は孤立して、東方但馬とは七阪八峠の山を以て限られ、西方は伯耆とも青谷峠を境とし、南方備前の上郡へ出るにも駒返り坂の險あり。伯耆は鳥取縣に屬すれども、交通の上より見れば出雲石見と接続して一區域を爲す。而して隱岐は海中の一群島、また別天地を爲すは、固より止むを得ざるなり。

## (一) 三丹地方

### 京都鐵道附近

交通 三丹地方には、日本海沿岸を警衛する舞鶴軍港を首として、日本三景のなる天橋立、全國有數の靈湯なる城崎温泉、などありて、遊覽すべき所多く、且つ海には宮津、舞鶴、を経て越前敦賀に達する丹州汽船會社の汽船は、毎日一回往來し、陸には京都鐵道の京都より丹波の園部まで通じ、園部より同國福知山まで人力車の通ずるあり。また阪鶴鐵道は大阪より福知山まで通じ、福知山より舞鶴までは、官設鐵道通ずるあり。別に福知山舞鶴の間、由良川の汽船と、馬車とを以て接続するあり。また山陽鐵道の播但線は、姫路より生野を経て新井まで達し、新井より北は、八鹿、豊岡を経て、城崎温泉まで、馬車及人力車の連絡するあり。城崎、宮津、舞鶴の間も、また人力車の往來甚だしく困難ならず、故に京都、大阪、姫路の三大都會より三丹地方へは、陸上の交通稍や開け、また敦賀まで海上の船便も略ぼ備はる。今先づ京都市より、丹波を越へて舞鶴までの案内より始むべし。

京都舞鶴間 曩に京都近傍案内の下に説きたりし如く、京都鐵道は、官設東海道鐵道の京都驛に接續して起り、丹波口、二條、花園、嵯峨、龜岡、八木の各驛を経て、園部まで、現今二十二哩餘を開通し、其の嵯峨までの案内は、既に前に京都近傍にて説きたり。而して龜岡以北は丹波に入り、山陰道に屬す。

龜岡町 京都鐵道の嵯峨驛より、保津川に沿ひ、川に架したる鐵橋を渡りながら、絶景の溪流を下瞰しつゝ、隘道を通すれば、七哩九鎖にして龜岡町に達す。(口繪寫真参照) 此所は山間ながら丹波國南桑田郡第一の都會にて、



此所に封じ、天正十年六月、光秀をして兵を率ゐて西の方備中に毛利氏の軍と對戦中なる羽柴秀吉を援けしめんとしたるとき、光秀は兵を進めて山城に入り、桂川を渡りて後、西に赴かずして東を指し、敵は本能寺に在りと稱して、信長の旅館なる京都の本能寺を攻め、之を弑したる有名なる謀叛の進路は、此間となす。舊城址は市街の北端に在り。

今は形原神社を建つ、保津川の舟遊は、此所より發して嵐山の渡月橋まで下るものにて、川は嵐山の下流にて桂川と爲り、淀川に注ぐ。故に龜岡山より京都大阪地方に舟楫の便を供す。人口七千五百餘、旅館には著名のもの無く、物産も山間なるが故に、僅に薪炭、松茸、筍、鮎等を數ふ。

附近の勝區 龜岡町の西一里許なる曾我部村字穴太に穴太寺あり。天台宗にて、慶雲二年の開基、西國二十一番の札所にて、本尊の聖觀音は、世々穴太觀音とて、長さ三尺三寸、京都の佛師感世の作、本堂は八間四面にて、仁王門、二重の塔、念佛堂等あり。

同所にはまた禪宗臨濟派の福壽山金剛寺あり。圓山應舉筆の山水、人物畫を數多く藏す。是れ天明年間京都大火の時、應舉は、擅徒たるの故を以て、來りて寺内に寓し、揮毫したるもの、元と本堂の壁に貼り着けありしを、明治九年に卷物と爲して保存するに至りしなりとぞ。

園部町 龜岡より瀛車に乗れば、中間に八木驛を経て園部町に達す。方今京都鐵道の終點なり。此所よりは今後官設山陰道鐵道を起し、綾部を経て福知山に至り、阪鶴鐵道と連絡し、更に二線と爲り、一線は東北に舞鶴軍港に達するものは、方今既に開通し、

他の一線は、今後西に走りて、和田山に至り、山陽鐵道の播但線と連絡し、但馬の中央を貫き、豊岡に至り、また西に走りて因播の鳥取を經、伯耆に至り既成の山陰線に接続し、米子、境に達せんとするものなれば、將來の園部は、極めて要衝の地位に在り。保津川の上流に注ぐ園部川の岸に在りて、舊時は小出主税二萬六千七百石の城下にて、井郡中の一都會、郡役所、警察署、區裁判所、郵便局等の在る所、東方一里にして保津川に達し、其所よりは龜岡まで舟楫の便あり。木石材、栗、柿等を産す。人口約二千五百。

福知山附近

園部以西 福知山までは十二里十一丁、須知、檜山、下久保、菟原、生野等、何れも山間の村落を經て福知山に達す。別に檜山より綾部を經て福知山に達する線路あり。綾部は福知山に次ぎ、此の地方の都會なるが故に、官設鐵道の舞鶴線は、此の道路に由る。故に福知山を説く前に  
綾部町、に案内すべし。園部より二里十三丁にして須知、更に一里三十丁にして檜

山、此所にて綾部線と菟原線に分れ、綾部へは六里半にして達す。中間に大原驛あり。綾部は、何鹿郡役所及警察署等の在る所、京都まで二十里餘、福知山まで三里半、綾部銀行などありて、戸數千餘、人口約四千六百、舊時九鬼式部少輔一萬九千五百石の城下、山間に僻在して、交通不便なるも、また一小都會なり。  
福知山町 歩兵第二十旅團司令部を首とし、歩兵第二十聯隊、工兵第十大隊、天田郡役所、警察署等の在る所、大阪より阪鶴鐵道を以て此地を經、更に官設舞鶴鐵道をも借用し、舞鶴まで、日々に四回汽車往復し、南には姫路の第十師團北には舞鶴軍港の中央と爲り、東南は京都に、西は鳥取に、南は大阪まで、四方に往來の要衝たるに至れり。此地、舊時は朽木近江守三萬二千石の城下にて、山良川は南より市街の東を流れて由良の海に注ぎ、從來漁船は日々に上下して鐵道と連絡し、宮津港へは十三里、由良まで川漁船を利用すれば賃錢八十錢、更に由良より宮津まで人力車賃三十五錢を定めとす。旅館には平佐、大勝、船橋等あり。料理店には鱒、加壽一、板生利等あり、また猪崎新地に遊廓あり。實に舞鶴軍港と相待ち、三丹中將來最も繁昌地と爲るべき所と爲す。



舞鶴附近

舞鶴町 舞鶴は、丹後の加佐郡に屬し、東方博奕崎、西方金岬の左右より突出したる間より、人字形の内灣を爲し、右方なる東灣は、軍港にして町を東舞鶴と呼び、左方なる西灣の南端なる市街を西舞鶴と呼ぶ。此の西舞鶴は、舊時は田邊と稱し、牧野豊前守三萬五千石の城下なり。軍港は、近來鎮守府を置かれて以來始めて開けたる新市街なり。福知山または宮津より軍港へ往來するには、必ず此の西舞鶴を過ぎる要路に當り、軍港と西舞鶴との間は、陸上一里餘、中間に榎峠の山路あり。隧道を通ず。海上よりすれば三里許なり。而して丹州汽船會社の汽船三隻、毎日一回、宮津より西舞鶴を経て、若狭の小濱と越前敦賀との間を往來す。福知山を経て大阪へは汽車毎日四回往來し、別に西舞鶴と宮津との間のみを往來する極めて小形の汽船數隻あり。宮津へは毎日二回、六時間にて達する馬車あり。交通不便なる山陰道に在ても、割合に困難を感ぜず。軍港新設以來、軍港及西舞鶴の兩市街とも、戸口は日々に増加して、精確の數を記し難きも、西舞鶴は戸數二千餘、人口一萬餘、加佐郡役所、警察署等は此所に在り。軍港は明治卅

五年に新設せられ、灣の南岸なる餘部、倉梯、志樂の三村を併せて新市街と爲し、道路開通式を擧げたるは三十五年十一月二十二日にて、市街の名稱は多く帝國軍艦の名に因み、吉野通、笠置通、高千穂通、大和通、和泉通等の稱あり。東舞鶴の旅館は、花月、彌生、松原、吾妻等あり。また龍宮新地に遊廓あり。西舞鶴の旅館は、古金屋、清和樓、常盤樓等あり。此所も朝代新地に遊廓あり。福知山より舞鶴と宮津とへは、河守驛にて道路左右に岐れ、東北は舞鶴、西北は宮津線なり。而して舞鶴より宮津へは、既に説く如く海上十五里の間、汽船便に由るを最とも便と爲すも、陸路山良及栗田を経て六里十八丁、一部は由良川に滑ひ、一部は栗田灣の海岸に沿ふ。また河守驛より舞鶴を迂迴せずして直ちに宮津に赴かんには、途中に元伊勢太神宮及大江山等の勝あり。元伊勢太神宮 一を外宮、一を内宮と云ひ、ともに加佐郡河守上村の内にありて、相距ること十町許、福知山、宮津間の縣道に沿ふ。傳ひ云ふ伊勢の兩大神宮は、元と此處に鎮坐せしを、雄略天皇の二十二年、勅して伊勢に遷し奉りしなりと。去れば里人は今も其の地を元伊勢と呼び、兩宮ともに村社ながら、各數十の末社あり。素木造

り茅屋根の本社は、伊勢兩宮の構造を縮めたるが如く、内宮の在る岡丘の麓には、宮川、五十鈴川流れ、宮川には菟道橋を架し、別に天の岩戸と名くる岩窟なども其の附近にあり。

大江山 は、宮津街道の左方に峙ち、丹波の天田郡、丹後の加佐郡及與謝郡の境を接する所にあり。高さ三千七百二十尺、一名鬼城嶽と稱し、往時酒頭童子と稱する強盜其の山中に住み、四方に出没して良民を困めしかば、土人は之を鬼と稱して懼れ隠る。朝廷源頼光に命じて討伐せしむ。世に之を頼光の大江山鬼退治と稱す。山は丹波に屬するも、此山に登るには、宮津街道の途中、佛性寺越よりするを捷路と爲す、麓より山嶺まで約一里、此山に就ては古歌多し。小式部内侍の『大江山いく野の道は』の歌は言ふもさらなり、藤原範兼の

大江山こえて生野の末とほみ道ある世にも逢ひにける哉  
また寂蓮法師の  
誰もみなあかぬ名残におほへ山秋は生野の方をなかめて  
など尙ほ多し。

由良 舞鶴と宮津との間なる海濱の一村落ながら、古來院本に名高き「由良港千軒長者」「三莊大夫五人娘」などの材料に採られたる、三莊大夫の舊地にて、大夫の屋敷跡は由良川の西岸にあり、其の最も高き所は納涼の地とぞ。傍に小祠あり。彼の山別れの段に、多くの人の涙を絞らしむる安壽姫の靈を祀る。村の西北に老松あり。三莊大夫鋸挽の刑に處せられし跡と稱す。西南に登ゆるを由良嶽と云ひ、其の形の富士に似たるより丹後富士ともいふ。一里許にして山上に達す。東北由良灣の勝を眺め、海上遙に雄島、沖島を望み、脚下に由良川の流るゝあり。風光恰も畫の如し。

宮津附近

宮津町 二度と行くまい丹後の宮津、綺の財布が空になる、と、古來俚諺にまで唄はれて、旅客の遊ぶに面白きを以て名高き所、與佐郡に屬し、海灣の如く陸地に入り、其の西に一沙洲の長く海中に一文字を劃して青松之を蔽ふものは天の橋立にて、宮津橋立間は僅に二十丁のみ。故に此の日本三景の一なる絶景を稱せんと欲して、古來來り遊ぶ者多く、隨て市街は遊覽客を第一の顧客とし、久しく般販の聞へ高し。況して中古は

細川忠興の封ぜられて城を築き、後年松平伯耆守七萬石の城下にて、丹後第一の都會、  
今も興謝郡役所、警察署等あり。灣内深くして陸岸は東南西の三方を繞らし、千噸以下  
の船舶は、市街の軒先まで入て繫ぐを得るが故に、日本海沿岸屈指の良港として、今は  
開港場と定められ、戸數約二千二百、人口約一萬一千、旅館には茶谷、柏原屋、筆屋、  
北野屋、山藤等あり。料理店は暢  
神樓を巨壁とす。遊廓は旅舎と軒  
を並べ、藝妓の風俗は多く京都に  
類す。是れ蓋し旅客の財布を空な  
らしむる所以か。



切戸の文珠閣 宮津灣の西、  
天橋山智恩寺には、一大文珠閣あり。本尊の文珠菩薩は、梵天帝釋化現の作と稱し、脇  
士は毘首羯摩の作、寺は臨濟宗にて、妙心寺派に屬す。山門の二層樓には、黄金閣及海  
上禪叢と匾し、門内には和泉式部の塔、多寶塔、經藏、青山大膳の墓、などあり。本堂  
文珠閣には、醍醐天皇の勅額、天橋山智恩寺と題するを掲げ、右に曉雲閣、左に祠堂あり。

一里許にして天橋立の長洲は、北  
より長く走り來りて内海を兩斷し  
更に一内灣を形成す。其の長洲の  
端と、對岸との間、僅に四五十間  
を隔つるのみ。之を文珠の切戸と  
呼び、南岸を古津村字文珠と稱し、

り。寶物には龍の鱗、天狗の爪、夜光珠、白馬の角など、怪しき物多し。寺の傍なる切  
戸の波津を渡れば、天橋の南端に達す。

天の橋立 日本三景の一にして、興謝海の中央に突出し、幅三十七間、長廿八町あ  
り、恰かも天然の橋の如し。故に天橋とも云ふ。天橋を以て興謝灣を兩斷して、東は宮  
津灣と爲し、西を内海又は岩瀧港といふ。内海は、海底淺くして僅に小舟を泛ぶべきの  
み。而して天橋は、青松白砂海面に映じ、所謂水中に松あり、天上に橋ありの眺望は、  
四時其の美を盡くし、宮津より舟を浮べて賞するも佳なれど、縦一文字の風景を觀んに  
は、北方なる成相山より望むべく、横一文字の風景を賞せんには、但馬城崎街道の舊道  
なる楞峙に登り、腰を屈めて自身の股間より覗き視るを最も奇なりと稱せらる。(口繪  
寫眞参照)長洲の盡る所に橋立神社あり。其の北に磯清水あり。海中より湧出して、毫  
も鹽味を帯びざる清泉なり。古歌多し。一二を舉れば

ふみも見ぬ生野とよそに歸る雁かすむ波間の松と答へよ

藤原定家

よさの海や霞み渡れる夕なぎにたえく見ゆる天の橋立

公宗母

附近の名所 籠神社は國幣中社にして天水分神を祀り、天橋の北、大垣にあり。

攝社眞名井神社外に數社あり。寶物には、小野道風の額などあり。與謝海を望みて風景頗る佳なり。毎年四月廿四日大祭を行ふ。また神社の北一里許成相村に成相寺あり。成相山の半腹に建てられ、仁王門の仁王は、大佛師運慶の作とて名高し。仁王門に至る間、途に大谷寺、阿彌陀峰等の名所あり。成相寺より天橋を望めば、風景最も佳絶と稱せらる。寺は眞言宗にて、聖觀音を本尊とし、寛永年間の再建なり。尙北に進めば、本庄濱村に宇良神社あり。天長年間の創建にて、郷社たり。更に西南に歸れば、上宮津に普甲山あり、與謝の大山と稱せらる、一に千歳峠とも云ひ、同村字山田より三十町許にして山上に至るべし。景色また太はだ佳なり。

先づ一言すべし。出石町 但馬國出石郡役所の所在地にて、豊岡町へは南方に三里、同國八鹿町まで東北に三里二十四丁、舊時仙石隱岐守三萬石の城下にて、山間の小都會、世に仙石騷動として、講談に名高き、神谷轉などの出でたる所、また出石焼の陶器を産す。町の北方十餘丁神美村字宮内に國幣中社出石神社あり。境内廣く、遊園あり、四時節を曳く者多し。

豊岡附近

豊岡町 城崎郡役所所在地にて、元と京極飛騨守一萬五千石の城下なるも、仙石氏の城下なる出石町よりは却て般賑を以て稱せられ、維新の初、但馬一國を管轄する爲めに、豊岡縣を置かれたりし所、人口約八千あり。小田井縣神社は、同町の北端小田井にある縣社にて、但馬開關の祖神と稱し、大己貴命を祀る。矛立神事、河内神事などして古代の祭事を行ふて有名なり。町の西一里餘の五ヶ莊村字高屋に雅成親王の墓あり。親王は後鳥羽帝第三の皇子にて、承久の役、當國に幽閉せられ、滋藤町の光行寺に入りて

薙髮し、終に此地に薨じ給ひしを葬りしなりとぞ。また光行寺は、承久の役に雅成親王の遷され給ひし地にて、親王の寵姫、後を追ふて來り仕ひ、王子を分娩し、其の王子僧と爲りて淨圓と稱し、當寺の住職と爲り、眞宗を弘めたりといふ由緒ある寺なり。

玄武洞 豊岡の北一里十町餘、田鶴野村字赤石にあり、また石柱洞若くは蜂巢窟ともいふ。三個の洞穴ありて、左なるは間口十三間、奥行十七間、中なるは間口十二間、奥行十五間、右なるは間口十三間、奥行十七間にして、六角形の石柱數千縦横に堆積し、頗る壯觀を極む。柴野栗山の命名して揮毫せる玄武洞の三字を左壁に刻す。

城崎温泉 湯島温泉といふを正しと爲すも、俗に城崎と呼ぶなり。豊岡の北二里三十町、山陽鐵道播但線の終端新井驛より、北方十四里餘なり。鐵道と人力車と連絡し、大阪神戸地方より姫路に至りて播但線に乗り替へ、姫路新井間は二時半にして達す、新井城崎間は、一路平坦、車行甚だ容易く、約六時間にて達するが故に、大阪神戸より即日にして達す。また大阪よりは阪鶴鐵道により福知山に至り、和田山に出て、播但鐵道に接続するも可なり。唯だ播但線に比して微しく迂回を免かれざるなり。温泉場は、城崎川の西岸湯島村字湯島にあり。往昔養老年間、僧道智の發見する所、鴻の湯、曼茶羅

湯、御所の湯、口の湯、柳の湯、地藏の湯の六泉源ありて、何れも浴場の設備整ひ、旅館五十餘戸ありて、鶯鳴館、油筒屋、三木屋など最も名あり。夏季尤も避暑に適す。温泉寺は城崎温泉發見者なる僧道智の開基にて、無數の石燈籠は、温泉の効験により病の平癒せし者の寄進する所なり。仁王門の仁王は、運慶の作にて名高し。其附近に本住寺、日和山などの勝地あり。(口繪寫眞參照)

海岸の津居山は、大阪商船會社山陰航路汽船の、夏季は毎週二回寄航する所、更に海岸を西に進めば、途に竹野濱の勝を眺むべく、尙ほ西して香住村に到れば、字森村に大乘寺あり。俗に應舉寺といふ。天平年間僧行基の創建にして、其の應舉寺の稱ある所以は、中興の開山密英上人嘗て京都に遊び、未だ應舉の名を成さずして落魄し居りしに、銀三貫目を辨し、江戸に赴かして其の大名を撞にせしむ。應舉其の徳に感じ、蘆雪、吳春、源琦、等數名の門弟を伴ひ來り、當寺に逗留して、襖、屏風、軸物等を描きて舊恩に報じたるを、今に至るまで多く藏するに由る。城崎より此地まで凡そ七里十六丁なり。此より西、海岸に沿ふて餘部を經、濱阪町に至る縣道あるも、山路其間を隔て、車を通じ難し。

但馬の西南

●●●●●  
 村岡町 香住村より南方七里廿七丁、美方郡役所の所在地にて、人口約三千、村岡  
 絞と名くる絞紙の産地なり。但馬より因幡に通ずる要衝に當り、東は八鹿町を経て播但  
 街道に連なり、西は春來峠を越へ、湯村を経て因幡に通ずる國道に沿ふ。然れども村岡  
 以西、但因の國境まで、山嶽重疊し、冬時は積雪七尺より多きは一丈に達する所あり。  
 故に但馬より因幡に赴く者稀に、鳥取縣人もまた、大阪、京都、東京の往來に、但馬を  
 經由する者稀なり。若し夫れ夏時避暑ながらに山陰沿道を旅行するには、村岡の西、湯  
 村、濱阪を経て鳥取に至るの沿道、風景の賞すべき所多し。故に尙ほ、略ぼ之を説くべ  
 し。

●●●●●  
 湯村温泉 村岡より春來峠を越へ、鳥取街道の國道五里半にして達す。山間の小驛  
 なるも、熱湯は巖石の間より噴出し、菜蔬を浸せば立どころに煮る。泉源は直に温泉宿  
 の背後に在り。旅館十數戸、富屋、近江屋等名高く、宿料六十錢、滞在の浴客は五十錢  
 位といふ。近來浴客の多くを城崎に奪れたりしも、古來有名の温泉地なり。此地より鳥

取街道は二線と爲り、一線は海岸に出でず、蒲生の國境を越へ、岩井の温泉を経て鳥取  
 に到り、一線は海岸に出で、濱阪町を経て、七坂八峠の阪路を越へ、因幡の浦富を経て鳥  
 取に通ず。濱阪以西の海岸に奇勝多し。

●●●●●  
 濱阪町 海岸の一市街にて、湯村温泉の北二里半、大阪商船會社山陰航路汽船の寄  
 港する所、濱阪川は、湯村より流れ来て此地に至り海に注ぐ、西但馬の小都會なり。旅  
 館は鯛屋を最とす。山陰鐵道は、將來福知山より和田山を経て、豊岡より海岸に沿ひ、此  
 地を経て鳥取に通ずる豫定なり。

●●●●●  
 濱坂以西 縣道は海岸に沿ひ、巖嶽の半腹を穿ちて開かれ、青松は巖上と巖下とに  
 茂り、北海の怒濤は斷へず脚下を打ち、風景の雄大なる、多く比類無し。之を鬼門崎と  
 呼ぶ。更に西して、大振島、小振島等、畫の如く海上に散點する奇景を賞し、七坂八峠  
 の山路も疲れを覺へずして過ぐれば、身は既に因幡に入り、向磯鼻、網代灣等に迎へら  
 る。國境より鳥取までは約七里なり。人力車を通ず、一里賃約十錢。

鳥取地方の案内は、後に譲り、三丹地方の漫遊を了つて、一旦姫路まで歸ることゝす  
 べし。而して其の沿道は、村岡より國道によりて東の方七里にして八鹿に到れば、道路

は三叉形を爲し、北は豊岡より城崎街道、南は和田山、生野を経て、姫路に通ずる播但街道なり。

播 但 街 道

八鹿町 但馬國養父郡役所の在る所、北方豊岡へ三里、南方新井の停車場まで六里半、他の地方より山陰道の各地に至るには、總べて山嶺を以て隔つる中に、獨り姫路より生野を経て、新井、和田山、八鹿、豊岡、城崎より津居山の北海岸までは、珍らしくも山脈斷へて平地を通ずるが故に、八鹿町は此の播但街道の要衝に當り、豊岡に次で商業殷賑なり。町の西端村岡街道に出る所に、九鹿あり、八鹿に倣ふて「九鹿」と誤り呼ぶ旅客多しとは、左もあるべし。八鹿の南一里餘を距る養父市場に養父神社あり、縣社にして大己貴命を祀る。但馬五社の一にして、崇徳天皇の御宇の創建といふ。また八鹿の西三里十丁餘の關谷村字三宅に、往昔の屯倉の跡あり。同郡の南境西谷村字筏には、天の瀧とて、兵庫縣下第一の大瀧あり。猿尾瀧は、郡中妙見山の西麓にありて、高さ三十丈、天の瀧に次ぐ大瀧なり。

八鹿より播但街道を南に行き、養父市場、大藏を経て四里にして朝來郡和田山村に至れば、また道路は南北東の三岐と爲り、東方なるは福知山街道にて、將來官設山陰鐵道は、福知山より此所に來り、北方八鹿に向つて走るべく、山陽鐵道の播但線は、既成の新井より、此所まで延長し來り、他日また鐵道の三叉形を爲す所、將來賑かなる所と爲るべし。和田山より更に二里半にして新井停車場に達す。

新井 方今播但線の終點驛、此所より姫路まで三十二哩十九鎖、日々に七回の往復ありて、片道約二時三十分を費やし、三等賃銀四十九錢、元と播但鐵道會社敷設し、後に山陽鐵道會社の買収したる線なり。此地は村落の一小驛にて、多く記すべきこと無きも、驛より十丁許を距る所に、維新前勤王を唱へて、兵を生野に擧げたる志士南八郎の墓あり。

生野 停車場の在る所、有名なる銀山は、町の北方に在りて、三菱會社の所有に屬し、規模の宏大、機械の整備、全國有数の工場なり。就て請はゞ縦覽を許さる。生野以南は播磨に入り、山陽道の下に説きたれば贅せず。(口繪寫真參照)  
今三丹の案内を終るに臨みて一言すべきは、三丹の交通には、京都、阪鶴、播但の三

鐵道あるも、京都線の終端驛なる園部以北は、未だ車馬賃一定せず、また園部福知山間には名勝少なし。故に京都に遊びたる者は、嵯峨嵐山より龜岡を経て、園部までを究め、更に丹波丹後に赴くには、大阪を迂廻し、阪鶴鐵道にて福知山に赴くべく、但馬地方へは播但鐵道に由るべし。道路は迂回するも、時間と費用と兩ながら省略するを得べきなり。阪鶴鐵道の沿道は、攝津の西北方の下に之を説きたり。

(二) 因 伯 地 方

因幡伯耆の二國は鳥取縣の管轄にて、其中に伯耆は、方今西端の境港より米子倉吉を経て、因幡の青谷まで官設山陰鐵道開通し、山陰道中最も交通の便に富めども、因幡は東南西の三面に山を繞らし、北方は海に面して、四面の交通最も不便の位地であり。東方但馬街道は、七阪八峠の險あり。南方播磨に出るには、戸倉峠の險あり。美作に出るには駒返り阪の險あり。西方伯耆に出るには、鉢伏山脈を以て南より海岸まで劃斷せらる。幸ひに近時西方青谷まで鐵道開通し、爲に米子境等の往來は、稍や交通の便を得たり。而して東方の但馬街道より、鳥取市を経て西方の伯耆街道は、山陰道の國道なるも

因幡人士の大阪、京都、東京等に往來する者は、鳥取より千代川に沿ひ、河原、用ヶ瀬、智頭の諸驛を經、駒返りの山路を越へて、美作の英田郡に入り、大原驛に至りてまた作播國境の山脈を越へ、播磨の佐用、久崎驛を過ぎ、山陽鐵道の上郡驛に至りて鐵道の便に接す。鳥取上郡間は二十六里なるも、人力車の往來繁く、通例片道二圓五十錢と定む。然れども上郡より鳥取に至る案内は、既に山陽道の編に於て説きたれば、今は但馬の國境より因幡に入り、鳥取を經て國道を西に行き、伯耆を縦貫して、米子より境港までを案内すべし。

但 因 兩 國 の 國 境 附 近

但馬西北端の小都會を濱阪と爲し、濱阪より海岸に沿ひ、諸寄、西濱、居組の諸村を經、七阪八峠を越へ因幡に入るを因州人は但馬濱街道と云ひ、濱阪の北方二里半の湯村温泉より、千原、八田の諸村を經、蒲生峠の國境を越へて因幡に入るを奥但馬街道といふ。奥但馬街道は國道にして、岩井の温泉を經て、駟馳山村に到り、兩線合して一と爲り、更に山間を上下して鳥取市に達す。遊覽者には濱街道に由るを利とす。海岸に奇景



多ければなり。七阪八峠の絶頂なる但因國境の標榜によれば、鳥取縣鳥取元標へ六里十八丁二十二間五合、兵庫縣神戸元標へ四十九里二十七丁八間と記す。

七阪八峠 海岸に聳ゆる嵐嶺の山腹を貫ぬく縣道にて、北方には斷へず日本海を望み、眺望甚だ佳なり。山を西に下りて因幡に入れば、向磯の鼻、網代灣、等海岸線は幾たびも屈曲し、海岸の怪巖奇石は、千歳不斷の激浪に襲撃せられ、肉瘦せ骨のみ現はれ、上に老松ありて、或は直く、或は偃し、姿態百出す。奇景甚だ愛すべし。網代灣は、岩本川の海に注ぐ所、漁舟を繫泊するに足る。川は源を蒲生の山中に發し、岩井の温泉を經、北流して此に至るなり。網代灣に隣れる浦富村より、海に離れて西南に行くこと一里許、駟馳山村に至りて奥但馬街道の國道と合す。

岩井温泉 但馬の湯村温泉より、國道は、蒲生峠を越え、岩井温泉を經、駟馳山村に至りて濱街道に合するなり。而して岩井は因幡の東北に於る一小都會、温泉は鹽類泉にて、無色透明、溫度は華氏の百十七度、疝癩、溜飲、貧血症、皮膚病等に特效ありと稱せられ、古來其名高く、毎年の浴客三萬人を下らずといふ。旅館兼温泉宿は岩井屋、さしや屋を最とす。

岩井以西、駟馳山村は、道路の三叉形を爲す所、數戸の茶店ありて、人力車を繼ぎ替るを得べく、茶屋の背後の高丘に登れば、岩井街道と濱街道とは眼下に望み、浦富、網代の海岸より、向磯鼻、丸山鼻の海嶠と、遙かに因但の國境に連なる嵐嶺、蒲生峠の諸山まで、一々指點すべし。脚下の新道は、山腹に蜿蜒として、羊腸屈曲し、人馬の上下するもの、豆よりも小に、一々數ふべし。此所より西三里半にして鳥取市に達す。途上榎木峠の山路あるも、人力車を通ずべく、また南方に稻葉山を望むべし。

鳥取近傍

鳥取市 因幡第一の都會、因伯二州の管轄廳なる鳥取縣廳の在る所、舊時は池田伯耆守三十二萬五千石の城下にて、市街は東西三十丁、南北一里に連なり、戸數約六千四百、人口約三萬五百、出雲松江と並びて、山陰道の大都會なり。袋川は市の西北を環流して千代川に合し、賀露港に至りて日本海に注ぐ。久松山は市の東北に峙り、舊城址の在る所、會て天正九年六月毛利氏の驍將吉川經家、此の城を守り、羽柴秀吉の爲に圍まれ、城陥りて戦死したる古戰場にて、慶長六年池田光政此所に封せられ、後に寛永九

年八月備前岡山に移し封せらるゝに及び、從弟光仲代つて之に居り、近く明治四年の廢藩まで、代々池田氏の居城たり。故に市街廣く、百貨輻輳し、廢藩以來縣廳を置かれ、明治三十年には、更に第四十聯隊を設けられ、益ます般賑を加ふ。唯だ因幡以外には交通の不便なるを憾とせしも、官設山陰鐵道は、既に九里を隔つる西方の青谷驛まで開通し、鳥取までは工事中にて、東方但馬を経て舞鶴及福知山に通ずる線路も必然敷設せらる可ければ、將來に益ます繁昌を加ふべし。市街の最も賑かなる所は、二階町、川端町、茶町等にて、縣廳、地方裁判所、聯隊區司令部、憲兵屯所、には元大工町の小せに屋最も名高く、之に次て東町一丁目の湖山屋、川端三丁目の米善、新但、同四丁目の吉成屋など世に知らる。料理店は、鹿野町の海老亭、東町の玉柳亭、上魚町の花月亭など名高く、劇場は今町一丁目に大黒座、新鑄物師町に寶座あり。藝妓



役所、警察署、岩美郡役所、郵便局等の諸官衙、師範學校、第一中學校、高等女學校等の縣立學校と農工銀行、第百銀行支店、倉庫會社、酒造會社等數多く、因伯時報、鳥取新報の日刊新聞二あり。旅館

は本町に多く、遊廓は河原町にありとぞ。物産は繭、生絲、白珊瑚樹の箸、海松のバイブなどあり。(口繪寫眞參照) 此の地を中心として隣國への道路は四線にて、乃ち左の如し。

- (一) 播磨街道 安井、岩櫻、落折を経て播磨に入り、姫路に通ずるものにて、國境まで十一里二十三丁。
  - (二) 但馬街道 岩井、蒲生を経て但馬に入り、湯村、村岡を経て豊岡に到るものにて、蒲生の國境まで七里二十一丁。
  - (三) 美作街道 河原、用ヶ瀬、智頭を経て美作に入り、播磨の上郡に到るものにて、美作國境まで十一里一丁。
  - (四) 出雲街道 日本海に沿ひ寶木、青谷を経て伯耆に入り、米子を経て出雲の松江に到るものにて、米子まで二十五里二十二丁。
- 以下附近の勝區を案内して、漸やく出雲街道に導くべし。
- 稻葉山 中納言行平の小倉百首に名高き「立わかれ稻葉の山の峰に生ふるまつとしきかは今歸りこむ」の歌は、此の稻葉山を詠じたるにて、鳥取市の東南一里五丁、岩美

郡國府村に在り、池田家代々の墓地及び國幣中社宇倍神社など其の麓にあり。中納言行平因幡の國主たりしとき、此村に官邸を構へしといふ。稻葉山には古歌多し。

忘れなんまつと名つけぞ中々に稻葉の山の峰のあき風

藤原定家

立かへりいまや稻葉の山風もまつに音する初かりの聲

藤原爲家

さらに又まつにもつらさ夕かな稻葉の山のあき風の聲

俊成母

摩尼寺 鳥取市より東方一里、岩美郡中ノ郷村摩尼山の麓にあり、喜見山摩尼寺といふ。天台宗にて帝釋天を本尊とし、毎年陰曆六月廿六日より三日間會式あり、參詣者堵の如し。建築壯大にして結構莊嚴なり。

賀露港 鳥取市の西北一里三十二丁、千代川の海に注ぐ所、鳥ヶ島其の前に當り、三百餘間の突堤は北海の風濤を防ぎ、大阪商船會社山陰航路汽船の寄航する所、不完全ながら因幡沿岸唯一の港灣にて、戸數約六百、人口約三千、一大漁村なり。近く賀露村に縣社賀露神社あり。大山祇命、猿田彦命、武甕槌命、木花咲耶姬命を合祀す。鳥ヶ島、經ヶ島の二青螺を下瞰し、遠く烟波の浩渺たる邊、汽船は煤烟を吐て去り、白帆は風を孕んで來る。風景また愛すべし。

湖山池 鳥取市より國道を西に走れば、二里にして湖山池あり。東西三十三丁、南

北二十二町、周回三里二十六丁、池中に青島、團子島等横はり、岸には蘆荻の微風に戦ぎ、渚には水禽波上に眠る、また一勝區なり。更に往くこと一里にして、國道より少しく南方に入れば

吉岡温泉 あり。上ノ湯と下ノ湯との二あり。上ノ湯は鹽類泉、下ノ湯は硫黄泉なり。鳥取市人の來り遊ぶ所、浴客常に多し。旅舎數戸あり。吉岡より二里十丁、出雲街道の寶木驛より一里二十三丁にして

鹿野町 あり、氣多郡中の一都會、山陰の麒麟兒と呼ばれたる山中鹿之助幸盛が終焉の地にて、墓は同町淨土宗幸盛寺に在り。繭、生絲、羽二重等の産地にて、旅館には鈴木、能勢、橋本などあり。鳥取市よりは六里十五町なり。

濱村温泉 湖山池の南岸に沿ひ、出雲街道の國道を西に行き、寶木村を過ぎて濱村温泉あり。一帯の海岸、温泉は田圃の間より噴出し、竹管を以て毎家に引く、浴舎は數戸あり。無色透明の鹽類泉にて、攝氏五十度の温を保ち、微毒、リウマチス等に効あり。旅客は店頭の小憩しながら、衣装を解き一浴して過ぐる者多し。

濱村以西 二里廿五丁にして青谷の停車場に達す。近頃開通したる鐵道により、此所より伯耆の泊驛まで二里の間、暫らく海岸と離れ、因伯の國境に絹見阪の險ありしも、今は汽車中に安座して、半時間に往來するを得るに至れり。

伯耆の東部

因幡より絹見阪の國境を越へて、伯耆に入れば、泊驛より橋津町まで、約二里、國道は海を北にして通じ、其の南方に東郷湖あり。泊より伯耆第一の都會なる米子町まで十六里九町、鐵道は、西の方米子より橋津町の西方五里なる由良まで國道に沿ひ、由良より東南に轉じ、東伯の一都會なる倉吉町に至り、更に東郷湖の南岸松崎村を経て青谷に達す。倉吉と松崎との間には花見越の切り割りの難工事ある外、概ね平地なりしも、松崎以東は、因幡の青谷に至る間絹見阪大隧道の難工事ありしなり。青谷以東鐵道は濱、寶木、等の諸村を經、湖山池の北方を經、賀茂港に近づきて鳥取に達せんとす。東伯地方に於て遊ぶべきの地は、東郷湖、及び倉吉町と爲す。

東郷湖

は伯耆東伯郡東郷村に屬し、一に鶴の海と稱す。國道と鐵道との間に横は

り、周回三里餘、東郷、松崎、舍人、花見、淺津等の十餘村は、其の四方を圍み、下流は橋津川と爲り、橋津村に至りて海に注ぐ。美徳、鉢伏、羽衣石、馬ノ山等の諸山は東南西の三方に聳へて、倒に影を水面に照し、激澗たる波上、小舟を浮べ、釣るべく、網すべく、また暑を避るに適す。而して最も奇なるは湖中の水底より涌出する溫泉にて、浴舎は湖上に建てられ、恰かも水中に浮ぶが如く、中にも湯島の養生館といふもの最も大に、大小十餘の客室を備へ、晴好雨奇の景、曉烟暮嵐の觀、四時佳ならざるは無し。泉質は無色透明にして酸化亞酸化鐵あり、微しく鹽味を帶び、酸化水素の微臭を放つ。溫度は攝氏四十三度、泉量甚だ多く、湖底を穿てば何所よりも噴出す。竹管を以て導くなり。近來湖の南岸なる養生館の前に松崎停車場を設けられ、山陰屈指の勝區と爲れり。名士の題詠多し。其の二三を記すべし。

東郷湖溫泉寄題

秋月天放

環水群山綠若流、此中安得泛仙舟、尤思湯島月明夜、不遜中禪湖上秋、

伯州東郷湖養生館即事

村田 保

東郷湖上湧靈泉、四面繞山景色鮮、館有養生三事好、宜吟宜酌又宜眠、